

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Ethnographic Reconstruction from the Material Culture of the Kuril Ainu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小杉, 康 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004168

物質文化からの民族文化誌的再構成の試み

——クリールアイヌを例として——

小 杉 康*

Ethnographic Reconstruction from the Material Culture of the Kuril Ainu

Yasushi KOSUGI

This essay examines the methodical and practical reconstruction of cultural ethnography from material culture, taking up, as an example for analysis, the Kuril Ainu and their material culture, which has no successors today.

First, folk tools of the Kuril Ainu kept in Japan are compiled. The main part of the compiled materials were collected by Ryuzo Torii during his ethnological investigation in the Chishima (Kuril) Islands in 1899, and the rest include what government officials collected on their way to Northern Chishima before the Kuril Ainu were forced to emigrate to Shikotan Island in 1884. Torii's ethnological investigation was done in order to prove his own theory explaining the origin of the Japanese people, and the materials (folk tools of the Kuril Ainu) collected on this occasion were influenced by this motive. He also attempted to restore and record the unmodernized life-style of the Kuril Ainu, so only traditional tools were the objects of his collection.

Considering this, on analyzing the folk tools of the Kuril Ainu compiled for this study, it is necessary to pay special attention to the nature of these materials and to amend this bias. The methods of analysis are as follows: calculation of the ratios of kinds of raw materials composing

* 共立女子大学, 国立民族学博物館共同研究員

Key Words : the Kuril (Chishima) Ainu, Ryuzo Torii, material culture, scale drawing, reconstruction

キーワード: クリール (千島) アイヌ, 鳥居龍蔵, 物質文化, 実測図, 再構成

folk tools collected by Torii, those collected by other people, and archaeological materials of the Kuril Ainu; comparison of the ratios to discover the degree of bias inherent in the materials; compensation for the bias in compilation of the tools of the Kuril Ainu.

Secondly, the tools compiled as above are classified according to their uses, characteristics of their form and manufacture are observed and recorded, and a scale drawing of representative examples of each tool is made (in the following studies dealing with individual materials, this scale drawing will be indispensable in order to introduce the typological analysis).

It becomes possible to propose a new outlook on facts for which records are lacking or insufficient in the existing ethnography. For example, (1) it can be reconfirmed that the Kuril Ainu adapted themselves to a marine environment, fishing and hunting for a certain long period, migrating from island to island; (2) while today the Hokkaido Ainu and the Kuril Ainu are recognized as having once belonged to the same cultural and ethnic group, they regarded each other as different: this is a tendency which can be traced back rather a long time in their history; (3) it is proved that iron and cotton products imported from Japan and Russia greatly influenced the traditional raw materials of everyday tools and the expression of sexual differences in their manufacture, and that at last they brought about a revolution in the whole system of folk tools; (4) in existing ethnography and historical documents, relations between the Kuril Ainu and the Sakhalin Ainu are rarely recorded, but this essay points out some direct contacts between them.

Today, when many traditional cultures are being rapidly changed and destroyed, some leaving no successors, the importance of an attempt to reconstruct cultural ethnography from a study of material culture in everyday tools will increase.

はじめに

I. 民具研究与物質文化

1. 民具とは
2. 民具研究の現在
3. 民具から物質文化へ
4. 物質文化と考古学研究法
5. 型式学的分析と実測図の作成について
6. 財のカテゴリ体系と文化の俯瞰図

II. クリールアイヌ——民族誌・考古学からの提言

1. クリールアイヌとは
2. クリールアイヌ民族誌
3. 鳥居龍蔵著『千島アイヌ』
4. 中近東起源説と2段階移住説
5. 「還元的土俗」
6. 北千島における考古学調査からの提言

III. クリールアイヌ民具類の性格

1. クリールアイヌ民具類
2. 前期民具類について
3. 後期民具類について
4. 函館博物館収蔵クリールアイヌ民具類の性格
5. 鳥居龍蔵収集のクリールアイヌ民具類の性格
6. 「還元的土俗」の実践（1）
——模型品
7. 「還元的土俗」の実践（2）
——原材料

IV. クリールアイヌ民具類の構成

1. 用途分類によるクリールアイヌ民具類の構成
2. 生業活動に関する民具類（1）
——狩猟
3. 生業活動に関する民具類（2）
——漁撈, その他
4. 家事に関する民具類——料理・食器用具（1）まないた, エベルニキ

5. 家事に関する民具類——料理・食器用具（2）発火具

6. 家事に関する民具類——料理・食器用具（3）杓子, 碗

7. 家事に関する民具類——料理・食器用具（4）木盆

8. 家事に関する民具類——育児・教育

9. 家事に関する民具類——裁縫・工作（1）織物, 針入れ

10. 家事に関する民具類——裁縫・工作（2）エベルニキ, 足型

11. 家事に関する民具類——雑事（1）編み容器

12. 家事に関する民具類——雑事（2）暦

13. 家事に関する民具類——雑事（3）三弦琴, 煙草入れ, その他

14. 服飾に関する民具類——衣服（1）鳥皮衣, その他

15. 服飾に関する民具類——衣服（2）腰帶

16. 服飾に関する民具類——装身具

17. 服飾に関する民具類——履物・被物

18. 服飾に関する民具類——携帯具（1）物入れ

19. 服飾に関する民具類——携帯具（2）火道具入れ

20. 儀礼・信仰に関する民具類（1）——削り掛け

21. 儀礼・信仰に関する民具類（2）——仮面

22. 儀礼・信仰に関する民具類（3）——祭具

V. クリールアイヌの民族文化誌的再構成

1. 生業活動と海洋適応

2. アイデンティティとクリール文様

3. 民族接触と文化伝統

おわりに

は じ め に

クリールアイヌに関する民族誌としては鳥居龍蔵による『千島アイヌ』【日本語版1903, 仏語版1919】がつとに著名である。今日では既に、独自の生活文化の直接的な継承者がいないクリールアイヌについて何かを語ろうとするならば、この著書に全面的に頼らざるをえないのが現状である。

鳥居によって著されたクリールアイヌの民族誌は、1899年のシコタン島を中心とした千島列島でのフィールドワークの記録に基づくものである。当時、日本とロシアとの領土的利権の狭間にあった千島列島、その北千島に住むクリールアイヌは、1884年にシコタン島へと強制移住させられた。北千島、シコタン島での鳥居の調査は1899年の5月から7月にかけての2ヶ月あまりのものであったが、収集された民族資料は単にクリールアイヌのインフォーマントから聞き取った情報だけにとどまらず、彼らの生活用具もこの時に収集された。その数量は80点程で、決して多い数といえるものではないが、一時期に収集されたクリールアイヌの生活用具としては、国内外に例をみない充実したものといえよう。

このように数量的にはごく限られたものではあるが、鳥居収集のクリールアイヌの生活用具は彼の民族誌に記録されたクリールアイヌの生活文化の内容とは異なった情報を我々に提供してくれるであろう。それは『千島アイヌ』の記述範囲からは抜け落ちてしまった情報であったり、また当事者の言説には本来現われてこないで、物質文化にこそよりよく具現化された情報であるはずである。

様々な経緯でこれまでに収集されてきたクリールアイヌの物質文化——それは民具類であったり考古資料であったりするが——は、それぞれの収集者がどの程度自覚していたかの差はあるものの、特定の文脈の下に収集された資料、即ち「翻訳」された姿であることに変わりない。本研究が目指すべきところは、それらの翻訳から直ちに新たな翻訳をつくり直すことではない。各種翻訳を突き合わせてありうべき「語彙」をできるだけ網羅し、当事者の論理に則したかたちでそれらを配置し直す。そこからいかなる解釈を引き出すかは、やはり1つの翻訳の営みであるが、そのような翻訳の行為を保証する物質文化の体系作りが第一義的に必要なのである。

今日、急速な勢いで伝統的な生活文化が変容あるいは崩壊しつつある多くの民族において、さらには既にそれらの直接的な継承者を求めることができなくなってしまった民族においてはなおさらのこと、彼らの生活用具をはじめとした物質文化の体系化

は上記の意味で今後その重要性をさらに高めるであろう。

本稿では以上のような観点から、鳥居による収集品を中心とした国内にあるクリールアイヌの生活用具を集成し、まず収集資料の性格を検討し（第Ⅲ章）、次に用途別に分類した個々の生活用具の内容を整理しながら、相互の関連を検討することによって（第Ⅳ章）、「モノによる文化の俯瞰図」へと全体を近付けてゆきたい。そして物質文化からの民族文化誌的再構成の試論として、鳥居による民族誌の記述内容と対照しながら、クリールアイヌの生業、アイデンティティ、民族接触に関して言及したい（第Ⅴ章）。尚、主題にはいる前に、民具研究の現状を概観すると同時に、本研究の方法的な立場を明確にし（第Ⅰ章）、またクリールアイヌに関するこれまでの研究成果から得られた課題を整理しておくことにする（第Ⅱ章）。

I. 民具研究と物質文化

1. 民具とは

鳥居龍蔵がクリールアイヌの生活用具を収集した時代には、未だ「民具」という用語も概念も登場してきていない。しかし、後に論じるように鳥居は「還元的土俗」を目指して生活用具の収集を実施しており、その結果、その収集品の内容はほぼ民具に相当するものであるとっていいだろう。そこで、まず民具の概念がいかなるものであるかをここで確認しておく。

民具の要件としては、例えば手作り、使用者が民衆であり、専門の職人が作ったものではなく、素材が草木・動物・石・金属・土などであり、化学製品は含まれない、等々が挙げられることがある【宮本 1979: 76】。また、実際に使用されてきた伝承性のある特定の形態をともなった物質、といった幅のある定義がなされたり【湯川 1976: 5】、また「われわれの同胞が日常生活の必要から技術的に作りだした身近卑近の道具——庶民の生活用具全般の呼称」というような概括的な内容の場合もある【アチック・ミュージアム 1936: 1】。民具の定義は研究者によって多少の振れ幅のあるものとなっているが、何が民具でないのかの意見はほぼ一致しているといえるだろう。例えば、カンテラや付木は民具でありランプやマッチはそうではない、即ち機械製品や工業製品は民具から外される傾向がある【宮本 1979: 71】。また、民具研究の目的が生活文化の解明に置かれる一方で、上記のような民具の定義に準拠するならば、その目的は自ずから伝統的な生活文化、古い生活文化の解明へと実質的には移行してい

くといえるであろう。

さて、民具研究においては定義内容の子細については議論の余地を残しながらも、以上のような民具に対する認識が共有されているが、本稿では鳥居によって収集されたクリールアイヌの生活用具、及びシコタン島への強制移住以前に開拓使や根室支庁によって収集（後述）された生活用具を概括的に「民具類」と表記して、以下の検討を進めることにする。

2. 民具研究の現在

民具を研究対象とする場合、先に確認したような定義の問題もさることながら、実際の個々の民具についての製作及び使用に関する技術的な知識の理解や、場合によっては研究者自身のある程度の技術的な習熟が不可欠となってくる。この技術的知識が当事者側のもの、即ちエスノサイエンスにおける技術文化であったり、あるいは観察者側のもの、即ち近代社会における専門化された技術文化であったとしても、従来通りのインフォーマントからの聞き取り調査だけでは正確に理解することが難しい一面がある。このようなことが背景にあって、従来の民俗学においては民具に対する認識や取り扱い方が不十分となり、これがかつて民具研究が民俗学の中から引き離され、改めて「民具学」として提唱された理由でもあったといえるであろう。

さて、民具研究にしろ、また民具学にしろ、民具を研究対象とした場合の研究方法には、共通する2つの傾向が見受けられる。またそれは、主な研究対象が遺物や遺構である考古学においても当てはまる内容であり、その意味では広く物質文化一般に通じる研究方法として発展させることができるであろう。

ここで述べた2つの傾向の具体例を、例えば民具研究における河岡武春による「基本民具」の考え方[河岡 1972a, 1972b]と、小野重朗の「標準民具」の考え方[小野 1972]との対比に見ることができる。それぞれの内容を一言で要約すると誤解が生ずる危険性も高いが、それを恐れずに敢えて試みるならば——共に地域の生活文化を簡明に表現しうる民具を選定し、その地域の特徴を明らかにし、またそれによって地域ごとの比較を行っていくものではあるが、その際に選定される民具は「基本民具」では生産用具を中心とした幾種類かの民具の組み合わせであり、「標準民具」では特定の地域だけに見られる民具が指標としてまず選定されることになる。そしてそれぞれの研究方法には、次に続く独自の手順が準備されているのではあるが、ここでは複数の民具の組み合わせを問題とする方法と、特定の民具を指標とする方法とを対比することによって、この問題を発展させてゆきたい。

特定の民具を1つの指標として、その有無や（数量的な、あるいは形態的な）変異に着目することによって、特定の地域を抽出したり、さらにそれを区分したりすることが可能である。ただしこの段階では1つの「現象」を指摘したに過ぎず、抽出された空間的な広がりを実際には何を反映したものであるかは未だ不明のままである。しかし、その広がりが既知の地域や集団関係とたまたま一致、ないしは近似する場合などは、問題とする特定の民具がその地域なり集団関係なりの特性として理解されて終わる結果となる。また、他の民具の空間的な広がりとは一致、ないしは近似する場合には、両民具間の機能的な関連が検討され、仮にそこに有意な関連が見られなかったとしても、複数の民具の空間的な広がりによって抽出された範囲は、より実在性の高い地域として解釈されてゆく。

一方、複数の民具の組み合わせを問題とする場合では、そこに含まれる民具どうしがいかに機能的に結びついているのか、さらにそれらに当事者の行為や観念がどのように介在してくるのが焦点になってくる。そして次の方法的手順としては、特定の機能的な側面からの解釈がなされた複数の民具の組み合わせが、どのような空間的な広がりを示すかが調べられる。ただし、このような検討を効果的に実施するためには、対象とする民具各種の数量的な把握が必要である。しかし、数量化には未だ多くの問題が残されており、実際には定性的な解釈にとどまる場合が多い。そのために、複数の民具が問題とされ、それらの特定の組み合わせが一定の範囲に広がっていたとしても、その広がりは特定の機能的な側面からの解釈が成り立つ範囲ではなく、単に1つの「指標」としての複数の民具の組み合わせの空間的な広がり過ぎないのである。即ち、実質は先の「特定の民具を指標とする方法」と変わるところのないものになっている。

3. 民具から物質文化へ

では、複数の民具の組み合わせを、当事者の行為や観念と関連させたいという機能的な側面から解釈する研究方向を先に示したが、このことは実際に可能であろうか。民具の定義としては、機械製品や工業製品は民具から除外されることになるが、一方で民具研究の目的が生活文化の解明に置かれるのであれば、その目的を遂行するためには、ここで定義される民具と、民具に該当しない機械製品や工業製品などの生活用具とが、同時に検討されなければならないはずである。またそうでなければ、そこで機能的な側面からの解釈を行うことは難しいであろう。ただし、実際にこのような研究が実施された場合、それが「民具」研究と呼べるか否かが逆に問題となってこよう。

このような懸念があるからこそ、民具研究の射程を伝統的な生活文化や「古い生活文化」[河岡 1972a: 9] のうちにとどめるべきであるとの見解が示されることがあるのだろう。

民具のみが生活用具の全てであるような暮らしを、今日の日本社会においてはもちろんのこと、「民具」の用語が登場した1930年代においてさえも、実際に求めることは現実的でない。しかし、以上のような提言は「民具」の概念と用語を否定することではなく、民具を含めたうえでの生活用具の全般を対象にしうる研究方法の模索を要求するものとして理解されるべきであろう。ここに研究対象を民具から物質文化に移行させることの意義がある。尚、このような問題はこれまでに民俗学ないしは民具研究の側からは当然のこと、文化人類学の側からも幾度か議論されてきたものである[加藤 1978; 祖父江・大給・中村・大塚 1978]。

4. 物質文化と考古学研究法

「わが国の民族学において物質文化研究というとき、それはイコール民具研究であった」[祖父江・大給・中村・大塚 1978: 299]。「…文化人類学全体の流れと民具研究の流れとは、全く水とアブラの如き関係」である[祖父江・大給・中村・大塚 1978: 288]。このような状況を踏まえたうえで、文化人類学の側からは、今後、文化人類学として物質文化研究を実施することの意義が次のようにまとめられている。

まず、物質文化と社会組織との関連性を重視する点にその特色が示されるべきである。また、文化全体のなかにおける物質文化の位置付けを明確に示すことも、その重要な役目となる。そしてやや具体的ではあるが、モノの変化が与える人への影響の分析や、技術そのもののフォーク・システムについての分析なども文化人類学に相応しい課題である。さらに、調査方法としては悉皆調査の実施や、先に論じたように分析対象を民具に限らず、美術工芸品、工業製品、大規模な施設、設備へと拡張してゆく点が指摘されている[祖父江・大給・中村・大塚 1978]。尚、このような研究方針の前提となる物質文化の定義としては、「人類が生きていくための物的手段」という狭義のものがとられている[祖父江・大給・中村・大塚 1978: 283]。

さて、以上に掲げられた研究方針に含まれる個々の検討項目は、どれもフィールドワークの場面において収集することが可能な情報である。しかし、現在、当事者からの情報の収集も実質的には既に不可能に近く、かろうじて物質文化が残されただけの文化も多くある。このような条件のもとでは、上記の研究方針は理念的なものとしては参考になるが、実際の分析にはより物質文化に即した方法が必要となってくるはず

である。この要請に、考古学において鍛えられてきた型式学的分析をはじめとする一連の研究手法の導入が有効であると考えられる。

5. 型式学的分析と実測図の作成について

先に「民具研究の現在」の特徴の一翼をなすものとして挙げた「特定の民具を指標とする方法」には、考古学研究法における型式学的分析を直ちに導入することが可能である。指標として選定された民具は、その形態的特徴と製作技術的特徴とからいくつかの類型に分類され、類型間の形態的・技術的変異についての型式学的連続性が検討されることによって、各類型は発生的により原型的なものから漸次的な変化形態へと配列され、同時にそれらの変化が発生した技術的な要因についての解釈がそこに付けられることになる。また、各類型の空間的広がりを調べることによって、指標とする民具の発生と伝播の過程も復原しうる場合もある。

このような型式学的分析をより客観的なものとし、またその効果を最大限に発揮させるためには、分析対象となる物質文化の実測図の作成が不可欠である。観察者の問題意識が凝集された実測図は、対象の形態的特徴だけを描き記したものではなく、製作から使用、そして廃棄に至る過程に生じた形状の変化を技術的観点から評価したラインで表現したものであり、ここが設計図とは根本的に異なる点でもある。また、それは第三者によって追検証されうるものであり、このことが型式学的分析の客観性を保証することになる。

6. 財のカテゴリー体系と文化の俯瞰図

「特定の民具を指標とする方法」への型式学的分析の導入だけであっては、文化人類学として物質文化研究を実施する意義が達成されたとはいえない。民族資料としての民具をはじめとする物質文化の分析に型式学的方法を導入するのであれば、「特定の民具を指標とする方法」によって特定の地域を抽出することから始めるのではなく、むしろ民族的ないしは文化的に措定される地域、その内にある主要な複数の物質文化に対して、先のような型式学的分析過程を導入したほうが有効であろう。そして、その前提としては、措定される地域内に存在する各種物質文化のリストを整理し、物質文化間の当事者における社会的な価値関係、所謂「財のカテゴリー体系」【富尾・上野 1983: 89】を明らかにしておく必要がある。それは帰属するカテゴリーの違いによって、物質文化の形態的・技術的変化の速度が異なることが予測されるからである。また、民族資料としてもはや物質文化だけしか得られないような文化については、

各種物質文化のリストの作成と個別の物質文化についての型式学的分析とを行うことによって、むしろ欠落してしまった財のカテゴリー体系を復原しうることも期待される。

クリールアイヌの物質文化を取り扱う場合、各種の物質文化の数量が少ないので直ちにそこに型式学的分析を導入するのは必ずしも効果的ではない。数量的な保証を確保するためには、各種の物質文化ごとに、北海道アイヌやサハリンアイヌにおける同種の物質文化をも含めたうえでの型式学的分析が望ましい¹⁾。よって、本稿ではクリールアイヌの物質文化のうちでも民族資料としての生活用具（民具類）を集成し、用途に即した基本的な分類を行うことにする。これはクリールアイヌ文化のモノによる俯瞰図となるであろう。

また、個別の生活用具の型式学的分析は別の機会に行うこととして、代表的な生活用具については型式学的分析に欠くことのできない実測図を作成する。そして、以上の作業過程で物質文化から得られた情報を整理し、その内容を既存のクリールアイヌ民族誌と対照させることによって、現時点で可能なクリールアイヌの民族文化誌の作成を試みることにする。

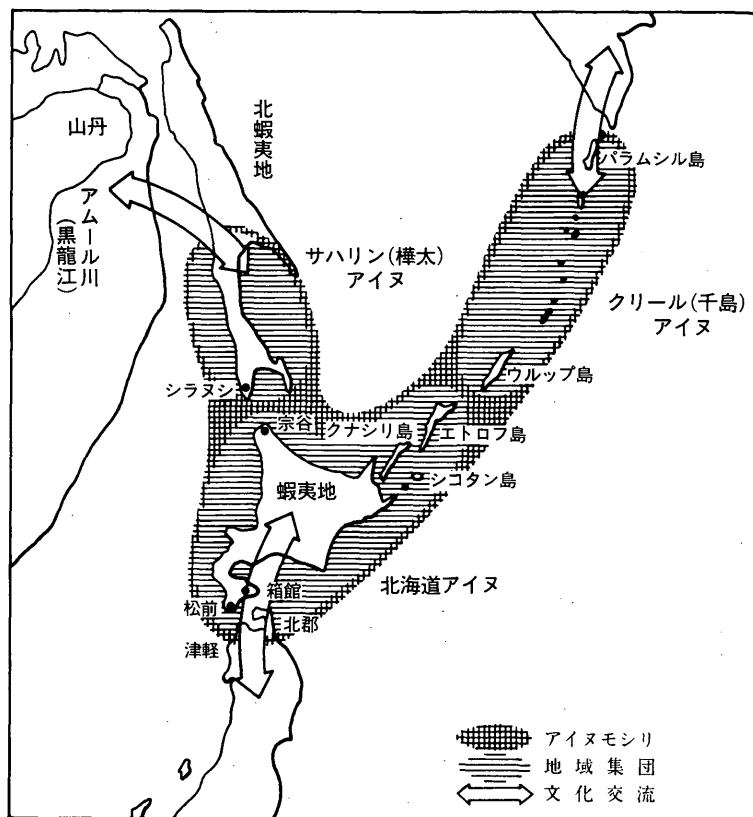
Ⅱ. クリールアイヌ——民族誌・考古学からの提言

1. クリールアイヌとは

アイヌ民族は北海道とエトロフ島やクナシリ島などの南千島に居住する北海道アイヌと樺太南半部のサハリン（樺太）アイヌ、そして中部・北千島のクリール（千島）アイヌとに区分される【鳥居 1913;大塚 1993b】（図1）。近代国家としての日本とロシアとの領土の狭間に位置した樺太と千島列島は、あるときは分割され、またあるときは交換され、そこに生きる人たちの生活を苛酷なまでにさいなんできた【中村 1904;菊池 1994】。

千島列島の場合、1771年のウルップ島事件や、1803年の幕府によるエトロフのアイヌのウルップ島への渡航の禁止、1811年のゴロヴニン事件を経て、ついには1854年の日露和親条約調印によって、エトロフ島とウルップ島とを境として分断され、南千島を日本が、中部・北千島をロシアが領有することになる。以後、南千島に居住していたアイヌの中部・北千島への渡航は中断され、中部・北千島を中心に居住するアイヌ

1) このような観点から型式学的分析を実施したものに「アイヌの杓子」【小杉 1996】がある。



(注)アイヌの地域集団名称は20世紀以後のもの

図1 「19世紀前後のアイヌモシリ」(大塚 [1993b] より一部改変転載)

と南千島のアイヌとの日常的な接触の機会が断たれ、前者のロシア化は一層促進され、一方で後者は北海道アイヌとの共通性を強めることになる。

よってクリールアイヌとは、千島列島がエトロフ島とウルップ島との間で実質的に南北に分断される19世紀初頭以降では、特に中部・北千島のアイヌを指すのが妥当である。尚、拠点的な居住地はその後、次第に北千島へと移っていき、中部千島は彼らの出漁(猟)区域となっていく。

1875年、日露両国間で樺太・千島交換条約が成立し、中部・北千島が日本の領有となると、一部のクリールアイヌはロシア領のカムチャッカへと移住する。その後、明治政府によって1884(明治17)年には、北千島のシュムシュ島に残留したクリールアイヌは南千島のシコタン島へと強制移住させられることになる。その際の人口は97人であった。シコタン島では彼ら本来の生業である狩猟・漁撈とはかけ離れた農耕民化

が強要され、また生活環境の劇変は彼らの健康を害し、島での人口は急速に減少する。1930年代までに人口は半減し、1945年のソ連軍による千島占領後は、南千島に居住する北海道アイヌをはじめとし、シコタン島のクリールアイヌは北海道へと再度の移住を強いられる結果となった。現在、クリールアイヌ文化を継承する人たちはいない。

2. クリールアイヌ民族誌

現在、インフォーマントをえられないクリールアイヌにあつては、残された数限られた民族誌あるいはそれに準ずる文献記録と物質文化であるクリールアイヌ民具類から、その文化を再構成するより他に術がない。クリールアイヌに関する民族誌的記録は、彼らがシコタン島に強制移住（1884年）させられる以前に記録されたもの、即ちより伝統的な生活をおくっていた時期のものと、強制移住後に主にシコタン島で採録されたものとに分けて捉えることができよう。

1884年以前のものとしてはクラシェニンニコフ著『カムチャッカ地誌』（1755年）、ポロンスキー著『千島誌』（1871年）が18世紀から19世紀にかけてのクリールアイヌに関する記述として最も充実している。『カムチャッカ地誌』では、千島列島の最北に位置するシュムシュ島並びにカムチャッカ半島の南端ロバトカとに居住するクリールアイヌと、パラムシル島並びにオンネコタン島に居住するクリールアイヌとが対比される。前者は習慣の面で後者からの若干の影響を受けてはいるものの、カムチャダール語を話し、多くの習俗はカムチャダールと共通するものであり、本来はカムチャダールであること、よって両者は同一民族ではないことが論じられている【村山 1971: 1-72】。一方『千島誌』では、コサック兵がカムチャッカに進入してきた当時、即ちクラシェニンニコフの記録がなされた時期、あるいはそれを幾分遡る時期には、カムチャッカ半島の南端からシュムシュ島、パラムシル島に居住していたクリールアイヌは「ウイウトエスケ」と呼ばれ、それよりも南に居住するクリールアイヌが「アウンクル」と呼ばれていたことが記録されている。前者はカムチャダールとの強い類縁性を示すが、むしろクリールアイヌ化したカムチャダールというべきであることが論じられている【鳥居 1903: 24-26】。尚、H. J. スノーの記録は1870年代から1890年代に及ぶものであり、ちょうどシコタン島への強制移住の前後の年代にあたるものである【スノー 1897, 1910】。

1884年以後のものとしては、移住直後の1888年の記録をとどめた R. ヒッチコックによる「エゾ地の古代堅穴居住者」【ヒッチコック 1892】、シコタン島で形質人類学の調査を実施し、身体形質の上でクリールアイヌと北海道アイヌとは等しいものであ

ることを示した小金井良精の研究報告 [KOGANEI 1894] などが比較的早い時期のものである。

移住以後の記録ではあるが、クリールアイヌ民族誌として最も著名なものは鳥居龍蔵の2著 [鳥居 1903, 1919] である。1899年の5月から7月にかけての2ヶ月あまりの調査期間であったが、シコタン島のみならず、インフォーマントのクリールアイヌを携えて故地である北千島へも赴き、移住以前の伝統的な生活の復元的な記録を試みた充実した内容の記述となっている。また、林欽吾は1934～1938年にシコタン島を中心とした数回におよぶ調査を重ね、併せてこれまでの民族誌的記録を整理して、「南千島色丹島誌・色丹島のアイヌ族」[林 1940] というクリールアイヌに関する総合的な見解をまとめている。

3. 鳥居龍蔵著『千島アイヌ』

『千島アイヌ』[鳥居 1903] と東京帝国大学理科大学紀要「考古学民族学研究・千島アイヌ」(仏語) [鳥居 1919] とが鳥居龍蔵によるクリールアイヌ民族誌の2著である(以下、前者を日本語版『千島アイヌ』ないしは単に「日本語版」、後者を仏語版『千島アイヌ』ないしは単に「仏語版」と略記する)。鳥居は東京帝国大学理科大学人類学教室教授である坪井正五郎によって命じられ、1899(明治32)年に千島列島で調査を行うが、前著はそのすぐ4年後に刊行されたものである。鳥居自身によって「前編」[鳥居 1904: 425] と呼ばれる日本語版は、「総論」の他、10章からなる。アイヌのコロボックル伝説との関連で併載された「第10章 オンキロン人種」(1896年、東京人類学会雑誌128に発表したチュクチの伝説的な先住民に関するもの)と書下ろしの「第7章 千島アイヌの土俗(序論)」とを除くと、他は全て調査直前の1899年5月から1901年までに発表された千島列島調査に関する各種論文を編集・再録したものである。「後編」[鳥居 1904: 425] となる仏語版は、調査から20年を経て発表される。全体の三分の一の分量を占める「第20章 千島クシ=アイヌの習俗」は2頁足らずであった前編の「第7章 千島アイヌの土俗(序論)」の本論にあたるものであり、後編の実質的な柱となっている。40項目に分れる第20章の内容は、調査時に収集したクリールアイヌ民具類の解説である。物質文化に対する鳥居の民族学的な態度が遺憾なく発揮されたところであり、クリールアイヌに関する他の民族誌には見られない特徴となっている。本稿で取り扱う民具類の主体は、鳥居によって収集されたこの一群の物質文化である。

前編との最大の相違は、その間に実施された満州・蒙古・朝鮮の調査を通して培わ

れた日本人の起源に関する考え方が基底に据えられている点である。そもそも坪井正五郎によって命じられた千島列島の調査目的の主眼が、コロポックル伝説の真偽を確認するための日本石器時代人種論争の文脈にのるものであるだけに、それは当然のことであるかもしれない。前編と比べ各章の記述内容は全体としてより詳しく丁寧なものとなっているが、反面、日本人のツングース起源観を前提としてアイヌの起源に関する見解を立証するための論調には、調査後直ちにまとめられた前編に見られる簡潔な表現と記録性が薄れている。

尚、鳥居のこの2著には、同一の事柄についていささか齟齬が生じているところがある箇所が見受けられる。その理由として次の2つを指摘できよう。1つは上述したような鳥居自身の見解の進展にともなう解釈の変更によるものである。後編の伝語版はT. R. P. Ernest Auguste Tulpinによって伝語訳されたものであるが、専門性の高い記述であるだけに翻訳の際の表現の仕方の違いが内容のズレを生んでいるところもあるようだが、これがもう1つの理由である。後にこれらの箇所を参照する際には、前後の文脈からより妥当な方を採用することにするが、判断が付き難い場合は記録性の高い前編の方に重きを置くことにしたい。

4. 中近東起源説と2段階移住説

鳥居のクリールアイヌ民族誌を参照する際の留意点をここで整理しておこう。1つは、先にアイヌの起源に関する見解を立証するための論調が後編では全体にわたって顕著であると述べたが、その見解とはアイヌ中近東起源説、並びに北海道—千島2段階移住説というべきものである。アイヌ中近東起源説は、その起源地をペルシア南部周辺に求めるもので、そこからユーラシア大陸を横断し、日本列島の九州から本州へとたどり着いたとする考えである。2段階移住説とは——後に大陸から本州へと移住してきたツングースによって追い立てられた日本列島の先住民であるアイヌの一群は、やがて北海道へと移住する（第1次移住民）。本州に残留していたアイヌの一群も、さらに後代になって本州から追い立てられて北海道へと移住することになる（第2次移住民）。すると第1次と第2次の移住民との間で玉突き的な衝突がおり、本州に住み着いたツングースすなわち日本人と接触して金属器を手にしていった第2次移住民によって、第1次移住民は北海道から追い立てられ自然環境が厳しいさらなる北の地、千島列島へと移住していった——というものである。

北海道アイヌ及びクリールアイヌの起源について、現在このような見解を支持するものは皆無であろうが、鳥居のクリールアイヌ民族誌、特にその後編を参照するうえ

では、この点に留意してそこから情報を引き出さなくてはならない。つまりこの民族誌には、両説を前提とした1) アイヌは南方(本州を含む)からの文化要素を基本的に受け継ぐものであり、2) 北海道アイヌよりもクリールアイヌの方が古い、すなわち伝統的な生活形態を維持している、という解釈の準拠枠があるのであり、情報を読み取る際にはこの準拠枠を取り外すことが必要になってくる。

5. 「還元的土俗」

民族誌の作成にあたっては、往々にしてより伝統的な生活形態が指向される傾向にあることを指摘できるが、この傾向は日本における民族学の揺籃期からのことであるようだ。鳥居は次のように述べている。

……出来得べきだけ、彼等の土俗中より固有の土俗を還元して見ました。……余がこれから記載せんとする土俗は、決して現今彼等の示せる土俗ではなく、還元した土俗であります【鳥居 1903: 77】(傍点は原文のまま)。

これが前編中の唯一の書下ろしである「第7章 千島アイヌの土俗(序論)」で論じられている点が重要である。つまり、鳥居が収集したクリールアイヌ民具類の解説である後編の「第20章 千島クシ=アイヌの習俗」の記述は、このような性格のものである。同時に、クリールアイヌ民具類の収集活動にも同様な配慮が払われていたことが予測される。それらを用いて民族文化誌的再構成を実施する際にはこの点に十分に留意せねばならない。クリールアイヌ民族誌と民具類とのうちで、どこまでが1899年時点でのシコタン島で暮らしているクリールアイヌの姿か、また何が移住以前の北千島での生活の姿かが、一つ一つ検証されねばならないだろう。

尚、この点については林欽吾の「南千島色丹島誌・色丹島のアイヌ族」【林 1940】が参考になる。クリールアイヌに関する民族誌的記述が、ロシアによるカムチャッカ侵略当時(18世紀)、1884年のシコタン島移住以前の「北千島時代」、移住以後から調査時の1930年代までのいわばシコタン島時代に概ね区分されているので、鳥居の「還元的土俗」と対照することができよう。

6. 北千島における考古学調査からの提言

さて、千島列島での考古学的調査としては、北千島に関する研究が比較的に進んでいる。特に馬場脩による一連の発掘調査(1933~1938年)によって、北千島では「オ

ホーツク式土器時代」,「内耳土器時代」,「末期」の3時期が設定され、またその考古学的文化内容が明らかにされている。年代観については今後の検討にまっところが大い。北海道の編年研究を参照するならば、概ね道東のオホーツク文化は5・6世紀～13世紀に、内耳土器の時代は14～15世紀といった年代観が与えられているが、北千島ではこれよりも全体的に年代が下る傾向にある。例えば北千島の内耳土器の下限の年代としては17世紀中葉から18世紀頃が示されている[辺泥・福田 1974: 95]。年代的には文献資料によって遡上できる年代と結び付けることが一応可能な状況である。

さて、最古の文化とされたオホーツク式土器時代は、道東のオホーツク文化とは様相をだいぶ異にしており、住居形態や炉址、自然石を利用した石ランプ、逆刺のある骨鏃、銚頭などはむしろカムチャッカとの関連が強うかがえる。これについて、この時期の北千島にはカムチャダールに代表されるようなカムチャッカ系統の人びとが居住しており、オホーツク式土器に代表されるようなオホーツク文化の要素を部分的に取り入れることによって、北千島の固有な文化をつくりあげていたとする見解も示されている[菊池 1972: 81]。これに反して、北海道から南千島を経て北進したオホーツク文化系統の人びとが、やがて北千島の自然環境に適応し、周辺のカムチャダールなどとの民族接触を経た結果であるとの解釈も提示されている[馬場 1939: 114; 山浦 1989: 301]。またその際にはオホーツク文化の民族的帰属としてサハリンアイヌ系統の人びとが想定されることもある[山浦 1989: 307]。

続く内耳土器時代には、前代から系統的な連続性を保つ石ランプや石ナイフ、断面三角形の磨製石斧などの一群も存在するが、内耳土器に代表されるような北海道系の要素やクリールアイヌの物質文化につながる要素なども登場してくる。またその分布はカムチャッカ半島の南端まで広がることが確認されている。これについては、北海道から南千島を経て新たに到来したアイヌが、前代からの「北千島オホーツク文化」の人びとやカムチャダール、ロシア人との民族接触を遂げた結果であり、この「内耳土器人」こそがクリールアイヌの祖先であるという見解が示されている[馬場 1939: 115]。

以上、北千島を中心とした考古学的成果は、今後検証すべき課題を多く残しながらも、クリールアイヌの民族あるいは文化的な系譜関係について年代を遡り、いくつかの可能性のある解釈を提起している。検証課題の一つには、両者の類似性が比較的に高いがゆえに、実際には具体的な分析・検証がなされることのなかった内耳土器時代の物質文化とクリールアイヌ民具類との検討が含まれている。当然のこととして考古学では直接的な分析対象が物質文化であるために、発掘調査で得られた種々の

データと収集されたクリールアイヌ民具類とを、型式学的分析をはじめとする考古学研究法では同一の基準で比較検討することが可能である。物質文化から民族文化誌的再構成を実施する際に最も有効性を発揮しうる一分野となつてこよう。

Ⅲ. クリールアイヌ民具類の性格

1. クリールアイヌ民具類

前章に述べたように、現在、クリールアイヌ文化を継承する人たちはおらず、現存する資料群がその全てということになる。他のアイヌ民具類と同様に、国内をはじめとしてヨーロッパ諸国やロシア共和国、アメリカ合衆国などにも分散して収蔵されているのが現状である。本稿では国内に収蔵されている民具類を対象として、その全体像を把握するとともに、それらを用いて物質文化からの民族文化誌的再構成を試みたい（表5 クリールアイヌ民具類リスト参照）。

クリールアイヌ民具類は、彼らが過した苛酷な歴史に対応して、シコタン島移住以前に収集された民具類と移住以後の民具類とに分けられる。ここではこれらを前期民具類と後期民具類と呼ぶことにしよう。また、北千島の考古資料の中には、その使用者や製作者を個人のレベルで比定しうるほど年代的に新しいものも含まれている。これなども民具類（前期民具類）に準ずるものとして把握・整理する必要がある。しかし、今回の検討からは一応除外し、特に論究すべきものだけを個別に取り扱い、その全体像の把握は別の機会に譲りたい。

2. 前期民具類について

今回確認することができた国内にあるクリールアイヌ民具類は156点である。収集時期が判明しないものも若干数あるが、大半は後期民具類に属するものである。前期民具類は全体の約15パーセントに過ぎない。1875年の樺太・千島交換条約締結以来、開拓使あるいは根室支庁によっておおそ隔年ごとに千島巡航が実施されるが、多くはその際に収集されたものである。また、当時いくつかの博覧会が催されるが、そこに出品されたものがそのまま各所で保管されたものもある。その他に土産物としてエトロフ島や北海道に渡ったものが収集されたものも含まれている。

3. 後期民具類について

後期民具類は当然のこととして、シコタン島で収集されたものがほとんど全てであるが、やはり土産物として島外に出たものが収集されたものもある。中心をなす資料は、鳥居龍蔵による1899年の調査の際に収集されたものである。この民具類は東京大学理学部人類学教室で長らく保管されてきたが、1975年に国立民族学博物館（民博）に寄託され、現在は民博で保管されている。鳥居のクリールアイヌ民具類は80点である。このうちの2点がシュムシュ島、1点がラショワ島、1点がエトロフ島で収集されたものであり、ラショワの1点は前期民具類に属する可能性がある。（尚、民博寄託以前に、徳島県立鳥居記念博物館に貸し出されたクリールアイヌ民具類3点（Fa28, Fa71, Fa74）²⁾があり、現在同館で展示されている。）民博にはこの他に鳥居収集民具類ではないがシュムシュ島、バラムシル島等で収集された金属製品も7点（民博標本番号 K2358, K2365, K2369, K2370, K2371, K2372, K2390）³⁾保管されているが、これらは移住以前のものである。

この他に、馬場脩、林欽吾、杉山寿栄男などの収集品もあるが、戦災で失われてしまったものも多いようだ [名取 1959: 99]。このうち馬場の収集品は、膨大な数のアイヌ民具類を中心とした「馬場コレクション」の一部として、現在は市立函館博物館で保管されている [長谷部 1992]。馬場コレクションの千島関連資料の中には、クリールアイヌ民具類と考古資料とが含まれている。数量的には考古資料が大半を占め、クリールアイヌ民具類としてはシコタン島で収集した6点を数えるだけである。

4. 函館博物館収蔵クリールアイヌ民具類の性格

ここで取り扱うクリールアイヌ民具類は収集年代が古いものであり、今日的な観点から必要不可欠である情報の多くが欠落していることもやむをえない面もあるが、収集者の収集基準と収集品に見られる偏向の程度は確認しておかねばならない。

まず、市立函館博物館に収蔵されているクリールアイヌ民具類を例にして、資料群の性格を検討してみよう。現在、函館博物館に収蔵されているクリールアイヌ関連資料は、先に紹介した馬場コレクションに含まれる一群と、開拓使千島巡航の際に収集

2) 「Fa 番号」は東大原簿番号を示す。

3) 「K 番号」、「H 番号」は民博標本番号を示す。また以下に登場する「函 番号」は「函館博物館収蔵番号」の、「北 番号」は「北大農学部博物館収蔵番号」の、「開 番号」は「北海道開拓記念館収蔵番号」の、「旭 番号」は「旭川市博物館収蔵番号」の、それぞれ略号として用いる。

表1 函館博物館収蔵クリールアイヌ民具類内訳

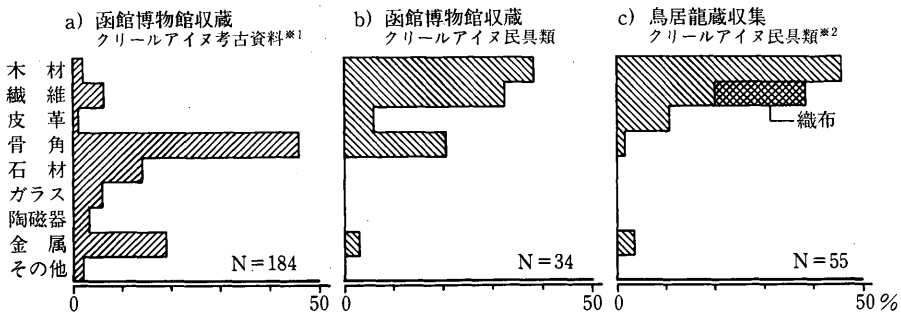
	前期民具類		後期民具類		(小計)		(合計)
馬場コレクション考古資料	184※1		0		184		218※3
馬場コレクション民族資料	0	20	6	14	6	34	
開拓使その他の民族資料	20※2		8		28		

※1 函1182 (木偶) を含む値である。
※2 函988 (三弦琴), 989 (楽器), 登録番号欠 (子供用獣皮服), 以上の3点を加えた値である。
※3 函1084, 1140, 1162~1169, 1171, 1211, 1216 は他の資料との重複であり, 欠番となっている。函1036(玉)は誤登録であるため当該数値からは削除。収蔵番号の訂正は, 函館博物館長谷部一弘氏 (学芸係長) からのご教示による。

された前期民具類の一群, これらに少数の個人寄贈資料等を加えたものから成っており, 総数218点である (表1) [市立函館博物館 1979: 62-68]。前述の通り馬場コレクション・クリールアイヌ関連資料の内訳は, シコタン島で収集された後期民具類6点と主に北千島で採集した考古資料にあたる184点で, 総数190点である。(但し, 『市立函館博物館蔵品目録1・民族資料編7』のクリールアイヌ関連の馬場コレクションには, 考古資料としては土器と石器とが含まれてはおらず, 骨角製品・金属製品・繊維製品等のみが登録されている。) 開拓使その他のクリールアイヌ民具類の内訳は前期民具類20点, 後期民具類8点, 総数28点である。両者を合わせると民具類34点 (前期民具類20点, 後期民具類14点), 考古資料184点となる。以上の民具類と考古資料と

表2 函館博物館収蔵クリールアイヌ民具類材質別比率

材 質	【考古資料】		【民 具 類】	
	点 数	%	点 数	%
木 材 製 品	4	2.2	13	38.2
繊 維 製 品	12	6.5	11	32.4
皮 革 製 品	2	1.1	2	5.9
骨 角 製 品	84	45.7	7	20.6
石 製 品	26	14.1	0	0
ガラス製品	11	6.0	0	0
陶磁器製品	6	3.3	0	0
金 属 製 品	35	19.0	1	2.9
そ の 他	4	2.2	0	0
合 計	184	100.1	34	100.0



※1: 土器・石器(利器)を除いた値である。 ※2: 模型品13点・原材料3点を除き、徳島博展示の3点を含めた値である。

図2 クリールアイヌ民具類材質別比率

の材質別の割合を整理したものが表2・図2a・bである。

考古資料では骨角製品が最も高く約46%、続いて金属製品の約19%、石製品の約14%で、上位3項目で8割近い値となる。ガラス・陶磁器と有機質の木材・皮革・繊維製品とがそれぞれ約1割という値になっている。一方、民具類では有機質の木材・皮革・繊維製品が約77%、骨角製品が約21%、金属製品が3%の割合になっている。このように考古資料と民具類とでは極めて対照的な材質構成になっている点が注目されよう。

考古資料で有機質の製品が少ないのは通有の傾向であるが、民具類の値と比べるとその差は歴然としている。考古資料で圧倒的に高い割合を示す骨角製品が民具類で少ないのは、時間の経過にともなう文化要素の変化を示すものと推測できる。石製品についても同様のことがいえよう。骨角製品・石製品の減少に反比例して登場してくるものの一つに金属製品が考えられるが、民具類ではかえって考古資料よりも小さい値となっている。また、ガラス・陶磁器が考古資料には見られるが、年代的に下る民具類で欠落している。一見、時代を逆行するかのようなこの値の開きは何を意味しているのだろうか。民族誌からも知ることができるよう、クリールアイヌにとっては金属製品やガラス、陶磁器は全て他の民族との交易によって手に入れたものである。つまり、彼らにとって伝統性が薄いこれらの一群は民具類としては相応しくないという判断が働き、収集の対象から外されたのであろう。尚、考古資料としての玉類の多くはガラス製であり、その大半は墓地から発掘されたものである。民具類にガラス製の玉類が欠落するのは、玉類を装着する習慣がなくなったのか、あるいはそれらが葬送行為と深く結び付いているが故に収集し難かったのか、検討を要する点である。

以上のような民具類の全体に及ぶ傾向を理解したうえで、個別の資料に対する分析

が可能になるのである。

5. 鳥居龍蔵収集のクリールアイヌ民具類の性格

同様にして鳥居龍蔵のクリールアイヌ民具類の材質構成を検討してみよう。木製品が約46％、繊維製品（布製品を含む）が約38％、皮革製品が約11％、以上3種の有機質の製品で9割を超え、その他は金属製品が4％弱、骨角製品2％弱である（表3・図2c）。有機質製品の割合の圧倒的な高さと、金属製品の少なさ、さらにガラス・陶磁器・石製品が欠落する点など、全体として先の函館博物館収蔵クリールアイヌ民具類と近似した材質構成となっている。但し、鳥居の民具類で

は骨角製品が極端に少ない点が函館博収蔵品と異なるが、これは鳥居収集民具類の大半が後期民具類であることに帰する為であろう。また、考古資料とは異なり、繊維製品の割合が高く、その中でも布製品はその半数を占め、全体としても2割と比較的に高い値であり、民具類の特徴を良く示している⁴⁾。

6. 「還元的土俗」の実践（1）——模型品

また、鳥居の民具類には、以上に提示した数値から除外したものとして模型品と原材料とが含まれている。模型品の内訳は仕掛け弓4点、弓2点、箭1点、船3点、酒簀1点、墓標1点、仮面1点の計13点である。弓はその現物（K2332 図版15-1）も収集されており、シコタン島移住後も使用されていたことを民族誌 [林 1940: 194] から知ることができる。一方、模型品の仕掛け弓（K2374 他 図版 1-2・3）は4点と数が多く、また現物が収集されていないことや、鳥居の民族誌中の記録でも特にクリールアイヌについてではなくアイヌ全般に関する記述になっている点を考慮すると、シコタン島では既に仕掛け弓が使用されなくなっていたか、あるいは希だったことが推

表3 鳥居龍蔵収集クリールアイヌ民具類材質別比率

材 質	【民 具 類】	
	点 数	%
木 材 製 品	25	45.5
繊 維 製 品	11	20.0
布 製 品	10	18.2
皮 革 製 品	6	10.9
骨 角 製 品	1	1.8
石 製 品	0	0
ガラス製品	0	0
陶磁器製品	0	0
金 属 製 品	2	3.6
合 計	55	100.0

* 本表は徳島県立鳥居記念博物館貸出中の3点を含み、所在不明品9点・模型品13点・原材料3点を除いた値である。

4) 民具類の中でも繊維製品、特に衣類は収集し難いことが指摘されているが [宮本 1979: 13]、考古資料と比較するならばその値は極めて高いものである。

測される。

酒箸とされる模型品は長さ 17.5 cm, 幅 1 cm の小形品である (K2341 図版13-2)。表側には両端近くにキケ (削花) がそれぞれ作り出されているので、むしろキケウッパスイ (削り掛けつき棒酒箸) に該当するであろう。クリールアイヌは熊祭りを行っていなかったことが記録されているので [鳥居 1919: 466], このキケウッパスイはあるいは祖霊祭り用のものかもしれない [アイヌ文化保存対策協議会 (編) 1969: 585]。模型品であるためにか、「パスイパルンベ (箸の舌)」や「パスイサンペ (箸の心臓)」 [萱野 1978: 242-244] はつけられていない。両端のキケは共に内側から外側へ向かって削り出されているが、中央にはキケはつけられていない。伝語版『千島アイヌ』に掲載された第68図 [鳥居 1919: 451] に見られる碗の上ののっている「イク=パシュイ」とされるものが当該品である。現状では当該品の先端側のキケはほとんど剥がれ落ちてしまっている。尚、同図 (写真) 中の碗は酒杯ではなく、別の項目 (第20章18) で「調理用具」として紹介されているものであり、当時既にカムイノミを遂行する道具類を収集し難い状況であったことが推測できる。墓標は海岸の流木を用いて作った長さ 1 m 程の杭であると鳥居は記述しているが [鳥居 1919: 452], 林欽吾は墓標の全てが十字架であったと記している [林 1940: 188]。シコタン島での実際の墓標の写真が鳥居 [1919: 452, 第71図] やヒッチコック [1892: 28, 図版 4] によって残されているが、それを見る限りでは十字架に近い形態であり、墓標の模型品 (K2344 写真1) がロシア正教に改宗する以前の古い形態のものであることがわかる。

7. 「還元的土俗」の実践 (2) —— 原材料

原材料は土器の粘土の混和材 (草) 1 点 (K2337), 堅穴住居の内部に用いる草 1

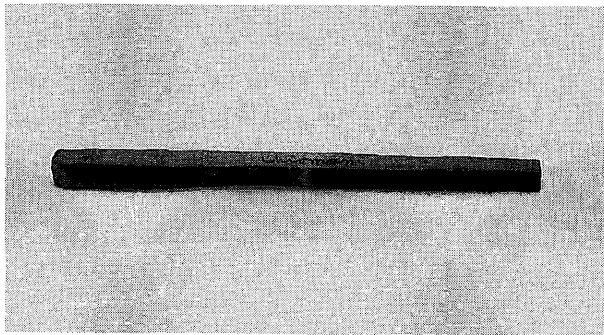


写真1 墓標 (模型品) K2344

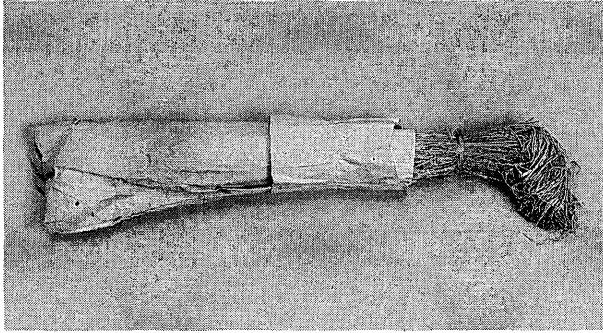


写真2 土器混和材(草) K2337

点(K2357)であり、この他に食物とされる資料が1点(食土3ヶ、樹ノ実9ヶ: K2355)がある。鳥居調査時の1899年当時、70歳余のステファニや60歳余のグレゴリーよりも約3世代前に、北海道アイヌを介して日本とロシアから鉄製の道具が供給されるようになり、既に土器作りは行われなくなっている⁵⁾。粘土には砂と細かく刻まれたノッカソキという草が混和され素地が作られたと語られている【鳥居 1919: 434】が、K2337(写真2)はこのノッカソキに相当するものであろう。鳥居収集民具類ではないが図版7-2はパラムシル島のベトボ⁶⁾で収集された青銅製の浅鍋(K2390)である。口径 23.5 cm, 器高 11 cm, 重さ 730 g である。胴下半部の内側に緩く括れる部分が著しく磨耗しており、その補修のために短冊形の銅板が外側から当てられ鋳留めされている。鉉用のループ形の突起1対が口縁外側の対向する位置に取り付けられるのが本来の形態である。当該品ではその片側のループ形の突起が既にとれてしまっており、それを胴下半部の銅板補修と同じ手法で補修している。限られた材料と技術とで長期にわたって使いこまれていた状況が彷彿とさせられる。

以上の模型品や原材料の多くが、シコタン島においては既に見られないものであり、のみならず移住以前においてもかなり古い時期に消失してしまったものも含まれている。このように鳥居が収集した民具類も「還元的土俗」の考え方に基づくものであることを、その模型品や原材料から確認することができる。

5) 『ある老学徒の手記』【鳥居 1953: 210】ではステファニが若い頃にはまだ土器作りをしていた、という記述になっている。また、グレゴリーもその当時は土器を使用していたことになっている。『ある老学徒の手記』中の「北千島調査」と『千島アイヌ』【鳥居 1903, 1919】とでは、同一のことについての説明が若干相違する箇所がある。このような場合には、原則として『千島アイヌ』の記述内容を採用することにする。

6) パラムシル島のコタンニバに相当する【鳥居 1919: 330】。

IV. クリールアイヌ民具類の構成

1. 用途分類によるクリールアイヌ民具類の構成

鳥居収集のクリールアイヌ民具類は「還元的土俗」の性格を多分にもったものではあるが、一時期に収集されたものとしては他に例を見ないまとまったものであり、収集量も最も多い。その全体が当事者の暮らしをどの程度平均的に反映しているのかを見るために、個々の民具をそれぞれの用途によって分類し、その割合を比較してみる必要がある。しかし、1つの道具に1つの用途が必ずしも対応するわけではなく、使用する状況によって同一の道具が例えば狩猟具になることもあれば、料理道具として使われることもある。このような場合は二重にカウントするのではなく、より妥当と推定される方に属させて数えることにする。但し、ここでの用途の推定は基本的には鳥居の見解に従う。また、模型品も現物に準じた取り扱いをするが、原材料と食糧との3点(K2337, K2355, K2357)は対象から外す。徳島県立鳥居記念博物館に展示中の3点(Fa28, Fa71, Fa74)を含め、合計68点の民具類をここでの分析対象とする。尚、鳥居の収集品以外のクリールアイヌ民具類に関しては、ここでのカウント数には

表4 鳥居龍蔵収集クリールアイヌ民具類用途別比率

用途分類	点 数	%	用途細分	点 数	%
生業活動	13	19.1	狩猟	10	14.7
			漁撈	3	4.4
家 事	30	44.1	料理・食事	13	19.1
			育児・教育	3	4.4
			裁縫・工作	5	7.4
			雑事	9	13.2
服 飾	16	23.5	衣服	7	10.3
			装身具	1	1.5
			履物・被物	3	4.4
			携帯具	5	7.4
儀礼信仰	9	13.2	(儀礼・信仰)	9	13.2
(合計)	68	99.9	(合計)	68	100.0

* 本表は所在不明品(9点)、並びに原材料(3点)を含まない値である。

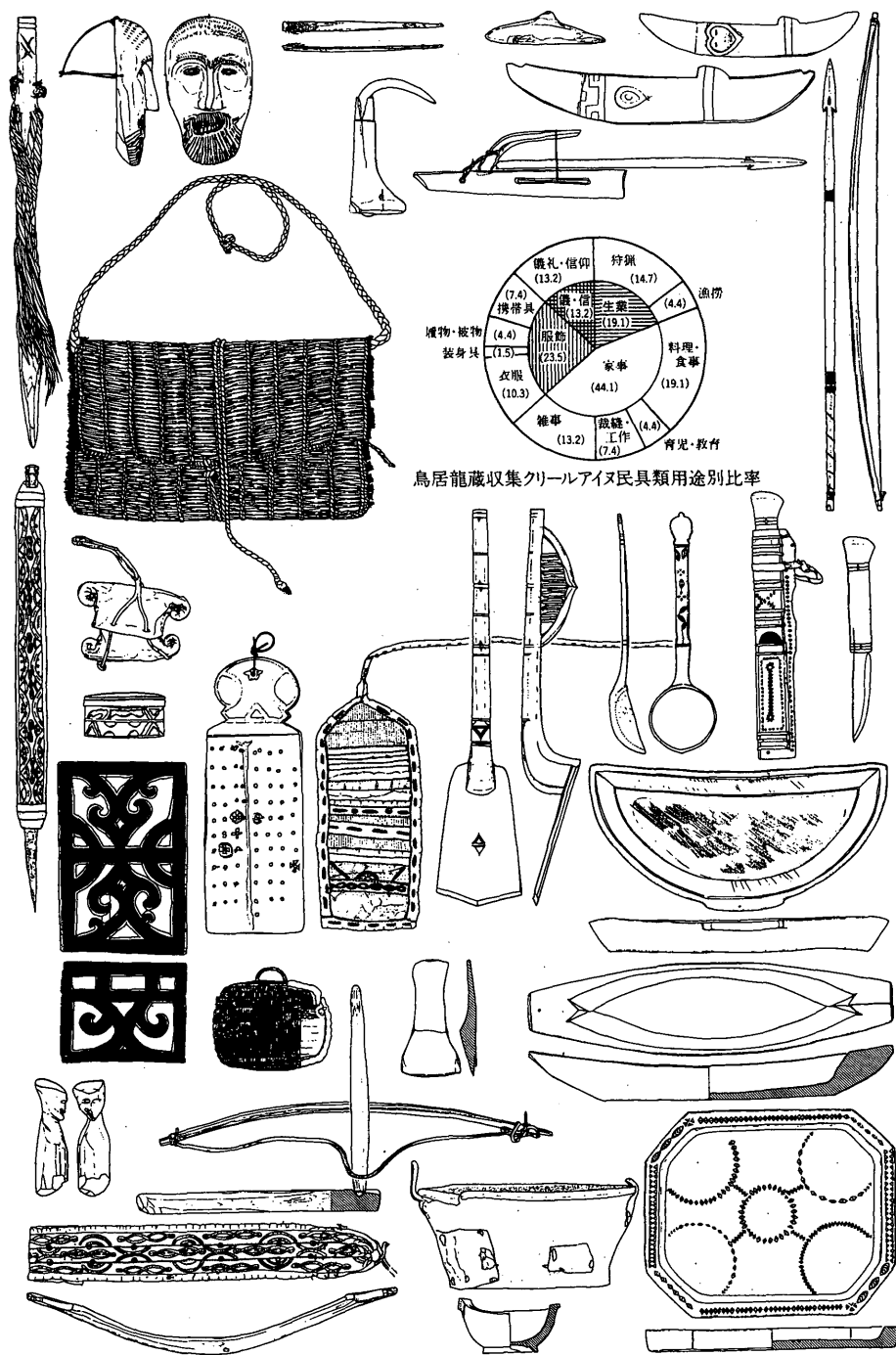


図3 クリールアイヌ民具類集成

含めないが、関連項目ごとに適宜紹介する。

まず、生業活動、家事、服飾、儀礼・信仰の4つの大項目を設定し、さらにその中をいくつかの小項目に分類し、その数量と各民具類の特徴を概観する(表4・図3)。

2. 生業活動に関する民具類(1)——狩猟

生業活動としては狩猟、漁撈、採集、栽培・農耕、牧畜などが該当してくる。狩猟具は仕掛け弓及び箭4点、弓3点、箭2点、弩1点の計10点、14.7%である。K2332の弓(図版15-1)は全長107.5cm、最大幅3.1cmで、オンコ(イチイ)を素材とする白木造である。鳥居は北海道アイヌの弓が樹皮で上張りされるのに対して、クリアルアイヌでは白木のままである点を指摘している。弓筈は左右両側から削り込みを入れただけの単純なつくり、トドの腸を素材とする撚りのかかった弓弦が結び付けられる。K2356の箭(図版1-1)は全長48.9cm、柳材の矢柄の一端を筒状に抉り込み、そこに鏃の末端(莖部)を差し込んで海獣の腱で巻き締めて固定したものである。鏃は鏃身と頸部とが一体に作られたような形態の鯨骨製の長大なもので $14.4+a$ cm(a は莖部の長さ)。莖部は矢柄に差し込むように細く仕上げられている。鏃身は左右に1対の逆刺がつく対称形で、片面側の中央部には 9×3 mm程の窪み(エバイ)がつけられる。これは毒を塗り込めるためのルムチップ[萱野 1978: 149]と呼ばれる窪みに相当するものであるが、北海道アイヌに普通に見られるものよりもかなり小さい。矢柄の末端は弓弦にかかるようにU字形に抉り込まれている。矢羽は矢柄の末端寄りに3枚付けられる。海獣の腱を矢羽の両端に幾重にも巻き、さらに矢羽全体に螺旋状に巻き付けて固定する。当該品では羽が全て抜け落ちてしまって芯だけになってしまっているが、仏語版にはその素材として鶉(ウイリ)の羽が用いられていることが記されている。

そこで問題となるのは、シコタン島で収集されたこの鯨骨製の箭が当時においても実用品として用いられていたものか、という点である。報告の中で鳥居は、古老のニセフォールやアレキサンダーが若い頃に遊び用の骨鏃を作ったという話から、鉄鏃が一般に普及するのは40~50年前以降のことであろうと推測している[鳥居 1919: 457]。しかし後年になって鳥居は、調査を実施した当時においても骨鏃を製作・使用しているとグレゴリーが述べていたこと、鳥居自らがシコタン島の彼らの集落でそのような骨鏃を収集したことを記している[鳥居 1953: 208]。両記述内容が正しいとするならば、調査当時よりも40~50年前ころから鉄鏃が普及しますが、現在(当時)においてもなお骨鏃は製作され、鉄鏃と併用されていたという状況が想定されてこよう。

馬場コレクションのクリールアイヌ民具類の中には骨製の「鋸先」(函1172)とされるシコタン島収集のものが1点ある。形態上は K2356 の鯨骨製の鍔部とほぼ同じであり、先に想定した状況の妥当性を示唆している。ただし、模型品としても同一形態の木製の箭(仕掛け弓用 K2330 図版 1-2)が収集されていることを考慮する必要がある、やはり当時においては既に骨鍔を収集し難くなった状況が進行していたのかもしれない。

3. 生業活動に関する民具類(2)——漁撈, その他

弓・箭を全て狩猟具としたので、漁撈具としては模型品の船3点(4.4%)が該当するだけである(ここでは運搬具の項目を立てていないので船は漁撈用具に属させる)(図版 2-1・2)。尚、鳥居収集品以外の狩猟ないしは漁撈具としては手ガキ(K2358 図版 1-4)、雪眼鏡(函1253)がある。共に1884年以前にシュムシュ島で収集されたものである。

採集、栽培・農耕、牧畜に関連する民具類は鳥居によっては収集されていない。函館博物館にはシュムシュ島で収集された鉄製の鎌が保管されている(函1178 小島倉太郎氏寄贈品 1884年受入)。重量感のある大きな柄頭と前方に張り出した柄尻とをもった頑丈な木製の柄に、内反りの鉄製の刃が取り付けられたものである。シコタン島移住後、農耕が奨励されたが、1894年8月に耕地が水害を受けて以来ほとんど廃止されてしまった[林 1940: 195]。牧畜については、ロシアによるカムチャッカ侵略の当時(18世紀)、カムチャッカ半島南端とシュムシュ島に住むクリールアイヌがロシアの影響によって牛を飼育していたことが論じられている[林 1940: 179]。しかしこれらは、鳥居の「還元的土俗」の対象には入ってくるものではなかった。以上、生業活動関連の民具類は13点、19.1%となる。

シコタン島移住後のクリールアイヌの生業活動は、北千島での漁撈・狩猟とは異なり、漁網による漁業や牛・緬羊・豚・鶏の飼養、そして農耕が奨励されるようになる。これらは成功することなくやがて廃止され、1930年代には夏季の海草採集が主要な生業となっていた[林 1940: 194-198]。鳥居の調査年はその間であり、北千島での生業活動の姿はもはやそこにはなかった。そんな中にあって鳥居が収集した生業関連の民具類は狩猟と漁撈を示すものだけである。しかも、狩猟具10点のうち、実際には性格が不明な K2348(弩)を除くならば、実質9点中に現物は K2332 の弓と K2356 の箭の2点(図版15-1・図版 1-1)だけであり、しかも鯨骨製の箭は既に希な存在になっていたと推定される。残る7点は全て模型品である。狩猟関連の現物の民具類の収集

数の少なさは、この方面への鳥居の関心の度合いの低さを示しているのではなく、既に収集が困難になりつつあった状況を示していると理解した方がよいであろう。漁撈についても同じ状況が想定される。シコタン島での新たな漁業が北千島での海獣を捕獲対象とした漁撈活動とはまったく質を異にするものであったことは想像に難くない。模型船3点はそのあらわれである。しかも、その内の2点は船印を表現するためのものである(図版2-1・2)。この点は、むしろ鳥居の関心の所在と前述した解釈の準拠(中近東起源説)が強く作用している可能性も高いので、改めて後で詳述したい。いずれにしても生業活動関連の民具類の実質的な収集数の少なさは注意すべき点である。

4. 家事に関する民具類——料理・食事用具(1) まないた, エペルニキ

家事としては料理・食事, 育児・教育, 裁縫・工作, 雑事などが該当する。雑事とはいささか漠然としたものであるが、前出の3つの小項目に属し難いものを対象とする。

料理・食事用具にはまないた1点, エペルニキ(女子用小刀)1点, 発火具6点, 杓子2点, 碗1点, 木盆2点の計13点, 19.1%が該当する。まないたは長径64cm, 短径30cm, 材の厚さ7cmの大形品である(K2310 図版4-1)。平面形は半月形を呈する。全周にわたって縁が立ち上がっているので、まないたというよりも浅鉢ないしは盆に近い形態である。この中で調理する肉や魚を切り刻んだと記録されているが【鳥居1919: 434】, その痕跡を示す刃物痕が底部内面に顕著に残されており、また底部外面にも少しであるがその痕跡が認められる。同様のものは北海道アイヌには認められないが、形態的には大きく鉢(ボロニマ)と共通する点がある。ただし半月形を呈する平面形はむしろ木製の箕(ムイ)【萱野 1978: 212】に類似している。

鳥居は「18. 調理用具」の項目でいつも腰につけている小刀(エペルニキ)で食事をを用意することを記述しており【鳥居 1919: 433】, また別の項目である「9. 短刀」では K2351 を呈示して女子用の小刀(エペルニキ)であることを記している。よってここでは、この女子用のエペルニキを料理道具として数えることにする。特に料理専用のスケマキリ(庖丁)【萱野 1978: 215】などというものがあつたかは不明である。K2351(図版2-3)は柄と刃部とが直線上にあり、また鞘に差した状態でも柄と鞘とが直線的であり、この点が北海道アイヌのものと形態的に異なっている。鞘の装飾も独自の表現であるが、この点については後述する。尚、仏語版の第34図として3点の

エベルニキ（1～3）が呈示されている【鳥居 1919: 424】。女子用の1は K2351 であり、男子用の3は K2354 であるが、残る1点の女子用の2（図版XⅦA と同一）は現在民博に保管されているものの中に該当するものがない。1よりもひとまわり小さいが、細部の作りや文様は著しく類似しており、同一の製作者によるものと思われる。

5. 家事に関する民具類——料理・食事用具（2）発火具

発火具は木臼や、木杵、押木、弓を個別に数えたので数字が大きくなっている。K2345 の木杵（図版3-2）と K2346 の木臼（図版3-4）は、インフォーマントとして鳥居に同行したグレゴリーがシュムシュ島で製作したものである。ここで発火具として取り上げるものは摩擦式の発火具であり、そのうちでも弓錐摩擦が該当してくる。弓錐摩擦を特徴付ける弓としては長さ 43 cm, 最大幅 1.5 cm, 弓弦にトドの皮紐が使われているものが収集されている（K2350 図版3-1）。摩擦式発火具について鳥居は、主だったものとして「発火用紐錐＝就テノ二事実」【鳥居 1896b】や「人類学上より見たる我が上代の文化（1）」【鳥居 1925】に収められた「上代吾人祖先の発火法」等の論考を残している。その中で弓錐摩擦を用いる民族として北太平洋地域のアリユート、エスキモー、チュクチ、コリヤーク、カムチャダル⁷⁾を挙げ、その最西端にクリールアイヌを位置付け、この方法を北方式発火方法と呼んでいる【鳥居 1919: 115】。これに対して弓と押木を用いない揉錐摩擦によるものが南方式発火法であり、以前の日本人や北海道アイヌが用いる方法であることが指摘されている。鳥居は縄文時代の凹石を根拠にして、北海道アイヌも以前は弓錐摩擦の発火法であったことを推測しているが、この論証過程は今日では容認しえない。しかし、北海道アイヌも以前に弓錐摩擦の発火法を実際に用いていたか否かについては検討を要する。『アイヌの民具』【萱野 1978: 93】には「イキサッ」として弓錐摩擦の発火具が一式図示されているが、それについての解説はなされていないので詳細は不明である。

6. 家事に関する民具類——料理・食事用具（3）杓子、椀

杓子はその規模により、大きい方から酒粥用（サカエカスッ）、汁用（サヨカスッ）、粥用（ルルカスッ）などに区分される【萱野 1978: 220, 221, 234】。この基準に従うならば、K2342（写真3）と K2343（図版6-2）は粥用のものに近似するが、鳥居によって記録された北千島でのクリールアイヌの食事内容【鳥居 1919: 453】を考慮するな

7) ただし、仏語版【鳥居 1919: 443】ではカムチャダルは北海道アイヌと同様に揉錐摩擦法を用いるとされている。

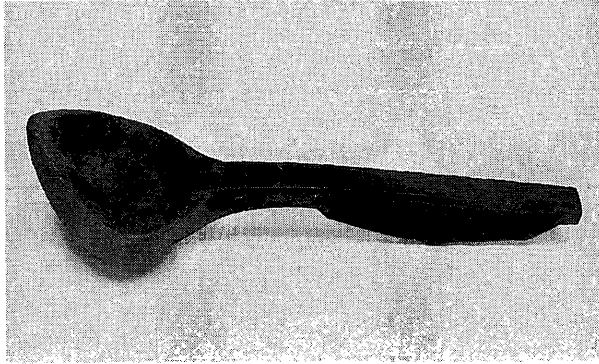


写真3 杓子 K2342

らば、その用途は改めて検討する必要がある。形態的には平面形が円形を呈する碗部の先端が三角状に突出し、またその反対側の柄と接する部分も同様に三角状に突出し、しかも左右が対称になるものがその基本形である。ただし、柄と接する側は台形状を呈したり (K2342)、三角状の突出を痕跡的にとどめるだけのもの (K2343) もありバリエーションがある。鳥居収集品ではないが民博が保管する他の2点のクリールアイヌの杓子 (K1948, K2388) 並びに北大農学部博物館収蔵の1点 (北160) はこの特徴を良くあらわしている。同じ北大収蔵の団子筥 (北161 図版6-1) もその先端が三角状に突出していて、形態上の特徴を共有している。尚、この団子筥は杓子のように柄と機能部である筥先とが角度をもって結合する点に特徴があり、北海道アイヌのシトベラ (団子筥) に多く見られる全体が直状を呈するものとは際立った違いを呈している。

碗 (K2362 図版5-1) は口径 10.2 cm、器高 6.1 cm の小形のものが1点収集されている。口縁は対向する2点が小さな波状を呈し、その片側には波頂部直下に注口が付けられている。『土俗品目録』⁸⁾ には「海獣ノ脂ナドラ入ルルニアリ。(?)」と記載されている。また、前述のように仏語版の第68図では「26. 酒の儀式」として「イク＝パシュイ」(模型品) をのせた状態の写真が示されている [鳥居 1919: 451]。以上のようにその用途を限定することは難しいが、料理ないしは食事用の容器としては他の形式の容器もあったであろうことは想像に難くない。鳥居は北千島時代の食器について、「食事は一種の皿 (= ni, サラ sara) に盛りつけ、さじ (パシュイ pashoui) を使っていた」 [鳥居 1919: 453] と記録しているが、それは当然、この注口付きの小形碗でもなければ、先の杓子でもなかったであろう。それに該当するものは、鳥居収集

8) 『土俗品目録』は東大資料の収蔵原簿にあたるもの。詳しくは佐々木・宇野 [1993: 71] 参照。

品ではないが、シコタン島移住以前の1875年にシュムシュ島で収集された木製の「船形食器」(函1081～函1083 図版7-1)や1886年収集の匙(函1085, 函1086, 函1095)に相当するものなどであろう。匙は腕部の平面形が楕円形を呈する点が杓子と異なっている。小形品の函1085と函1086は、腕部の先端が三角状に突出している点で、クリールアイヌに特徴的な杓子の形態と共通する。大形品の函1095にはその特徴は見られないが、後述するクリールアイヌ特有の文様を柄に表現している。

7. 家事に関する民具類——料理・食事用具(4) 木盆

木盆2点の平面形はK2367(写真4)が方形、K2368(図版5-2)が長方形の四隅に短辺を設けた8角形、共に内面と口唇部上面をクリールアイヌ特有の文様で装飾したものである。K2368の木盆の文様構成の中心となる5つの円形はコンパス(針に糸を結び付けたものか)を用いて下書きをしている。木盆には日本人向けに製作された土産物もあり、北大収蔵の杉本目出平作とされる木盆(北10250)は和人趣味の花柄を彫り出したものである[伊藤 1996: 4]。尚、盆にはムリ草(ハマニソク)を素材としてコイル編みで製作した丸盆もあるが、これなども土産物として製作されたものである。

料理・食事用具の収集量が多いのは、当然のこととして収集のしやすさということも考慮する必要があるが、移住に伴う生業の変化の度合いに比べると、料理・食事用具にはそれに対応するほどの変化が生じていなかったことがその根底的な要因としてあったとも考えられる。しかし、シュムシュ島で収集された木製の「船形食器」や鳥

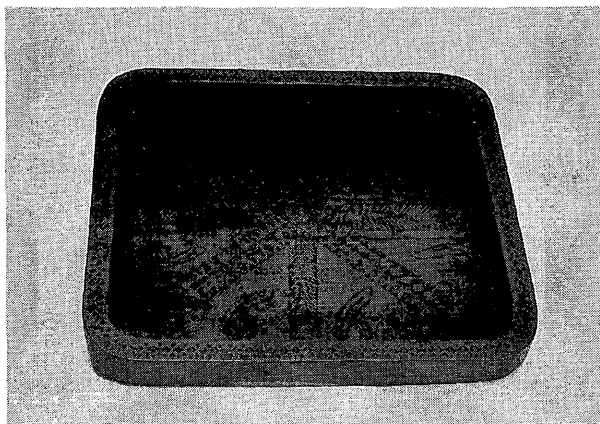


写真4 木盆 K2367

居収集品には見られない匙や団子篋が収集されていることを考え合わせるならば、なお多くの各種用具の存在や移住以前以後での変化が推測されよう。料理の際の刃物としては女子用のエペルニキが用いられたとされているが、これは移住以前のことであり、移住以後シコタン島でどうであったかは問題である。また、鳥居の収集対象からは除外されているが、鍋（K2390 図版 7-2）などの金属製の料理・食食用具も当然存在していたはずである。これらも含めたうえで、使用時における料理・食食用具の組成（数量的な比率）の把握が必要である。さらに料理材料および料理方法、食事作法などに関するより濃い情報と合せて、料理・食食用具の体系的な復原を、北千島時代とシコタン島時代とのそれぞれで行い、その変化と生業活動並びに家族構成の変化とにいかなる相関があるのかを比較検討することが今後の課題となつてこよう。

8. 家事に関する民具類——育児・教育

育児・教育用具は小児負2点、木偶1点の計3点、4.4%がある。小児負は幼児を背負うための道具である（K2313, K2339 図版 8-1a, 図版 9-1b）。平面形が舟形を呈し、側面形では中央部が下方に湾曲する腰掛け板と、背負う者の額に当てる帯部（額当）、そして両者を結びつける皮紐とから成り立っている。基本的な構成は北海道アイヌのイエオマッ（おぶい紐）と変わらないが、北海道アイヌのものでは腰掛け部が丸棒であるのに対して、クリールアイヌのものでは舟形に作られた腰掛け板である点が相違している。腰掛け板の上面には鳥や矢をつがえた弓、銛などの絵が線彫りされている（K2313 写真5）。これらは幼児が有能な漁師になることなどを願って描かれたもの

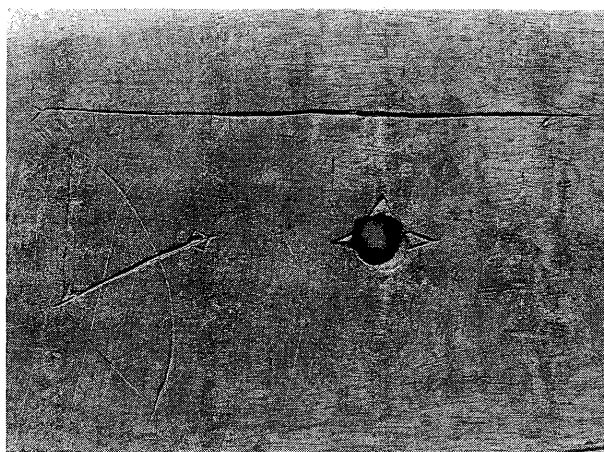


写真5 小児負（腰掛け・部分） K2313

であることが、古老の話として記録されている【鳥居 1919: 426】。額当は布地に刺繍を施したもので、その図柄は布製の腰帯の文様（K2382～K2386）と共通するものである。小児負の用い方は、背負った幼児の尻に腰掛け板を当てがい、その両端からのびる皮紐に取り付けられた1枚の額当を額で受けるようにして幼児を支えるものである。ヒッチコックも同種のもの（資料目録番号150768）を1888年にシコタン島で収集しているが、その用い方として背負う者は額ではなくて胸当としてそれを受けると記している。この点について北構保男は、鳥居の日仏語両版『千島アイヌ』に掲載されている実際にそれを使用しているところの写真【鳥居 1919: 426, 第40図】と「千島アイヌ老女と少女」【鳥居 1903: 56】とを指示して額で受けるのが一般的であり、ヒッチコックが述べるような胸受けの例は例外的なものであることを論じている【北構 1985: 39, 224】。

北大収蔵品には「背負縄（ヌマランタラ）」として保管されている額当とその両端に結び付けられた皮紐とからなる製品（北190）がある。額当の表地はムリ草（ハマニソク）と木綿糸とを織り合せたものであり、織り特有の幾何学的な格子の図柄が表現されている。裏地は紺色無地の木綿布で、表地と綴じ合せてその縁を獣皮で覆い縫い付けられたものである。両端にも獣皮が半環状に縫い付けられ、そこに長さ1m数10cmに及ぶ皮紐がそれぞれ1本ずつ結び付けられている。皮紐の先端には、そこに孔を開け反対側の端をその孔にくぐらせて輪が作られている。この製品は1910年に発行された『札幌博物館案内』にも「背負縄・61号（千島國色丹島）」【村田 1910: 55】として登録されているものであり、収蔵当初よりこのような形態であったことがうかがわれる。クリールアイヌのタッ（背負縄）が北海道アイヌのものとはやや異なり、このような形態であったとも理解される。しかし、皮紐の先端に作られた輪がK2339（図版8-1a, 図版9-1b）の腰掛け板への皮紐の結び方と共通する点を考慮するならば、この製品がクリールアイヌの小児負の腰掛け板が取り外された状態のものである可能性も十分に考えられる。尚、根室で収集されたものであるが、ライブチッヒ州立民族学博物館にも同じ製品（収蔵番号 OAs-1669）が収蔵されている。その特徴的な形態から、クリールアイヌのものであると指摘されている【佐々木 1993: 103】。

鳥居は木偶がかつては崇拜の対象であったが、現在では玩具にすぎないということをも再三強調している【鳥居 1919: 444, 449】。「還元的土俗」を目指す鳥居としては他の記述箇所とやや調子が違っている点であり注意が必要である。後に言及したい。鳥居により収集された木偶（Fa74：現品は徳島県立鳥居記念博物館に展示）は衣服を

まとい、帽子や靴をつけた写実的な表現をしたものであり、当時の写真資料と共に服飾に関する重要な情報を提供している。考古資料としてはシュムシュ島別飛第3号堅穴から出土した木製の人形（図版13-4）がある。馬場脩による北千島の時代区分では、別飛第3号堅穴は内耳土器時代に後続する「末期」に属することになる。

9. 家事に関する民具類——裁縫・工作（1）織物、針入れ

裁縫・工作用具としては織物1点、針入れ（縫針）2点、エベルニキ（男子用小刀）1点、足型1対の計5点、7.4%である。

K2322は製作途中の織物である。織物の経糸には恐らくムリ草（ハマニソク）を用い、緯糸には木綿の糸が使われている。その用途として、鳥居は帯であろうと想定しているが、『内外土俗品圖集』（第7輯）[長谷部 1939: 1]では小児負の額当であるとしている。この織り方と素材の用い方とは、先に紹介した北大収蔵の「背負縄」即ち小児負の額当と共通するものであり、後者の想定の方が妥当である。尚、製作途中の収集品としては後出の編み容器のうちにも1点あり、鳥居が製作技術の把握にも強い関心を示していたことが良く窺える資料である。

クリールアイヌの針入れとしては2種類のものが知られている。1つは円筒形に切断した鳥の管骨に皮紐を通した伝統的なものである。針は皮紐に刺して保管する。かつては骨製の針であったが、やがて難破船の漂着物から取り出した鉄材を鍛え直して作った鉄針へと変わっていった[鳥居 1919: 422]。馬場脩による北千島のオホーツク式土器時代には既に同様の針入れが出現している[馬場 1939: 49]。鳥居が伝説版の図版XVII D [鳥居 1919: 533]に図示した針入れは、皮紐の先端にエトピリカ鳥の嘴を飾りとして付けたものであるが、その当該品は民博が保管する鳥居収集品の中には見られず、また『土俗品目録』にも収集したことが記録されていない。

他の1つは「ケモ=オク」と呼ばれる布製の針入れで、最近（当時）になってカムチャダルから伝わったものである。鳥居収集品には2点の布製の針入れ（K2349 図版10-1, K2380）がある。縦長の長方形の上端が三角形を呈する布地のもので、三角形の頂部には30~40 cm程の紐が縫い付けられている。3段に折りたたんで携帯することができる。K2349（図版10-1）は表側に3つのポケットが付いていて、全体が刺繍で飾られている。この針入れがクリールアイヌに伝統的なものではないのに鳥居の収集対象となったのは、その刺繍文様がクリールアイヌ特有な表現であったためであるとも指摘されている[大塚 1993b: 28]。K2380の頭部の三角形の部分には鉄針が刺し留められ、その針穴を通した糸がそこに巻き付けられている（写真6）。K2349の

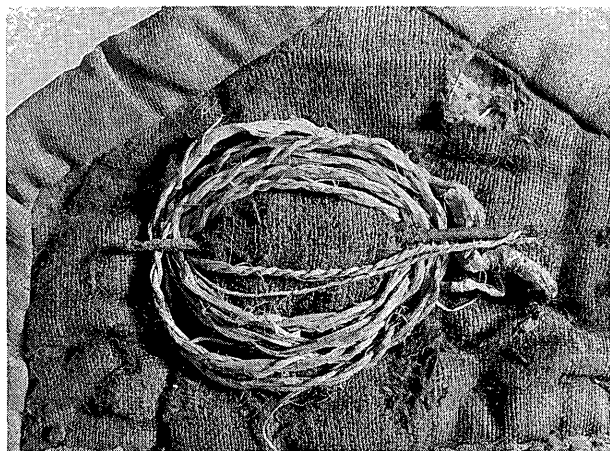


写真6 針入れ（針と縫糸） K2380

上端の三角形の部分は布地にたるみをもたせ、横方向にのびる襷が作りだされている。K2380の針の刺し留めを参照するならば、この襷は偶然に生じたものではなく、針を刺し留め易くするための工夫であると考えられる。

さて、この2種類の針入れは使用の場においてはどのような関係にあったのか。仏語版には鳥管骨の針入れは当時も使用されており、針も鉄製であったことが記録されているが[鳥居 1919: 422]、一方『土俗品目録』には「此針入ヲ用キルニ及ビ彼ノ骨製モノハ廃ル至レリ」と記されている。布製の針入れが使い始められるようになったのが最近（当時）のことであるとしても、カムチャダルから伝わったとされているので、シコタン島移住以前であることは確かである。よって、鳥居の調査当時、布製の針入れが一般化する中で、依然として伝統的な骨製針入れも細々とではあるが使い続けられていた状況を想定するのが妥当であろう。

10. 家事に関する民具類——裁縫・工作（2）エペルニキ、足型

工作用具を代表するものはエペルニキ（小刀）である。種々の木製品の加工をはじめとして、暮らしの中での様々な切截の場面で用いられる。先に女子用のエペルニキを料理用具として扱ったので、ここでは男子用のエペルニキ（K2354 写真7）のみをカウントの対象とする。基本的な作りは女子用と同じで、柄と刃部とが直線上にあり、鞘も反らずに真直ぐで、また鞘に差した際にも柄と鞘とは直線的になる。女子用と比べて鞘と柄の装飾が簡素であり、鞘に「柳葉」形の文様と三角文（写真8）が浅く彫られるだけである。柳（スス）はアイヌにとって神木であり、その文様であるこの柳

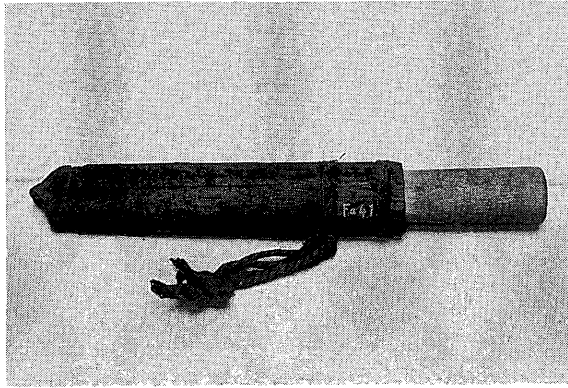


写真7 エベルニキ（男子用） K2354

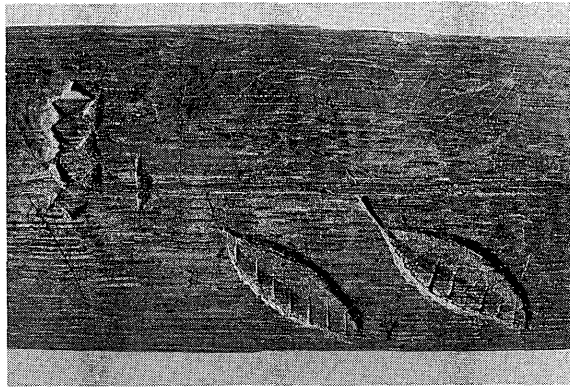


写真8 エベルニキの鞘（部分） K2354

葉文は所有者を悪霊から守ると説明されている【鳥居 1919: 423, 469】。また、埋葬の際にはエベルニキを帯刀させ死者を葬ったことが記録されている【鳥居 1919: 451】。

仏語版には履物の説明の項で、海獣の皮製長靴と共に木製の足型（靴木型）の写真に掲載しているが、その足型（K2377 写真9）についての解説は特に付されていない。『土俗品目録』には「長靴ヲ製作スルトキ用キル足型ナリ」と説明されており、一方で収集された長靴（K2376）は鳥居のために製作されたものであることが記されているので【鳥居 1919: 425】、この種の足型がその製作に用いられたと考えられよう。この海獣皮製の長靴は、概ね底・踵・甲・脛の4つの部分から組み立てられている立体的な作りのものである。北海道アイヌに見られる、踵と底とから足の側面と爪先とを

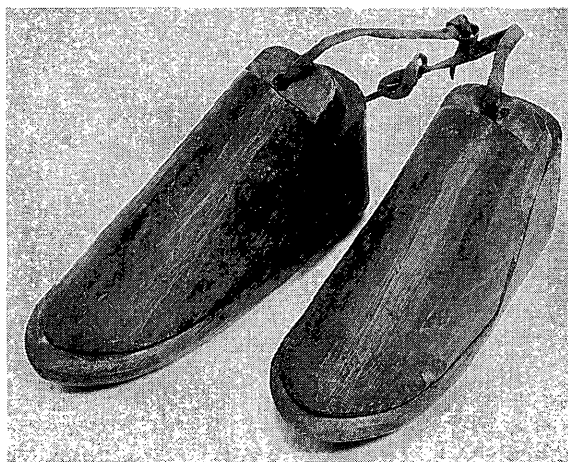


写真9 足型（靴木型） K2377

包み込むようにして巻き上げて甲のところでまとめて縫合する魚皮製の靴などとは、基本的に異なる作り方である。クリアルアイヌの製作と考えられる同じ形態の足型がライブチッヒ州立民族学博物館にも収蔵されている（収蔵番号 OAs-1667a-f 収集地根室）。これについてはロシアの影響を受けたものかとの想定がなされている【佐々木 1993: 101】。足型についてではないが、鳥居はカムチャダールも同種類の海獣皮製の長靴を使用していたと古老が語っていたことを記録している【鳥居 1919: 425】。海獣皮を素材とする長靴はともかく、木製の足型にはロシアの影響が色濃く窺えるために、それへの言及がなされなかったとも考えられる。

以上、同じ小項目「裁縫・工作」に属するものとして、織物・針入れ（縫針）・エペルニキ・足型を取り扱ってきた。しかし、織物は文様を表現すると同時に素材そのものを作り出すものであり、縫針やエペルニキなどの刃物類は様々な製作や加工に主体的に係わり、足型は限定された用途のみに機能するものである。縫針と織物（織りの技術）、並びにエペルニキは多目的な製作に対応するものであると同時に、彼らの物質文化の中で最も巧みな造形表現を可能にするものであり、他の道具類とは本質的に異なる点を指摘できる。

11. 家事に関する民具類——雑事（1）編み容器

雑事に係わる用具としては編み容器7点、縄1点、暦1点の計9点、13.2%である。先にも述べたように雑事とは、家事のうち料理・食事、育児・教育、裁縫・工作の

3小項目に属さないものを一括して設けた小項目である。9点の収集品がそれに該当するが、そのうちの7点は編み容器（テンキ6点：K2314～K2318, K2352, 盆1点：K2319）である⁹⁾。ムリ草（ハマニソク）を素材とした編み物の中でもコイル編み（巻上げ技法）による製品は鳥居の収集品以外にも多くのものが残されている。コイル編みによる製品はテンキ（蓋付きの小籠）の他にも盆や帽子、杯台、菓子入れ、名刺入れなどが製作されている。列記すると、函館博物館のテンキ4点（函1096, 函1097, 函1205, 函1207）、北大農学部博物館のテンキ3点（北10462, 北10463, 北35367）・盆1点（北35368）・帽子1点（北10465）・杯台1点（北10461）・菓子入れ1点（北10297）の計7点¹⁰⁾、北海道開拓記念館のテンキ3点（開11353, 開11354, 開11355）・盆2点・帽子1点（開11356）・菓子入れ1点・名刺入れ1点の計8点¹¹⁾などである。このうち製作年ないしは収集年が明確で1884年のシコタン島移住以前に製作されたことが確認できるものには函1205（テンキ 1875年）・北10465（帽子 1879年）・北10461（杯台 1879年）がある。盆や帽子、菓子入れなどといったものが土産物として製作されていたことは明らかであり、テンキも一部はそうであったろう。しかもそのような製作がシコタン島移住以前から行われていたのである。これまでに確認してきた鳥居の収集方針からするならば、土産物の類は除外されるはずである。にもかかわらず、収集された編み容器の内に1点の盆が入っている点が不可解である¹²⁾。しかし、編みかけのテンキが収集されていることなどを考慮するならば、その造形的な素晴らしさとともに、鳥居の製作技術に関する関心の高さが作用した結果であると推測されよう。雑事関連の民具類に占めるテンキを主体とする編み容器の数量の多さもこのためと考えられる。尚、K2352（図版11-3）のテンキは『土俗品目録』に用途が「裁縫道具入レ（?）」と記録されているものである。内面に紙が貼り廻らされて編目の凹凸が覆いかくされている。ここでは一応、前記の「裁縫・工作」ではなくて、他のテンキと共に本小項目の中で数えることにする。

ムリ草（ハマニソク）を素材とした編み物には、芯材と巻材とを用いてコイル状に巻き上げていく方法（写真10）、経材に1対の編材を交互にからめていく方法、緯

9) 「テンキ」はコイル編みによるムリ草製品の総称としても用いられるが、本稿では仏語版の「千島アイヌはテンキ Temki という蓋付きの小籠を作っている」[鳥居 1919: 432]を根拠として、蓋付きの小籠を特に「テンキ」と表記し、他はそれぞれの器種名で呼ぶことにする。

10) 北35367, 北35368の2点は製作地不明だが、クリールアイヌ製作と推定されるものである（沖野慎二氏御教示）。

11) 盆2点, 菓子入れ1点, 名刺入れ1点の計4点は現在整理中のため無番号（出利葉浩司氏御教示）。

12) 『内外土俗品圖集』（第7輯）[長谷部 1939: 6]には、鳥居収集の盆が日本人向けに作られたものであることが記されている。

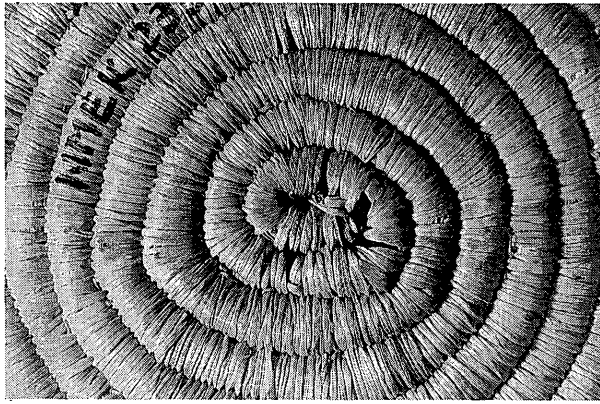


写真10 テンキ（部分） K2352

材を一定間隔ごとにすだれ状に双子糸で撚り合せていく方法などの代表的な3種類の編み方によるものがある。同じ編み容器であっても、経材に編材をからめる編み方による製品は鳥居の収集品の中には見られない。この編み方による口の開いた袋状の小物入れとしては、北大収蔵品の1点（北9868）、函館博物館収蔵品の1点（函1208）が知られている。共にシコタン島移住以前に収集されたものと思われ、後者の収集地はシュムシュ島である。また、同様の編み方による「小出し」が小金井良精によって鳥居調査以前にシコタン島で収集されている¹³⁾。尚、緯材を双子糸で撚り合せていく方法は後出の「携帯具」中の物入れの製作に用いられるもので、北海道アイヌと共通する編み方である。

12. 家事に関する民具類——雑事（2）暦

仏語版『千島アイヌ』の「第20章 千島クシ＝アイヌの習俗」の中には項目立てられていないが、本文中に引用された近藤守重著『辺要分界圖考』（1804年）の一文に暦に関する記述が見られる。近藤は1711年から1715年にいたる正徳年間におけるロシアの北千島への侵略、18世紀後半におけるクリールアイヌのロシア化を述べるなかで「島民らは自分たちの風俗習慣を捨ててロシアの風俗習慣を身につけねばならなくなった。帽子を被り、長靴をはき、モスクワ風のズボンを着用し、ロシア語を話し、ロシアの宗教を信仰し、その護符を身につけ、ロシアの暦を用いることになった」[鳥居 1919: 383]（傍点は小杉）と記述している。このロシアの暦に相当するものの1

13) ライプツヒ州立民族学博物館収蔵品・収蔵番号 OAs-5987, 1898年受入れ [東京国立博物館 1993: 76]。

つが、K2347 の暦（図版11-5）であると考えられる。『土俗品目録』にもこの収集品の説明として「ろしあヨリ学ビタルモノ…」の解説文が付されている。上端を楕円形にかたどり本体が長方形を呈する板状のもので、縦 30 cm, 横 10.5 cm, 厚さ 10 mm を計る。楕円形と長方形とが接する括れ部には三角形の突起が左右対称に 1 対付けられ、全体として人形（ひとがた）を呈している。頂部には 1 孔が穿たれ、針金を通して輪が作られている。壁などに吊り下げられたものであろう。楕円形の頭部の縁は黒色で塗られ、さらに左右両側から対向する弧線が描かれる。括れる頸部には横線がひかれ、その中央には上向きの三角形がやはり黒色で描かれる。長方形の体部の上端は黒色の横一線で区切られ、そこからは左右を均等に 2 分する垂線が描かれている。2 分された向かって左側の縦長の区画には、縦 3 列×横 10 列の計 30 孔の小孔が穿たれ、その右隣には縦に 1 列、木釘で塞がれた 5 孔の小孔痕が並ぶ。右側区画には左側から数えて縦 1 列目に 11 孔（上から 1 番目の小孔の右隣にも 1 孔が穿たれているので正確には 12 孔）、縦 2 列目・3 列目に各 10 孔の計 31 孔の小孔が穿たれ、やはりその右隣には縦に 1 列 7 孔の小孔が並ぶが、これは左区画の同位置に配されたものとは異なり木釘で塞がれていない。左区画では左側から数えて縦 2 列目で上から 7 番目、縦 3 列目で上から 5～7 番目の小孔の周囲に、同様に右区画では縦 1 列目で上から 5 番目、最右列で上から 7 番目の小孔の周囲に、円と十字とを組み合わせた図柄がやはり黒色の顔料で描かれている。特に、右側区画の 7 孔が縦に並ぶ最右列の一番下の小孔の周囲の図柄は、4 つの三角形の頂点を 1 点で合せた十字形が浅く彫り込まれたうえに黒色が塗られたものである。三角文を組み合せる文様はクリールアイヌ特有のモチーフでもあり一概には言えないが、この十字形の図柄は、例えば馬場脩によってシュムシュ島で採集された十字架（函 1051～函 1053）の外形と比較的に類似する点もあり注意を要する。長さ 22 mm と 15 mm との大小 2 本の木釘が小孔に挿し込まれるようになっているが、恐らくこれで日にちと曜日、あるいは日にちと月を示していたのであろう。

13. 家事に関する民具類——雑事（3）三弦琴、煙草入れ、その他

鳥居の収集品に見られない雑事関連の民具類には三弦琴、煙草入れ、パイプ（函 1215）、小筥などがある。三弦琴にはアイヌの伝統的な楽器トンコリ（五弦琴）と同形態でありながら 3 弦であるもの（函 988）と、棹と幅広の共鳴胴とからなるもの（リュート形式：北 9486, 函 989, 函 1218, 函 1219）とがある。後者のリュート形式は共鳴胴が三角形のもの（函 989）と、琵琶形（北 9486, 函 1219）のものとがあり、その中間的な形態のもの（函 1218）もある。いずれも共鳴胴の中央に小さな響孔を設けて

いる。ヒッチコックの記録にも共鳴胴が三角形のリュート形式のものに関する記述があり、「ロシア風の形式が認められる」[ヒッチコック 1892: 36]と記されている。ロシア風の形式とはバラライカのことであろう。また、「明らかに日本人の三味線を模倣した、別の形の楽器を作っていた」[ヒッチコック 1892: 36]とも記されているが、これは共鳴胴が琵琶形を呈するリュート形式のものを指示していたのであろう。この記述からもわかるように、後者のリュート形式の系譜としてはバラライカ説と三味線説とがある。函1218のような中間的な形態の共鳴胴の例や響孔の存在などから、その原型は琵琶形も含めてバラライカであったと考えられる。

煙草入れは北海道アイヌのものとサハリンアイヌのものとは形態に差がある。前者は縦長で、後者は横長になる傾向にある[大塚 1993a]。中空の胴に外形が一回り大きい底蓋をはめこんで身とし、これに底蓋に対応する形態の上蓋が付けられるため、全体としては上下が幅広で胴が細くなる鼓形を呈するものが一般的な形態である。この形態は北海道アイヌのもので顕著であり、サハリンアイヌのものは底蓋と上蓋との張出しがそれほど強くはない。函館博物館収蔵のシコタン島収集の煙草入れ(函1210 図版11-4)は、平面形が舟形を呈する横長のものである。身は削り抜きによるもので、底と胴とが一体の作りとなり、底蓋に相当する部分が胴部よりも張り出すことはない。上蓋も身と比べて、長軸方向に多少大きい程度であり、短径は身の胴部の短径と同じである。これらの形態の特徴はサハリンアイヌの煙草入れと共通する。

小宮(旭4960)は、身と蓋とからなり、共に縦 20 cm、横 14 cm で、蓋をした状態での高さは 10.6~10.8 cm である(図版15-2)。身は底板 1 枚、側面板 4 枚、蓋は天井板 1 枚、側面板 4 枚、各計 5 枚の板を鉄釘で打ち付けて組み立てている。身の側面板の上縁から 12~15 mm 程下がったところには、短側面では 2 か所ずつの計 4 か所に、長側面では 3 か所ずつの計 6 か所に、内側から外側へと打ち抜かれた小孔が水平に並んでいる。これらの小孔の存在から、この小宮は身の内側に細長い板を取り付けて、蓋を受けるようにした作りであったことが推察される。同じ器種のものは北海道アイヌやサハリンアイヌにおいても、ほとんどみうけることがないが、比較的近似した形態のものとしてはウイльтаやニブフなど、サハリンから大陸にかけてひろがる北方諸民族のあいだで製作されている蓋付き樹皮製容器の存在が注目される。蓋付き樹皮製容器は蓋が身全体を覆う作りであり、また外面の装飾も蓋に主体的に施されており、身の側面にも文様を描く当該品との隔たりも大きい。しかし、描かれている文様自体には次のような共通する一面もうかがえる。小宮の蓋の上面には後述するスベード形渦巻文が対称的に配され、4 側面には窓枠状の区画文様が描かれる。身の 4

側面のうち、長い方の2側面にはそれぞれに3個の連弧文が上下から対向するように描かれ、短い方の2側面の1つにはスベード形渦卷文系統の文様、他の1面には左右から対向する二重の弧線文が配される。各文様は沈線で両側が縁取られた帯状の区画で表現される。以上のような線対称を基調とする文様構成と帯状の区画とが、蓋付き樹皮製容器に特徴的な切り抜き文様の表現と共通する点である。ただし、当該品は彫り窪めた沈線内を赤色に塗り、また沈線で縁取られた帯状の区画内を黒色に塗っているが、この赤と黒との交互配色はクリールアイヌ特有の表現方法である。尚、蓋の裏書には「北海道廳根室支廳治下 千島國色丹郡醜丹港住 蝦夷之作 此島居住蝦夷ハ露國領千島樺太交換ノ時我臣民トナリシ者也 明治十九年五月千島國 擇捉島得撫島巡回之途次偶寄港而購帰ルモノ也」、身の裏書には「明治四十二年十二月 寄附 校長 浅羽靖」と記されている。この記述から、当該品がシコタン島で入手されたのが1886(明治19)年であり、その2年前にそこに強制移住させられたクリールアイヌが製作したものであることが確かめられる。

以上、家事関連の民具類について料理・食事、育児・教育、裁縫・工作、雑事の小項目ごとに、鳥居収集品以外の資料も参照しながら個々の民具を概観してきた。数量およびその比率を鳥居収集品に限るならば料理・食事は13点・19.1%、育児・教育は3点・4.4%、裁縫・工作は5点・7.4%、雑事は9点・13.2%となり、家事関連民具類全体では30点、44.1%となり、他の大項目と比べて最も高い比率となる。

14. 服飾に関する民具類——衣服(1) 鳥皮衣、その他

服飾には衣服、装身具、履物・被物、携帯具の小項目を用意する。

衣服としては衣服2点、腰帶5点の計7点、10.3%である。収集された衣服はエトビリカの皮を縫い合せて作る前あきのチルフ(チールル)が1点(Fa28)、頭からかぶって着る木綿製のデムカムルが1点(K2387)だけである。この他にラッコの皮を素材とするラコツア=チロニブや、北海道アイヌから購入するシケメカラベ(アットゥットと同じ物)、野生の鴨の羽を素材とするハルフ、ツッカリ(海豹)の皮を素材とするツクアル=ウルブの存在を記録から知ることができる。この4種類もチルフと同様に前あきの作りであり、素材が異なるだけであることが記されている【鳥居1919: 419】。しかし、北大農学部博物館に収蔵されている1885年にシコタン島で収集された2点の鳥皮衣(北80, 北81)は前あきではなく、頭からかぶって着る作りのものであり【難波 1987: 14】、むしろデムカムルに類似した作りである。『土俗品目録』では、デムカムルは「Aleut 種族ノ衣服ニ模シテ作リタルモノニシテ往昔ヨリ使用セ

ラレ…」と解説が加えられている。現在では木綿製であるが、以前には獣皮を素材として用いていたとも記述されている【鳥居 1919: 419】。鳥居収集品と同様に木綿製のもの1点が函館博物館に保管されている（函1028）¹⁴⁾。函館博物館にはこの他にも、ツクアル＝ウルブに該当するであろう子供服も1点収蔵されている。前あきで、襟には3対の紐が縫い付けられ、これを結んで前を合せるようになっている点は、鳥居収集のチルフと共通した作りである¹⁵⁾。尚、鳥居の記録するところでは、これら各種の衣服は社会的な階層や貧富の差に対応する。ラコツア＝チロニブとシケメカラペとは高位のものや富裕の人びとがもつことができ、チルフとハルフとは一般的な衣服で、ツクアル＝ウルブが貧しい人びとの服装であるとされている【鳥居 1919: 419】。

この他に、フストというフード付きの雨合羽がクリールアイヌにはあったことが記録されている。これはトドの腸を素材とするもので、海上での漁撈用として着用されたものである。これを着てバイダルカ風の船に乗ることが述べられているので、先のデムカムルとともに、アリュートなどの北太平洋地域の諸民族との強い関連がうかがわれる。

15. 服飾に関する民具類——衣服（2）腰帯

オユ＝クトと呼ばれる木綿製の腰帯（K2382～K2386）は、半ズボン（オユ）をはくときに用いる。本体は刺繍で装飾した布地で、一端には止め具としてホックやバックル、ボタンが付けられる。バックル付きの K2386（図版 9-2）には、バックルの反対側の端に長さ 18 cm、最大幅 2.8 cm で先細りの皮紐が縫い付けられている。皮紐の素材は転用品であり、その先端寄りの片側にあいている数個の小さな孔はバックルの針を差し込むためのものではなくて、以前に使用された際の縫い付けによって生じた孔である。バックルの針に対応する孔は開いていないので、バックルの環部に皮紐を直接に縛り付けて用いたものと想定される。K2383 も同様に一端に皮紐が付く例である。反対側にはおそらくバックルないしは半環状のものが付いていたと考えられるが、既にとれてしまっている。K2384、K2385 は片端に半環状の金属が付き、反対側にはそれにひっかける金属製のホックが付けられる例である。K2382 はボタンとボタン孔とでとめるものである。オユという鹿皮製の半ズボンは、アシカの皮でできたオルマカという下着と共にカムチャダールから伝わったものである、という古老の話を鳥居

14) 現在、所有者に返却している（長谷川一弘氏御教示）。

15) 1979年に道立中部高校から函館博物館へ寄託（長谷川一弘氏御教示）。同館にて現在展示中。尚、本資料は、1979年3月に発行された『藏品目録』【市立函館博物館 1979】には登録されていない。

は記録している [鳥居 1919: 418] ので、このオユ=クト（腰帯）も同様にカムチャダールから伝えられたものなのだろうか。オユ=クトは以前には海獣の皮で作られていたが、形態と文様は現在も昔と同じであると述べられているが、この点にも疑問がある。後に取り上げたい。

16. 服飾に関する民具類——装身具

腰帯にはオユ=クトの他に、前出のチルフに代表される前あきの衣服に用いられた、一端に直径 10 cm 内外の円板を付けた長くて細い皮紐がある。腰紐と呼ぶ方が適当であろう。この腰紐に付く円板はクックルケンと呼ばれるもので、帯留として機能する。木材や鯨骨を素材とし、刻文・彩色が施された装飾性の高いものである。ここではクックルケンを装身具の項目として数えることにする。鳥居の仏語版に掲載された第36図 [鳥居 1919: 424] や図版Ⅷ A [鳥居 1919: 530] からは、少なくとも 5 点程の収集品の存在を知ることができるが (Fa70~Fa72 及び Fa73) , 現在保管されている鳥居のクリールアイヌ民具類の内には 1 点を確認できるだけであり (Fa71) , 装身具は 1.5% に過ぎない分量となっている。

仏語版にはクラシェニニコフの記録として、クリールアイヌは男女共に金属製の耳輪をつけていたことが紹介されている。鳥居はこの記述を引用しながら、現在ではもはや男子が以前に耳輪を装着していたことさえも記憶されていないことを述べ、さらに古老に描いてもらった顔の絵 [鳥居 1919: 413, 第19図] や 1884 年移住当時の女子の顔写真 [鳥居 1919: 528, 図版 X A・B] を用いて、女子の耳輪の装着が最近まで続いていたことを指摘している。鳥居の調査時の状況は語られていないが、以上のことから移住後 15 年を経ないうちに女子の耳輪装着の習慣が廃れてしまったことを知ることができる。収集品の中には耳輪は含まれていない。

また、民具類を通してその存在を確認することは難しいが、かつて入墨の慣習があったことを民族誌から知ることができる。しかし、ロシア政府によって入墨が禁止されたために、シコタン島移住時には入墨をしている者はいなかったという。以前には婦人が肘から手の甲、指先にかけてと、唇の周囲に小さく入墨を施していたが、少女は未だ施すことがなかった。よって、当時の最年長の婦人たちが成人する以前には既にこの慣習が禁止され廃れていたことが窺える。また、男子には以前から入墨の慣習がなかったと鳥居調査時にはクリールアイヌ自身によって認識されていたが、クラシェニニコフの民族誌 (1755 年刊, 記録時 1738 年) には男子も唇の中央に入墨をしていたことが記されている。クラシェニニコフの記録は 18 世紀前半のものであるから、

それ以後、恐らく鳥居調査時（1889年）の最年長者よりも少なくとも3世代よりも前（概ね18世紀末葉から19世紀初頭頃か）までの間に、男子の入墨の慣習はいちはやく廃れていったのであろう。

鳥居収集品の中には2点の櫛があるが（Fa37, Fa38）、現在その所在が不明になっている。1点はシコタン島で収集されたもので、恐らく伝語版の第22図【鳥居 1919: 417】に掲載されたものが該当するであろう。頭部と歯部とが一体の作りの堅櫛で、頭部には渦巻文様が彫られている。赤く塗られていたという記録があるが、全体が赤彩されていたのではなく、クリールアイヌの他の木彫を参考にするならば、彫りくぼめられたところが赤く塗られていたものと推測される¹⁶⁾。鳥居は『夷俗図解』を参照して、昔からアイヌの女たちが首飾りのペンダントとして櫛を胸上にさげていたことをのべている。第22図の堅櫛にも、上端の突起に紐通し用の孔が開いており、類似した使用方法のあったことが窺われる。他の1点はシュムシュ島で収集したものであるので発掘品の可能性もある。

鳥居は櫛の素材が、以前は骨製であったが、現在（当時）は全て木製になったと記述している。伝語版には新石器時代のもので、シュムシュ島で発見された3点の鯨骨製の櫛が掲載されているが【鳥居 1919: 548, 図版XXXⅡ A-1, 2, 3】、馬場脩はこのうちの曲線的な刻文を施したA-1の骨櫛【鳥居 1919: 488, 第100図】が明治末期にシュムシュ島別飛で遠藤吉三郎によって採集されたものであり、それが内耳土器時代のものであることを指摘している【馬場 1939: 95】。

17. 服飾に関する民具類——履物・被物

履物・被物としては長靴2足、カンジキ1足の計3点、4.4%である。長靴には2種類のものがあることが紹介されている。1つは漁撈用の大腿部まで入る長靴で、他の1つは中位の長靴とされるものである。前者は既に製作されていないことが記されているが、シコタン島移住以後の漁撈活動の変化あるいは衰微を反映しているのかもしれない。後者には野外用と丁寧な作りの室内用とがある。K2376は中位の長靴であり、鳥居の為に作られたものであることが記されている。しかしこれは模型品ではない。伝語版には同じ形態の中位の長靴を着用しているシコタン島でのクリールアイヌの写真が掲載されている【鳥居 1919: 525, 図版Ⅶ A 他】。以上のことから、模型品の性格を再確認することができる。すなわち、当時においても日常的に製作されて

16) 北海道開拓記念館には浦川太八氏によって製作された同品の模型品（開56450）が収蔵されている。

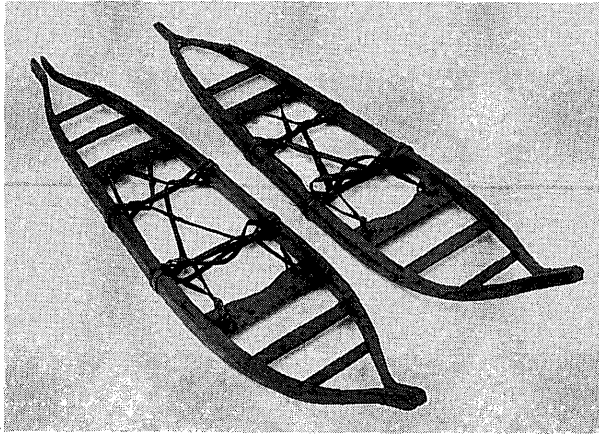


写真11 カンジキ K2311

いるものは、注文して作らせたものであっても現物を収集することができたが、既に作られなくなってしまったもの、収集困難なものは模型品として再現された、といえるであろう。

カンジキは鳥居が長年にわたって抱き続けたテーマの1つである【鳥居 1894, 1896a, 1924, 1936: 117-119】。雪靴には柳で枠組みを作り、皮紐で足に固定するものと、薄く細長い板切れの裏側に毛の向きを反対にしたトナカイの皮を裏打ちしたものとがあることが紹介されているが【鳥居 1919: 428】、K2311（写真11）は前者に属するものであり、チンルと呼ばれる。尖った前端部が上方に反る特徴的な形態は、瓢箪形を呈する北海道アイヌのものよりも、コリヤークやチュクチの同種のものの形態に類似している。鳥居はチンルのような網状の雪靴が起伏のある地形や硬い雪の上を歩くのに適しているのに対して、後者の「長方形板型スキー」は平坦な地形や軟らかい雪の上で用いるのに都合が良いと説明を加えている。尚、サハリンアイヌは長方形板型スキーを用いていたことも記されている【鳥居 1919: 427-428】。

被物は収集されていないが、木偶の被る帽子【鳥居 1919: 531, 図版XVC, 1899: 444】からその概要を知ることができる。眉庇のない、袋状の形態を呈し、素材は木偶のものでは木綿製だが、実際には北千島ではラッコの皮が用いられ、降雪期に着用された【鳥居 1919: 423】。尚、鳥居の収集品には含まれていないが、コイル編みによるムリ草（ハマニソク）製の帽子（北10465, 開11356）があるが、これは先にも述べたように土産物であり、本小項目としては扱わない。

18. 服飾に関する民具類——携帯具（1）物入れ

携帯具としては物入れ2点、火道具入れ3点の計5点、7.4%である。

物入れは男子用のカロッと女子用のチヒリの各1点が収集されている。共にムリ草（ハマニソニク）を素材とするもので、緯材を一定間隔ごとにすだれ状に双子糸で撚り合せていく編み方で作られている。仏語版『千島アイヌ』[鳥居 1919]では物入れは「16. 頭陀袋」の項目で記述されている。本文中では第50図即ち K2320 をもって女子用のチヒリとし、第51図即ち K2381（写真12）をもって男子用のカロッを示している[鳥居 1919: 432]。一方、長谷部監修『内外土俗品圖集』（第7輯）では、逆に先の第50図をもって男子用のカロッ、第51図チヒリと説明している。北海道アイヌのカロッが火道具入れであり（後述）、その用途からより高い防水性が必要とされるものであるから、折り返しの手付けの K2320 の方が、カロッに対応しいであろう¹⁷⁾。K2320（図版14-1）のカロッは縦 52 cm、横 32 cm の長方形に編みあげた素材を概ね3等分に折り、2つ分の端を綴じ合せて身とし、残る1つ分を折り返しの手付けとするものである。蓋の端には中央に長さ 1 m 程の紐が結び付けられており、蓋を閉じた状態で身と共にこの紐を2重に巻きつけるようになっている。K2381 のチヒリは2つ折り

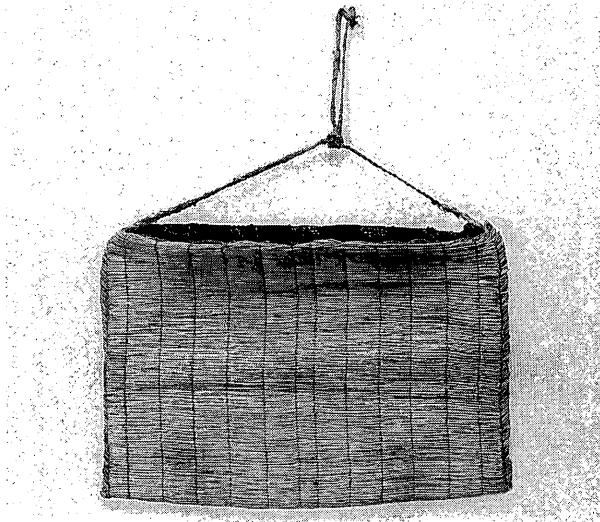


写真12 物入れ K2381

17) 仏語版『千島アイヌ』の方が、挿図番号と掲載写真とを取り違えた単純な校正ミスと考えられる。

の作りで、口には木綿布が縫い付けられている。

鳥居収集品以外の物入れとしては5点のものが函館博物館に収蔵されている（函1098, 函1099, 函1100, 函1206, 函1209）。シコタン島で馬場脩によって収集された函1209は緻密な編み方によるものであり、鳥居収集品と同様な編み方である他の4点とは異なっている。移住以前の1875年にシュムシュ島で収集された函1098, 函1099, 函1100の3点は、共に2つ折りの作りで、口には獣皮が縫い付けられている。函1206は折り返しの蓋付きのものであり、蓋の端には中央に長い皮帯が縫い付けられている。K2320と同様に、この皮帯を巻きつけて蓋を閉じ固定するようになっている。受入れに関するデータは不明であるが、前3者と同じく移住以前の収集品と考えられる。

19. 服飾に関する民具類——携帯具（2）火道具入れ

火道具入れ（K2323 写真13左, K2359 図版12-1, K2373 写真13右）とは火打ち石や火口を入れるものであり、海獣の皮を素材とし、身と蓋のそれぞれ2隅を巻き込んで装飾的な突起を作り出している。身と蓋を締め付ける皮紐には根付と火打ち金が付いている。このように特徴的な形態でありながら、鳥居の伝語版にはこれについて触れられるところが一切なく、やや特異な取り扱いといえる。この点については後に言及する。尚、北海道アイヌにおいては火道具入れとは先のカロッのことであり [萱野 1978: 132], その中に火おこし道具としては火打ち金（カッカニ）付きの火つけ炭入れ（カッパシントコ）や火打ち石（カッスマ）を入れている [萱野 1978: 90]。これ全体が内容的には鳥居収集の海獣皮製の火道具入れに相当するといえよう。

以上、服飾関連の民具類については衣服、装身具、履物・被物、携帯具の4小項目

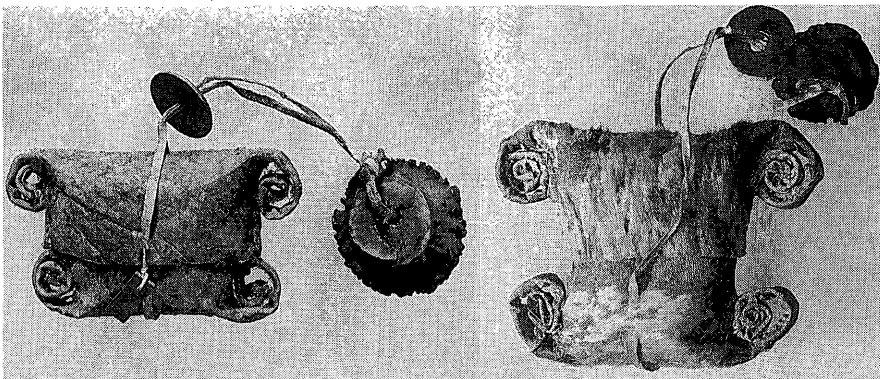


写真13 火道具入れ：左 K2323, 右 K2373

を設けて、それぞれに属する個別の民具類の特徴を概観してみた。鳥居収集品の数量的割合は衣服 7 点・10.3%，装身具 1 点・1.5%，履物・被物 3 点・4.4%，携帯具 5 点・7.4% で、全体としては 16 点・23.5% となる。特に衣服類のうちでも腰帯 5 点は全体の 7.4% を占める数量であり、鳥居の関心の高さが窺える。また、現在その所在が確認できたクックルケンはずかに 1 点だけであったが、実際には 5 点程のものが鳥居によって収集されているはずである。クックルケンは装飾性が高く、造形的にも優れたものである。その出現は北千島の新石器時代（馬場脩の内耳土器時代）にまで遡って確認できるものであり【鳥居 1919: 548, 図版 XXX II B-1, 2】、鳥居の還元的土俗に適った民具類といえよう。腰帯についても、鳥居は素材が海獣皮から布へ代わっただけであり、形態や文様は以前のままでであると記しているの、その是非はともかくとして、鳥居にとってはやはり還元的土俗たりうるものであることになる。ただし、腰帯の刺繍による文様表現の豊かさが、クックルケンと同様にその収集傾向をより高めたであろうことは十分に考えられる。

20. 儀礼・信仰に関する民具類（1）——削り掛け

儀礼・信仰関連の民具類としては削り掛け 3 点、酒箸 1 点、幣 1 点、男子儀礼用鉢巻 1 点、仮面 1 点、祭具 1 点、墓標 1 点の計 9 点、13.2% である。

削り掛け即ちイナウには柳樹を用い、奉る神に応じて削り方を異にする【鳥居 1919: 447】。K2325 の削り掛けは海の神アツイカ＝ワン＝カムイに捧げるラブ＝イナオまたはラブスペと呼ばれるものである（『土俗品目録』）。その他のイナウには特定の名称はないが、大（チュブカシ）小（ナントシ＝イナオ）の 2 種類に区分され、大きいイナウは雷神カンナン＝カムイに捧げるものであり【鳥居 1919: 448】、K2326・K2327 はそれに該当する。K2327 のイナウ（図版 13-1）には、上端から 7 cm のところを起点とする下向きの大振り（燃りをかけた削花：下から上へと削り上げたもの）1 対と、それらの上隣りに作りだされた上向きの小振り（削花：上から下へと削り下げたもの）1 対とが、左右対称に計 4 つ付いている。下向きの大振り（燃りをかけた削花）は、正面右寄りから右側面にかけて 3 単位（ケ）と、左側面から背面左寄りにかけて 3 単位（ケ）とを削り出し、ケ 1 単位ごとに燃りをかけ、さらに左右それぞれに 3 単位を 1 束にして、左右両者を正面で軽く燃り合せたものである。上端寄りには正面と両側面の 3 面にイトッパが刻まれている。イトッパは、両側面にはそれぞれの上部にツイットッパを配し、正面にはその下部に斜行するツイットッパがあって、その上下にアシペイトッパがつくものである【名取 1959: 102】。下端は 9 cm

のところから、前後左右の4面とも削られ尖らせてある。

シコタン島への移住に際しては、既にロシア正教に改宗してはいたが、乗ってきた船の船首にはイナウが掲げられており、「宗教上であろうとなかろうと、生活の中での重要な行動、わけても祭礼にはイナオを欠かすことはできない」[鳥居 1919: 448]と記述されている。では、鳥居の調査時にはどのような状況にあったのか。収集されたイナウには特に模型品であるとの記録はないので、1899年時点でも慣行としてイナウを用いた儀礼的行為が執行されていた可能性が考えられる。ロシア正教の信仰、先に確認したカムイノミの衰退、イナウを用いた儀礼的な慣行、これらの重層した儀礼体系を1899年時点のシコタン島のクリールアイヌの暮らしの中に認めることができるかもしれない。

21. 儀礼・信仰に関する民具類(2)——仮面

仮面(K2378 図版12-2)は模型品であるが、現存するアイヌの唯一の仮面として注目を集めてきたものである。縦16 cm、幅9.5 cmで、実際に顔面に装着するのには小さすぎる。頭頂部と両脇中央とは1つずつ計3つの小孔が穿たれており、仮面の裏側で紐が逆T字状になるように結び付けられている。この紐の結び方から、本来は頭に紐を掛け、顔面に装着するものであることが確められる。すなわち、この仮面は模型品としてやや小形に作られたものであり、本来は額に掛けるような仮面ではなくて、現物はもっと大きいものであったと考えられる。目と鼻穴には実際に孔が開けられ、口は軽く開いた状態に彫りくぼめられ、その中に歯が表現されている。髭は沈線状の刻みで表現し、彫り込んだところを黒く塗っている。髪と眉毛、睫は黒色のペインティングで表現される。注目すべき点は、鼻は鼻先が向かって左側へ曲がっており、口は同じく右端がつり上がって斜めになっていて、全体として左右非対称な表現が作りだされているところである。この仮面はフジルという伝説上の化物が人をおどす時に用いるものであり、また人がフジルを真似て他の人をおどすために付ける仮面でもあることが当事者によって語られている[鳥居 1919: 476]。北海道アイヌやサハリンアイヌの間には仮面の存在は知られておらず、クリールアイヌのこの仮面は海岸コリヤークやアリュート、アラスカのエスキモー、北米北西海岸の諸民族へと広がる北太平洋地域とのつながりの中で理解できるものである。

22. 儀礼・信仰に関する民具類(3)——祭具

ここで祭具としたものは、流星形の片側中央に三角形の突起が1つ付いた、長さ

13 cm, 高さ 3.6 cm の小形の木製品である (K2321 図版13-3)。三角突起の反対側のやや端寄りには短軸方向に 1 つの小孔が穿たれている。全面に煤が付着するが、小孔部には煤の付着が見られないので、小孔が穿たれたのは煤の付着以後である可能性が考えられる。三角突起の先端と後端部の先端とが摩耗しており、木の地肌が露出している。『内外土俗品圖集』には「海神に捧げる幣に附ける鯨を象つたもの」と記されている。鳥居は1921年の北樺太の調査の際に、キケにくるまれた木製の人形と獣形とを北樺太東海岸で数点収集している (K2537, K2703~K2707)。これらは『内外土俗品圖集』ではオロッコ (ウイльта) の神像であろうと説明されている。獣形のものはいずれも煤が付着している点が本品と共通する。また、鯨形とされる本品は、銆先に繋がれた綱の末端に結び付けられる握り手 (例えば『アイヌ民族誌』写真182 及び口絵63参照) と類似した形態である。1 孔が開けられている点も共通している。

伝語版『千島アイヌ』「第21章 千島アイヌの伝説と神話」中の「伝説13 サチ (魚の一種) 物語」に、第96図「木製サチ魚」[鳥居 1919: 481] として掲載されているイラストが本品を描いたものである。ただし、当該品についての説明は一切なされていないので、にわかにその用途を判定することは難しい。全面に煤が付着するなど、ウイльтаの「神像」と共通する性格をもつものであるならば、イノカ (木偶) とすることができよう。しかし、小孔が穿たれている点に着目すれば、銆綱の握り手とも考えられる。また、両用途の間で転用があったとも想定される。今後の課題として、同類の民具類に関する使用痕の観察と民族誌的記録との比較が必要となつてこよう。

儀礼・信仰に関する民具類は総数 9 点、13.2% であり、4 項目中で最も低い値となっている。これらの民具類が他のものに比べて、本来的に収集し難い性質である点が考慮される。また、ロシア正教化に伴う伝統的な信仰形態の変容と、全体としての儀礼体系の重層化とが、物質文化の上で還元的土俗という観点からの収集を困難にしていたことも推察される。そして、シコタン島移住による伝統的な生活様式の強制的な変更が、クリールアイヌの精神的・物質的な生活環境を急速に崩壊させていったことが、その背景にあることは否めない事実である。

V. クリールアイヌの民族文化誌的再構成

1. 生業活動と海洋適応

(1) 生業関連民具類の収集量の少なさ

鳥居が収集した民具類のうち、生業関連のものは全体の20%にも満たないが、それ

らからはクリールアイヌが狩猟採集民であったことが想像される。これは鳥居の民族誌とも矛盾しない。ただし、先にも想定したように、鳥居の調査時（1899年）は既に還元的土俗を復原するうえで、生業に関する民具類の収集が難しくなりつつあった時期である。収集した生業の民具類のほとんどが模型品であったことは、収納状態での規模が他の民具類と比べて大きいことも考慮しなければならないが、根本的には収集が困難な状況の表れであると判断される。

狩猟採集民であるとの想定は、それに関連する民具類の豊富さによるものではなく、他の生業関連の民具類が欠如することからの、むしろ消去法的な想定といえるものである。しかも狩猟採集といっても、その内容は実際には狩猟にはば限定される。採集に関しては、食糧品として木の実そのものが収集されているが、採集活動の存在を積極的に肯定する道具は収集された民具類中には見られない。また、漁撈に関しては、模型品として3点の船が収集されているものの、そのうちの1点（K2379）から船の形態を知りうるだけで、他の2点は船に描かれていた船章（船印、Irongot）を説明するためのものに過ぎない。獲物を直接に捕獲する銛や漁網などの漁撈具は収集されておらず、民具類から漁撈の内容を想定することは不可能である。

(2) アイヌ民族起源説と海洋適応の否定

鳥居は民族誌中で、クリールアイヌは現在においても、また過去に遡っても、「海洋民族」ではないことを強調している【鳥居 1919: 429】。鳥居によるアイヌの中近東起源説と北海道一千島2段階移住説とを立証するためには、クリールアイヌが海洋民族であってはならないのであった。かれらの起源地が中近東であれば、「必然的に彼らは好戦的な陸上生活者である」【鳥居 1919: 429】（傍点は小杉）ことになる。また、北海道一千島2段階移住説による第1次移住民であるクリールアイヌの祖先が、航海術に長けていなかったからこそ、ひと度北海道や千島に渡航したが最後、故地との交流が絶え、第2次移住民である北海道アイヌとの間にも、お互いが本来同一の民族であるという認識が途絶えてしまった、ということになる。

アイヌの起源に関する記述の中には、上記の2説が繰り返し論じられるが、その物証の1つとなりうる船についての項目「第20章 千島クシ=アイヌの習俗」「15. 舟」【鳥居 1919: 429-432】では、これを否定的に取り扱うが必要になってくる。即ち、筏以外に航海の術を知らなかったクリールアイヌは、船に関する一連の事柄を北海道アイヌから学ばなければならなかったし、北海道アイヌも元は日本人からその技術と知識を学びとった、ということになる。

しかしながら、アイヌの起源に関する記述箇所から離れたところに記されている、クリールアイヌの海との係わり方は、かれらが海洋民族ではなかったという主張とはむしろ反対の内容であるといえよう。クリールアイヌを海洋民族と呼ぶことが適当か否かの問題はあるが、かれらの海洋適応がどの程度のものであったのかを整理する必要がある。まず民族誌からそのような内容の箇所を抽出し、クリールアイヌの生活全体に占める海との係わりの程度を検証する。先に確認したように、収集された民具類の中には模型品の船3点の他には、漁撈活動に直接的に附随した道具は含まれていない。そこで、民具類の素材に着目し、海産物として調達された素材が、収集された民具類の素材としてどの程度使用されているのかを調べてみる。

(3) セツルメントについて(1)——人口、コタン＝バ

鳥居は、クリールアイヌは1884年のシコタン島移住以前にはシュムシュ島(約40名)、パラムシル島(約50名)、ラショワ島(約40名)の3島に居住していたと記述している¹⁸⁾。仏語版『千島アイヌ』の「第6章 千島アイヌの年間移住」には、鳥居自らがクリールアイヌのインフォーマント(グレゴリー、エティアヌヌ、ローレンツの3名)から得た情報として、1876年から1883年にかけての「定期的移動」についての記録がある。これによると、北千島の人口は1876年に80人、1883年に97人であるが、しかしながらその時点での彼らの拠点的な居住地はシュムシュ島だけであったことがわかる。

以上のことを整理するならば、シコタン島への移住の直前、ないしはその数年前には、クリールアイヌの拠点的な居住地はシュムシュ島のみであったが、それ以前(実際に何年前にまで遡るかは不明であるが、おそらくそれ程昔のことではないであろう)には、パラムシル島とラショワ島にも拠点的な居住地があり、北千島の人口は全体で約130人程であった、ということになる。またその当時は、パラムシル島がクリールアイヌの生活の中心であったが、ロシアのカムチャッカへの進出やペテロパブロフスクの開設にともない、カムチャッカとの交通の便の上で、やがてカムチャッカ寄りのシュムシュ島へとクリールアイヌの生活の中心が移っていった、というような北千島での中心となる拠点的な居住地の変動もあったことが窺われる[鳥居 1903: 13]。

シュムシュ島、パラムシル島、ラショワ島、これら3島の拠点的な居住地は「コタ

18) 島名の片仮名表記には何種類かのものがある。日本語版『千島アイヌ』[鳥居 1903]に掲載された「明治十七年以前千島付近ニ於ケル各種族分布図」においては各島名が漢字で表記されているが、これが『鳥居龍藏全集』第7巻に所収される際には各島名が片仮名表記に改められている[鳥居 1903: 6-7]。ここではその片仮名表記を用いることにする。

島名	コタン=バの呼称	人口	住居軒数	倉庫(バラガン)	船	船章(イロンゴット)
シュムシュ	Betopó	40人	10軒	6棟	(大)4 (小)3	フジル木面
パラムシル	Betopó	50人	—	なし	(大)1 (小)4	柄絵・シャチ
ラショワ	—	40人	8軒	なし	—	眼形

(注) —：記述内容不詳

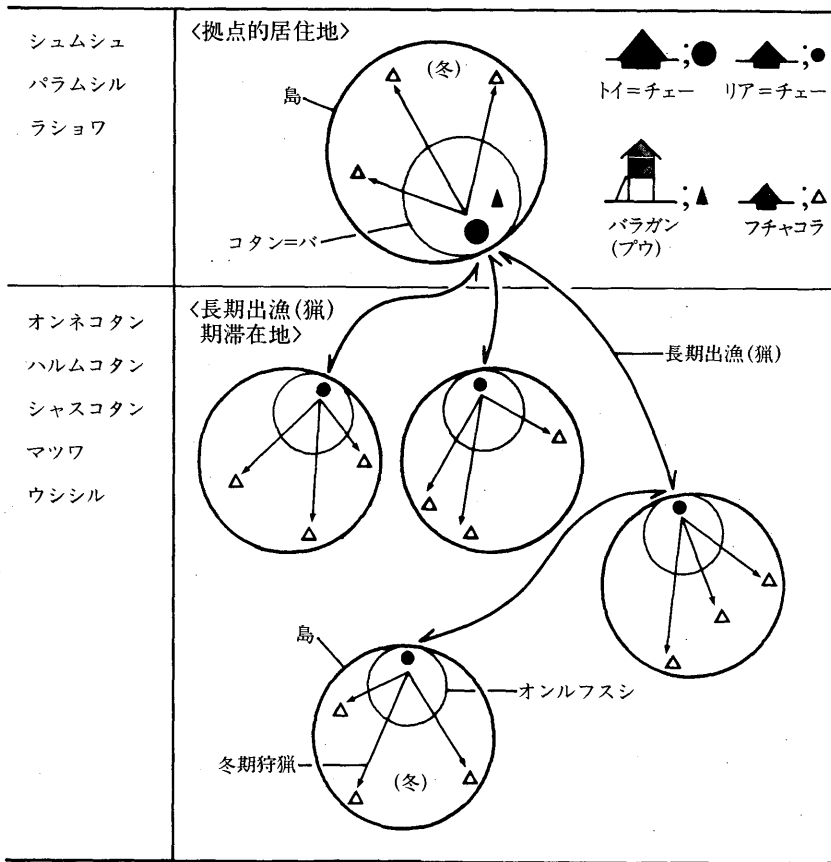


図4 コタン=バとオンルフスシ

ン=バ」と呼ばれた。各コタン=バには数軒から10軒程の堅穴住居があり、40人から50人程度の人たちが暮らしていた(図4上表)。堅穴住居は「チェー」または「トイ=チェー」と呼ばれた。この他にシュムシュ島だけには、6棟の高台(高床式の倉庫)

があった。これがカムチャッカの「バラガン」に由来するものか、あるいはアイヌ固有の「プウ」であるのか、鳥居も報告年次によってその解釈に変化が生じている。日本語版『千島アイヌ』[鳥居 1903]ではカムチャッカからの由来の可能性を指摘するが、仏語版『千島アイヌ』[鳥居 1919]では「プウ」の可能性へと見解が移行している。

(4) セツルメントについて (2) ——船章

それぞれのコタン＝バには漁撈のための小船隊が組織されており、その所有する船にはコタン＝バごとに図柄を異にした船章が舳先寄り両舷側に描かれていた。海上では、この船章によって自他のコタン＝バの船が識別された。図版 2-1・2a・2b は船章を示すために作られた船の模型品である。厚手の 2 には片面ごとに異なる船章が、薄手の 1 には片面だけに 1 種類の船章が描かれ、2 つの模型品で都合 3 種類の船章が表現されている。舳先を黒く塗り、また中央よりもやや後部寄りの船縁が突出する部分を黒く帯状に塗る点が、3 例に共通する表現になっている。図版 2-2a ([鳥居 1919: 330] 第 6 図 a に該当) は帯状に縁取った横倒しの涙形の中央に円文を配する図柄であるが、鳥居の記述によればこれはラショワ島の船章で、人の目 (チブシキ) を表現したものである。図版 2-2b ([鳥居 1919: 330] 第 6 図 b に該当) は舳先の黒塗り部の端が渦巻状 (トモエノク) になり、その脇に魚形 (鯨) が描かれるもので、パラムシル島の船章である。薄手の図版 2-1 には、その片面 ([鳥居 1919: 330] 第 6 図 c に該当) にシュムシュ島の船章である人面が描かれている。鳥居の記録では、この人面はフジル (第 IV 章 21「儀礼・信仰に関する民具類 (2) ——仮面」参照) を表現したもので、実際には舷側にフジルの木面が打ち付けられていたとされている。

(5) セツルメントについて (3) ——オンルフスシ、フチャコラ

さて、クリールアイヌは拠点的な居住地「コタン＝バ」の他に、オンネコタン島、ハルムコタン島、ジャスコタン島、マツワ島、ウシシル島に「オンルフスシ」と呼ばれる漁場をもっていた。漁期 (猟期) にはコタン＝バに老人と子供が残され、若者や頑健な男女が各オンルフスシへと出かけていった。冬期にはここで越冬もされた。オンルフスシには「リア＝チェー」または「イヌン＝チェー」と呼ばれる漁戸が作られたが、これはコタン＝バの堅穴住居をひとまわり小さくしただけの住居である (図 4)。

尚、コタン＝バでも、またオンルフスシにおいても、冬期にはその島内の他の場所にいくつかの狩猟用の仮小屋が作られて、狐や鳥類の狩猟が行われた。この仮小屋は

「フチャコラ」と呼ばれ、漁戸よりもさらに簡単な作りの堅穴式のものである。

以上のように、クリールアイヌの生活は拠点的な居住地であるコタン＝バと、漁撈狩猟期間のオンルフスシとを中心として、冬期にはさらにその周辺にフチャコラという仮小屋が作られて狩猟が行われる、というものであった。クリールアイヌのセツルメント・システムは漁撈狩猟を軸にして組み立てられたものであり、特に生活環境が島嶼・海洋域でもあり、漁撈・移動・運搬の手段としての船及び航海技術が発達し、彼らの生活体系が海洋適応を1つの根幹としていたものであることが確認される。このことは、コタン＝バとオンルフスシとの間での住み分けが、単に季節的なものではなくて、数年に及ぶ漁撈狩猟期間の活動拠点となるオンルフスシと、漁撈狩猟の非適齢メンバーの居住及び財産保管の場所としてのコタン＝バという機能分担から成り立っている点からも窺うことができる。この点を、次に確認してみよう。

(6) 長期出漁(猟)型海洋適応

クリールアイヌのオンルフスシを中心とした活動については、先に引用したグレゴリーらをインフォーマントとする鳥居の記録から、シコタン島移住の直前の状況を知ることができる。1876年当時、実質上のコタン＝バはシュムシュ島だけになっており、北千島の人口は80人であったと推定されている。そのうちの10名の者は既に1873年にシュムシュ島を出港して、他の島々へと出漁(猟)したままであり、1876年には新たに38名の島民が出漁(猟)するので、シュムシュ島には漁撈狩猟の非適齢メンバーである老人や子供など32名が残ることになる。

1876年に出港した一行38名の内訳は、男20名、女18名である。大形の2艘の船に、男11名・女13名の合計24名と、男9名・女5名の合計14名とが分乗する。大形船はそれぞれ小形船1艘を曳航し、また猟犬を5匹ずつ乗り込ませていた。途中で同行することになる1873年出港の一行は船1艘に乗員10名で、その内訳は男6名、女4名であった。また、シュムシュ島に残留した32名の島民は、男16名、女16名である。島には沿岸漁業用の大小2艘の船が、70匹の猟犬と共に残された。

1876年に出港した後発の一行は、同年中にパラムシル島で先発隊10名と合流し、シャスコタン島(1876年越年)、マツワ島(1877年越年)、ラショワ島(1878年越年)、マツワ島(1879年越年)、ラショワ島(1880年越年)、ウシシル島・ラショワ島(1881年越年)、シャスコタン島(1882年越年)の順に渡航して漁撈狩猟を続けながら、1883年にシュムシュ島へと帰島している(図5)。その7年間には、シュムシュ島では10名(男5名・女5名)が死亡し、6名(男2名・女4名)が誕生しており、一方、

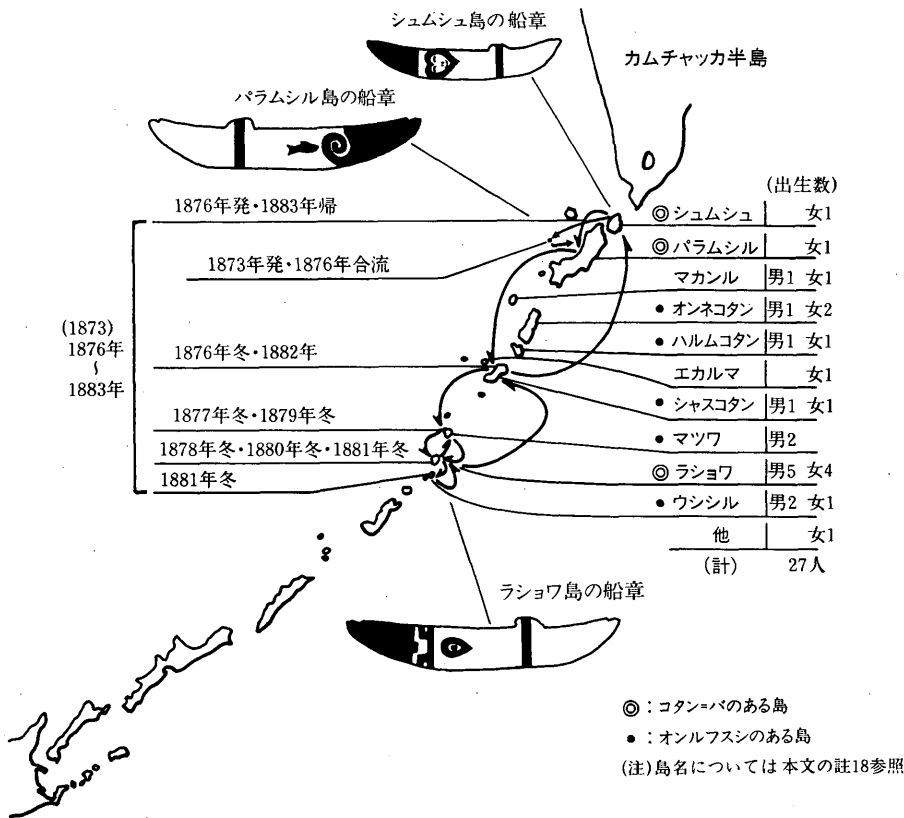


図5 クリールアイヌの長期出漁(猟)型海洋適応

航海中の一団では6名(男6名)が死亡し、27名(男13名・女14名)が誕生している。即ち1883年には、シムシュ島での残留人口が28名、帰島組が69名、北千島の全人口は合計で97名(男46名・女51名)という計算になる¹⁹⁾。

以上の事柄のうちで、次の4点に注意する必要がある。第1は出漁(猟)が数年に及ぶ点。第2は壮年の男女が共に出漁(猟)する点。第3は、よって出漁(猟)期間中に新たな成員、即ち子供が誕生する点。第4は相当数の成員が出漁(猟)中に亡くなる点、などである。即ち、クリールアイヌのセツルメント・システムは、生業活動の舞台と居住場所とをシーズンナリティに基づいて循環する面よりも、彼らのライフ・サイクルそのものが生業活動の中に埋め込まれている点にこそ、その特徴があるといえよう。この生業活動とは、オンルフスシのある島々を中心とした漁撈と狩猟であり、

19) 日本語版『千島アイヌ』[鳥居 1903: 52] では1984年当時の男女別人口は男45名・女52名となっている。

それは優れた船と航海術に支えられた長期出漁（猟）型海洋適応といえるものであった。

（7） 民具素材と海洋適応（1）——民具素材の分類と木材の利用率

鳥居収集のクリールアイヌ民具類、及び民族誌中で言及されている民具類を素材の面から概観すると、主なものとして木材、皮革及び動物性繊維、非加工植物性繊維（草）、紡績素材（糸・布）、金属の5つに区分することができる。（この他にも粘土と骨角素材の民具類も紹介されているが、その多くは既に製作されなくなっているもの、あるいは上記のうちのどれかの素材へと転換されてしまったものがほとんどである。）これらを材質の硬くないしは柔軟性によって、軟素材（皮革及び動物性繊維、非加工植物性繊維、紡績素材）、準硬素材（木材）、硬素材（金属）に分類することも可能である。ただし、素材のこのような特性は、製作の各工程における処理の仕方によって、例えば材料段階と製品段階とでは異なることもあり、そのような場合にはどちらの状態を問題としているのかを明記する必要がある。

さて、これらの素材のうちでも、利用率が圧倒的に高いのは準硬素材の木材である。加工のし易さの点からも、木材は模型品の製作にも頻繁に用いられる。よって、模型品が多い生業関連の民具類については、必然的に木材の利用率が高くなっているのも、正確な状況が反映されたものであるとは一概にいけない。同様の傾向は収集民具類全般にいえることではあるが、その点を考慮したうえで、特に木材が素材として優先的に使用されるものに、容器・杓子類と儀礼・信仰関連の民具類とがある。鳥居収集の民具類から金属製の容器類が欠落するのは、既に確認したように、還元的土俗が一因であることは明らかである。調理の際の煮沸には、水を入れた簡易的な作りの木製容器に焼け石を投入する方法が紹介されているが[鳥居 1919: 434]、それは金属製容器が普及する以前における、土器の携行が不便な出漁（猟）先でのことであり、それに該当するような木製容器は収集されていない。鳥居の調査時には金属製容器による煮沸と木製容器への盛り付けというコンビネーションが、より一般的な調理と食事の形態であったと推測される。また、クリールアイヌをはじめとしてアイヌ全般において、柳が神聖で象徴的な存在であることが述べられているが[鳥居 1919: 469]、柳材を素材とする削り掛けや酒筥が中心的な位置を占める儀礼・信仰関連の民具類においても、必然的に木材の利用率が高い値を示している。

(8) 民具素材と海洋適応(2)——海獣皮・内臓, 海鳥皮の有用性

皮革素材・動物性繊維は、そのものが主要素材となるものの他に、副素材としても多様な用いられ方をしている。そのような場合、外見の肉眼観察だけではそれが陸獣のものか海獣のものを判別し難い素材も多いが、鳥居の民族誌中に明記されている事例では圧倒的に海獣から採られたものが多い。皮革を主要素材とする民具類の代表としてはまず衣服が挙げられる。衣服は軟素材である獣・鳥皮製品と紡績製品とに分けられる。先に紹介したラコツア=チロニブやチルフなどの身丈の長い6種類の上着のうち、北海道アイヌから入手したシケメカラベ(アットゥシ)とカムチャダールやコリヤークなどと共通するデムカムル(木綿布製)とが紡績製品であるだけで、残りの4種類は海獣皮か海鳥皮かのどちらかを素材とするものである(ラコツア=チロニブ[ラッコ皮], ツクアル=ウルブ[アザラシ皮], チルフ[エトビリカ鳥皮], ハルフ[鴨鳥皮])。また、この他の衣類として紹介されているものでは、チャチャンケ(褌)が紡績製品(モシの植物性繊維を使用)であるだけであり、鹿皮製のオユ(半ズボン)やアシカ皮製のオルマカ(下着), トドの腸を使用するフスト(雨合羽)などが獣皮, とりわけ海獣皮やその内臓を素材としている。

また、収集された5点の腰帯(オユ=クト)の主要素材は木綿布であるが、その片端にはバックルに結び付けるための皮紐(海獣皮か)が縫い付けられている例もある。鳥居はこれが以前には全体が海獣皮で作られていたことを記述している。さらに、防寒性や耐水性などの高い性能が要求される長靴や帽子には、トド皮やラッコ皮が用いられている。これもまた高い耐水性が必要なものであるが、収集された火道具入れは海獣皮を主要素材とするものである。この他にも、海獣皮や内臓は副素材として弓の弦や矢羽の緊縛糸などとしても多用されている。

衣類の素材として海獣皮や内臓, 海鳥皮が多用されるのは、素材そのものに備わっている保温性や耐水性, 耐久性, 加工のし易さなどの特性によるものである。また、このような特性を備えた衣類を強く必要とする生活であったことの表れでもある。一方、海獣皮や海鳥皮を素材とする服飾品で日常的に身体を取り巻き、また漁撈具や狩猟具の重要な部品として海獣や海鳥から得られる素材を利用し、かつこれらを長期にわたって使用し続けたことの結果として、その素材を供給する動物と自分たちとの間に観念的な特別な関係が醸成されていた状況や、あるいはこれとは反対に、そのような観念の存在を前提として、海獣や海鳥の素材を好んで選択するという状況が形成されていた可能性も考慮する必要がある。いずれにしてもクリールアイヌが海獣や海鳥から得ていた素材の種類と量は、北海道アイヌと比較しても特に豊富であり、彼らの

海洋適応の一面が如実に反映されているといえるだろう。この点は、鳥居によって収集された生業関連の民具類の用途からは直接的に復原しえなかった内容であり、民族誌から抽出した長期出漁（猟）型海洋適応に合致するものである。

2. アイデンティティとクリール文様

（1） 林欽吾による定住群族と漂泊群族について

林欽吾は、恐らく鳥居龍藏著『千島アイヌ』[鳥居 1903, 1919]等を参照しながら、シコタン島移住以前の北千島（即ち「北千島時代」）のクリールアイヌは南北の2群に分れており、「チュブカオンクル」（「東方人」の意）と呼ばれる北群（シュムシュ群）が定住群族であり、「ルートモンクル」（「経路人」の意）と呼ばれる南群（ラショワ群）が漂泊群族であったと論じている。「チュブカオンクル」はパラムシル島からシュムシュ島、そしてカムチャッカ半島に居住するクリールアイヌであり、ロシア人との接触後には、菜園を作ったり牛を飼ったりしたとされている。一方、「ルートモンクル」はパラムシル島よりも南の島々を中心に活動するクリールアイヌであり、「海陸獣を遂ひつつ島嶼間を移動生活し、或る期間の後に基地に帰還するがまたそれを反復する」人々であるとされている。さらに、北千島のクリールアイヌのこの2群は、ボロンスキー著『千島誌』に記録されている18世紀代に、カムチャッカ半島及びシュムシュ島に居住していた「ウイウトエスケ」と、パラムシル島以南の島々に居住していた「アウンクル」とに系譜が迎れることを論じている[林 1940: 178-181]。

一方、菊池勇夫は文化年間（1804-1818）の「エトロフ島へ渡来ラショワ人取調菊地惣内上書」等をもとにして、18世紀後半には千島列島のアイヌが3つのグループに分れていたことを論じている[菊池 1995: 160-161]。それらはパラムシル島を拠点とした集団、ラショワ島・シムシル島の集団、エトロフ島を本拠とする集団である。パラムシルの集団はいち早くロシア化したアイヌであり、ラショワ・シムシルの集団とは交易関係で密接な往来があったが、別集団であったと理解されている。これに対して、ラショワ・シムシルの集団とエトロフの集団との間には、言語上の地域差がみられたものの、「非常に近い関係を持っていた」[菊池 1995: 161]とされている。

19世紀に入り、1803年には幕府がエトロフのアイヌがウルップ島に渡航することを禁止し、1811年のゴロヴェン事件を経て、1854年の日露和親条約によってエトロフ島以南の南千島が日本に領有され、ウルップ島以北の中部・北千島がロシアに領有されると、先のエトロフ島のアイヌは北海道アイヌとの同化の度合を強めていく。それとは反対に、パラムシル島のアイヌをはじめとして、ラショワ島・シムシル島のアイヌ

は一層のロシア化を促進することになる。林が論じる「北千島時代」のクリールアイヌとはこの時期に相当するものである。即ち北群（シュムシュ群）が菊池のいうパラムシルの集団に、南群（ラショワ群）が同じくラショワ・シムシルの集団にはほぼ対応するであろう。しかし、この2集団を直ちに生業活動の相違とも結び付けただけで、鳥居が記述するところの「チュプカ＝グル」と「ルトン＝モン＝グル」とに対応させるのには問題がある。

（2） クリールアイヌの自称

その経緯をやや詳しく説明する。鳥居は仏語版『千島アイヌ』で、クリールアイヌは彼らよりも東に住むカムチャダールを「チュプカ＝グル」（「東・人」の意）、西に住む人たちを「ルトン＝モン＝グル」（「西に住まへる人」の意）と呼んでおり、自らを「アイヌ」と呼称していたと記述している【鳥居 1919: 336】。しかし、日本語版『千島アイヌ』における同一内容を記述した箇所の説明は、これとやや異なっている。クリールアイヌによってカムチャダールが Chup'ka-an-guru（チュプカ＝アン＝グル）と呼ばれる点には基本的な違いはないが、クリールアイヌは自らを Rūton-mon-guru（ルトン＝モン＝グル）と呼称することが記述されているが【鳥居 1903:28-29】、この段階で鳥居自身に誤解があったことが推察される。すなわち、クリールアイヌが自らを「ルトン＝モン＝グル」（西に住まへる人）と客体化して呼ぶことの矛盾が解決されないままに記述されてしまっている点である。尚、日本語版『千島アイヌ』ではこれに続いて、クリールアイヌは自らも含めて人を Aino と呼ぶことが記述されている。

後年、仏語版『千島アイヌ』を執筆する際にはこの矛盾点に気づき、修正が加えられる。それが先に記した、クリールアイヌが自らを中心に置き「アイヌ」と称し、その東のカムチャダールを「チュプカ＝グル」、その西に住む人を「ルトン＝モン＝グル」と呼称する方位民族観である。しかし、鳥居の仏語版『千島アイヌ』での修正は、より記録性が高い日本語版『千島アイヌ』の記述内容を一方的に改変しただけであり、クリールアイヌからの聞き取りとその記録の際に何故そのような矛盾点が生じてしまったのかを解決するまでに至らなかった。

（3） 千島列島の呼称

この問題を解く緒は、日本語版『千島アイヌ』において、クリールアイヌ自らが住まう千島列島を何と呼んでいるのか、についての記録の中に見いだすことができる

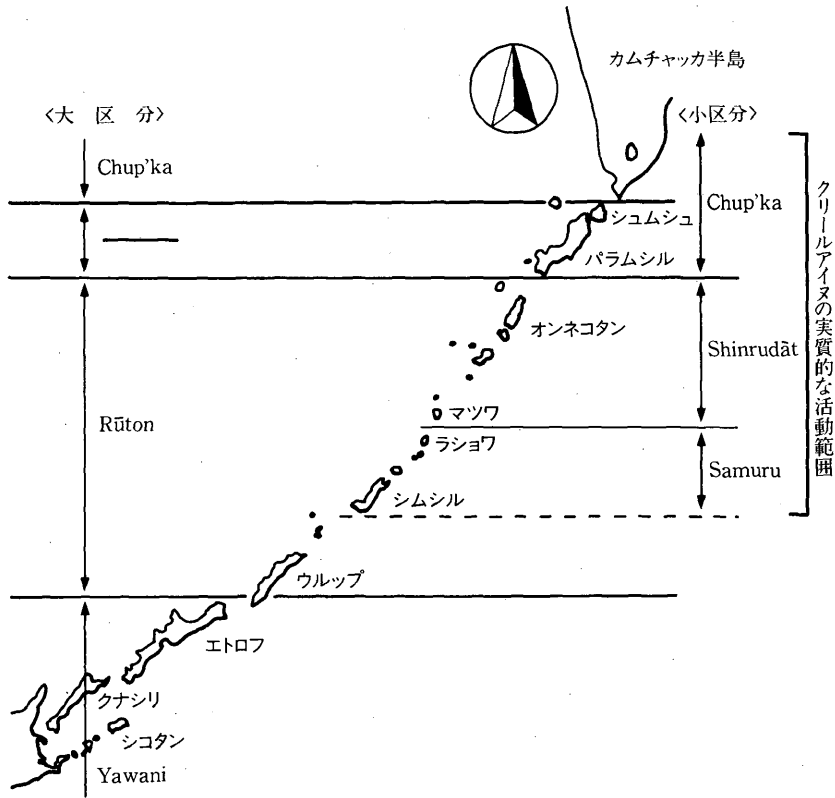


図6 クリール（千島）列島の区分と呼称

[鳥居 1903: 27-28]。その記録内容は鳥居がヤコフとグレゴリーから聞いたものである。まず、千島列島からカムチャッカ半島にかけての地域は、大小2つの基準で区分され、認識されていたことがわかる（図6）。大区分では、北東側から順に、カムチャッカが Chup'ka（チュプカ、東）、シュムシュ島・パラムシル島には特定の呼び名が示されず、続くオンネコタン島からウルップ島までが Rūton（ルートン、西）、さらにエトロフ島から北海道までが Yawani（ヤワニ）と呼称されることになる。ここで注意すべきは、シュムシュ島・パラムシル島に該当する名称が欠落している点である。インフォーマントであるヤコフやグレゴリーの住んでいた拠点的な居住地が、シコタン島移住前にはシュムシュ島であったことを考慮するならば、自分たちが実際に住んでいたシュムシュ島及びその周辺については特定の名称を必要とせずに、そこを中心とした方位名称が Chup'ka や Rūton であったことが理解される。ただし、クリールアイヌの活動範囲は、シュムシュ島とパラムシル島はもちろんのこと、オンネ

コタン島からシムシル島に至るまでの Rūton の大半に及ぶものであり、この点を一義的に評価したことが、日本語版『千島アイヌ』において「ルートン＝モン＝グル」をもってクリールアイヌ自らの呼称とした記述に導いてしまったのであろう。

鳥居の調査時に、クリールアイヌの拠点的な居住地はシュムシュ島だけであったが、彼らの活動の範囲はシムシル島からシュムシュ島、そしてカムチャッカ半島南端まで及ぶものであった。この範囲を1つの単位としてその内部を区分したものが、もう1つの基準による区分、小区分であると考えられる。すらわち、北東側から順に、カムチャッカからパラムシル島までの Chup'ka、オンネコタン島からマツワ島までの Shinrudāt、ラシヨワ島以南（で、恐らくシムシル島まで）の Samuru として、中心をもたずに全体が3つに区分されるものである。

よって、林が定住群族の「チュブカオンクル」の居住域とするカムチャッカからパラムシル島までの範囲は、実はこの小区分による Chup'ka に相当するものであり、一方、漂泊群族の「ルートモンクル」の範囲は大区分による Rūton に該当する。このように、林説が前提とする地域区分は、鳥居が記録した2つの基準が交錯してはじめて生じうるものであるといえよう。19世紀前半におけるラシヨワ・シムシルとパラムシルとに分れていた2集団が、シコタン島移住の直前にはシュムシュ島のみを拠点的な居住地とするまでにいたる経過の詳細はなお不明だが、鳥居の記録内容によるならば、ロシア化の進展が一足早かったパラムシル島やシュムシュ島のクリールアイヌにおいても、ラシヨワ島・シムシル島のクリールアイヌと同様に長期出漁（猟）型海洋適応を遂げており、彼らを殊更に定住群族と評価するのは適切ではない。

（4） クリールアイヌのアイデンティティ

それでは、シコタン島移住以前のクリールアイヌは自分たちのアイデンティティをどのように認識していたのであろうか。鳥居はクリールアイヌが現在（当時）においてはロシア人や日本人、カムチャダール、アリュートとの混血が進み、また風俗や習慣、伝説、神話などについてもカムチャダールやアリュートなどの北方民族と強く関連することを指摘しながらも、形質的にも言語的にも北海道アイヌやサハリンアイヌと同じ「真のアイヌ」【鳥居 1919: 367】であることを強く認めてもいる。しかし、シコタン島移住以前に北千島で生活していた頃には、クリールアイヌはエトロフ島やクナシリ島に居住するアイヌを含めた北海道アイヌやサハリンアイヌと自らとは異なる民族であると認識していたことが記録されている【鳥居 1919: 367】。鳥居はこのような状況を自身の北海道一千島2段階移住説と結び付けて、クリールアイヌと北海道ア

アイヌとは「幾世紀にもわたって互いに忘却されていた」、そして「互いに再会したの
は最近のことにすぎないが、しかし、相互に（同一の民族であると）認め合うことは
ない」[鳥居 1919: 368]（括弧内は小杉補足）と結論している。

しかし実際には、北千島のクリールアイヌと南千島の北海道アイヌとの頻繁な接触
が断たれるのは、19世紀以降の、例えば1803年の幕府によるエトロフ島のアイヌのウ
ルップ島への渡航の禁止や、1820年代の露米会社によるシムシル島・ウルップ島への
アリユートの移住などが行われてからのことである。それ以前における両者の交流な
いしは接触は、より活発であったはずであり、それが両者の物質文化にみられる強い
共通性を維持させてきたのである。クリールアイヌにおいては、北海道アイヌと比較
して、鉄製品の普及が遅れたり、あるいは土器製作が最近まで続いたり、また竪穴式
の住居が依然として続けられていたのは、鳥居の2段階移住説で説かれたようなク
リールアイヌがより古いアイヌの伝統的な生活形態を維持していたからではなく、そ
れぞれが位置する歴史的地理的状況や自然環境への適応の仕方が相違したことに起因
すると考えられる。

（5） 文様表現とアイデンティティ

文様はしばしば集団のシンボルとして機能することがある。その文様は、それを見
る者の脳裏に特定の事物や事柄を直接的に喚起させうる具象的なものであったり、単
に集団と文様との任意的な対応による抽象的なものだったりする。また、集団のシン
ボルとしての文様の機能が、当事者である集団成員によって認識されて意図的に用い
られている場合と、他者がその文様をもって特定の集団を認識するために単なる1つ
の文化的な指標として用いられる場合とがある。ただし後者の場合、そのようにして
認識された集団が、社会的な単位となりうる有機的に結び付いた実体としての集団で
あるのか、特定の社会的な関係を反映しただけの現象としての集団的な輪郭に過ぎな
いのかの判定が必要になってくる。

以上のような文様と集団とについての基本的な関係を理解したうえで、歴史的状況
的に変化する、特定の文様と特定の集団との対応関係を、その時々での対応関係の内容
の理解とその通時的な変化過程の復元とを通して総合的に整理することが、物質文化
から民族文化誌的な再構成を実施する際には、不可欠な作業となつてこよう。ここ
ではシコタン島移住前後の時期におけるクリールアイヌと彼らの使用する文様とがいか
なる関係にあったのかを整理しておこう。

(6) クリール文様(1)——連続三角文

クリールアイヌの文様は「クリール様式」[大塚 1993b: 15]といわれることがあるように、他のアイヌ、即ち北海道アイヌやサハリンアイヌの文様とは異なった特徴をもっている。文様表現の方法は彫刻や刺繍、編み等であるが、そのうちでも彫刻と刺繍においては極めてクリールアイヌ独特の文様が表現されている。彫刻で表現する文様と刺繍の文様とは基本的に異なっている。また、彫刻は男子が行い、刺繍は女子が行うという性的な区分もなされているので、必然的に製作時における男子の文様と女子の文様との明瞭な違いが存在していたことにもなる。

彫刻の代表的な文様としては連続三角文、柳葉文、連続宝珠文、スベード形渦巻文があり、その他に蕨手文などもある。連続三角文と柳葉文は主要な文様図形を浅く彫りくぼめて表現し、連続宝珠文、スベード形渦巻文、蕨手文は線彫りで表現される。これらのうちでも連続三角文がクリールアイヌにとって最も特徴的で、普遍的な文様であるといえよう。連続三角文は、比較的に多い事例では、1辺4mmほどの正三角形が主要な文様図形となる(図7a)。正三角形は1辺から対向する頂点へ向けて斜めに彫り込まれる。文様の全体的な表現に

は、正三角形を列状に配置する方法(列状配置 図7c~e)や既存の沈線に正三角形の1辺を付着させて連続的に配置する方法(付着配置 図7f)、数個の正三角形を対称的に配置して単位文様とする方法(単位文様配置 図7g)、他の主要な文様図形の間隙を充填する方法(充填配置 図7h)などがある。さらに列状配置には、個々の正三角形の一边を揃えて連続的に配置する場合(図7c)や、2つの正三角形を頂点で向き合わせて1単位とし(図7d);あるいは2つの正三角形を1辺で向き合わせて1単位とし(図7e)、それらを連続的に配置する場合などがある。また、連続して配置される正三角形の彫りくぼめた内部を、赤色と黒色とに交互に塗彩する例も多い。この連続三角

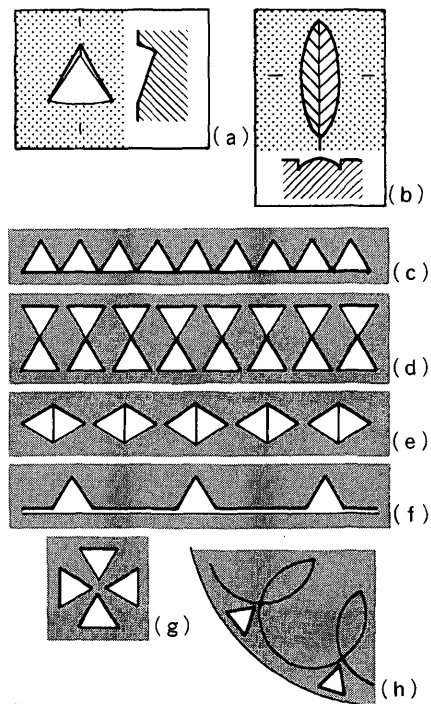


図7 クリール文様(1)

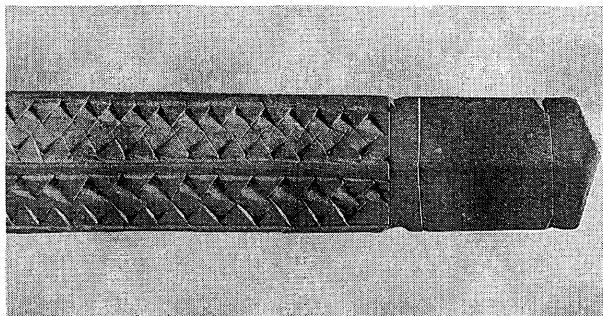


写真14 杓子（柄・部分） K2388

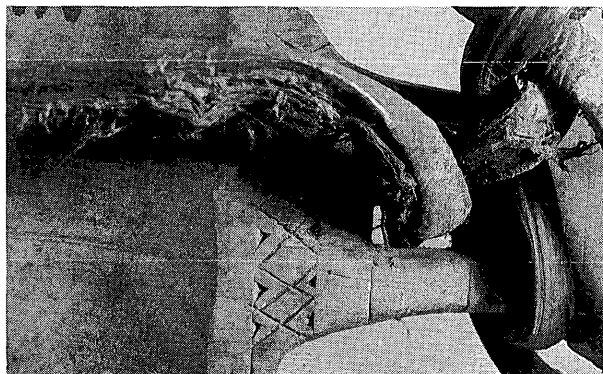


写真15 小児負（腰掛け・部分） K2339

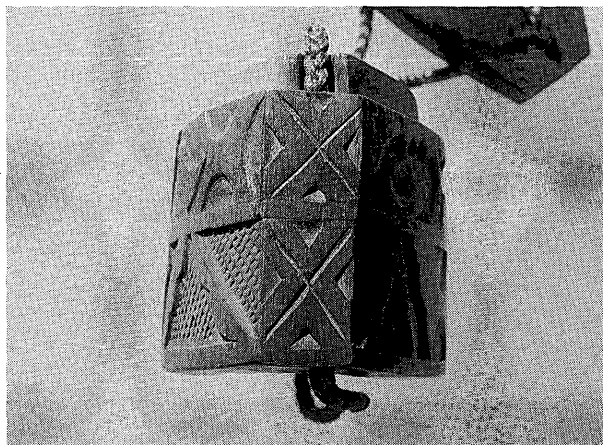


写真16 煙草入れ 函1210

文が主要な文様図形として彫刻されたものには女子用のエベルニキ（図版2-3）、杓子（写真14）、盆（図版5-2）、小児負の腰掛け板（写真15）、煙草入れ（写真16）などがある。また、充填配置や付着配置などの副次的な文様図形として用いられるものにクックルケンや鳥管骨製の針入れなどがある。

（7） クリール文様（2）——連続宝珠文、柳葉文、他

クックルケンは文様を描く空間が円形を呈するため、多様な文様表現がなされながらも強い共通性をもった文様構成になっている。先には連続宝珠文（図8i）を挙げておいたが、これと関連する連続ループ文（図8j）や環状鎖状文（図8k）などと呼称するのが適当な一群の文様が、クックルケンと強い相関を示している。さらに、クックルケンの文様としては以上のようなループ・宝珠・鎖状を基調とする一群の文様に他の文様図形、例えばスベード形渦巻文（図8l）が組み込まれて、より複雑な文様表現をとる例もある（図8m）。尚、スベード形渦巻文は複雑な文様図形でありながら、それ自体が左右線対称をなす点に特徴がある。2つのスベード形渦巻文が線対称に配置された文様構成をとる例に、旭川市博物館に収蔵されている小筥（旭4960）がある（図版15-2）。

柳葉文は木葉形の浅い彫り込みに、矢羽状の沈線で葉脈を表現した文様図形を基調とするものである（図7b）。この文様図形が枝状に表現された沈線に付着して、具象的に植物を表現する場合と、他の主要文様図形で構成された空間の充填文様として単独で用いられる場合などがある。尚、鳥居は柳葉文を説明する中で、柳がアイヌにとって神木であることを付け加え、また男子用のエベルニキの鞆に彫られた柳葉文（写真8）が「所有者を悪霊から護るため」【鳥居1919:423】のものであることを記している。柳葉文が彫刻されたものには、ここに引用した男

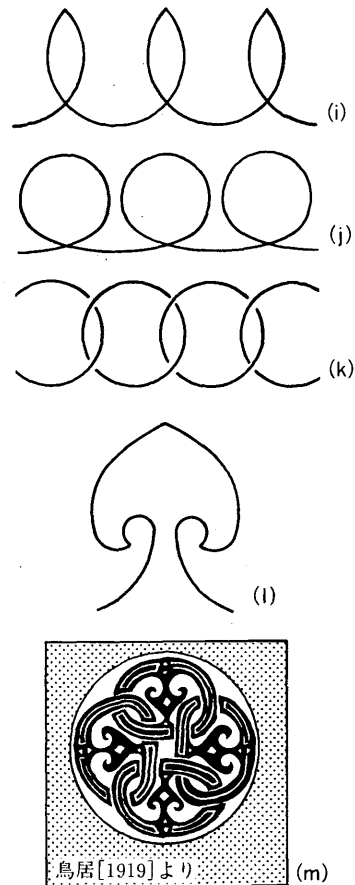


図8 クリール文様（2）

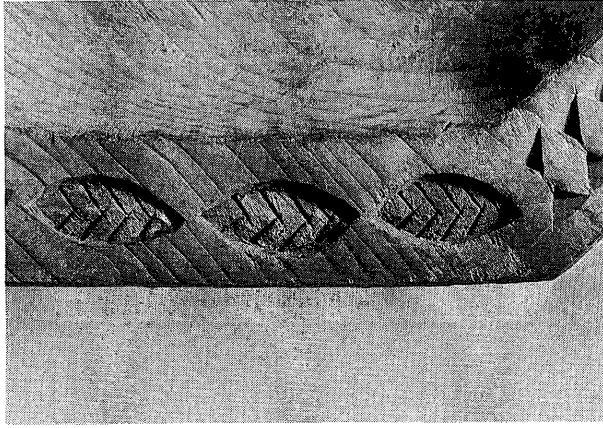


写真17 木盆（部分） K3268

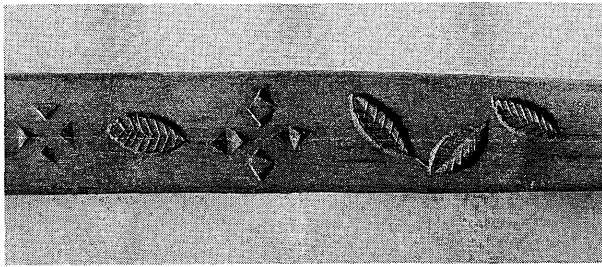


写真18 杓子（柄・部分） K2343

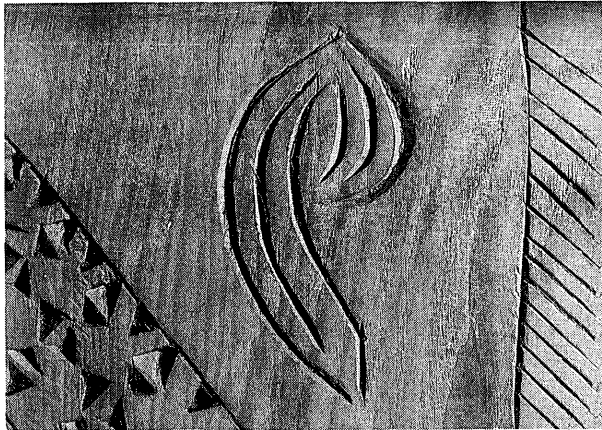


写真19 木盆（部分） K2367

子用のエペルニキの他に盆(写真17)や杓子(写真18)などがある。ただし、柳葉文と類似した文様が北海道アイヌにおいても使用されることがあるので注意を要する。

蕨手文は充填文様として盆の文様表現に用いられている例(写真19)があるが、前記の文様ほどには広く使われていない。この文様図形は後述の刺繍特有の双渦文(写真23)と関係すると考えられる。即ち双渦文の片側だけを独立させたものが、この蕨手文であろう。文様図形の輪郭が沈線で表現され、さらにその内部に1条の沈線が輪郭に沿って加えられる仕方は、並行する複数の条で文様図形を表現する刺繍の表現方法と共通するものである。

(8) クリール文様(3)——刺繍文様

刺繍の代表的な文様としては直列鎖状文、連弧文、双渦文、車輪文などがある。刺繍には色糸を使ってチェーンステッチで文様を表現する方法や、特定の文様図形に切り取った色布を縫い付けるアププリケなどが用いられる。チェーンステッチでは1条毎に色を変えた2から3条を1単位とする太いラインで文様図形を表現する。収集された民具類において刺繍が施されたものは、腰帯、小児負の額当、布製針入れの3種類で、木綿布製品に限られている²⁰⁾。

直列鎖状文(図9n 写真20)は2条の波線が半単位ずれて重なり合った文様で、列状の文様構成となる。带状に区画された空間の端から端までに一連の長い直列鎖状文が描かれる場合や、短い直列鎖状文が他の文様図形と組み合わせられて交互に配置される場合などがある。連弧文(図9o 写真21)も同様に、弧線形の反復

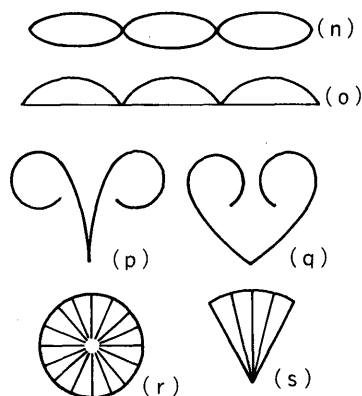


図9 クリール文様(3)

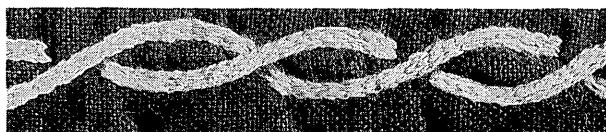


写真20 腰帯(部分) K2385

20) 市立函館博物館収蔵の物入れ(函1206)の皮帯は、クリールアイヌ特有の刺繍表現である、同色の2条のチェーンステッチの間に異なる色の1条のチェーンステッチを配した3条1単位の短直線で飾られている。

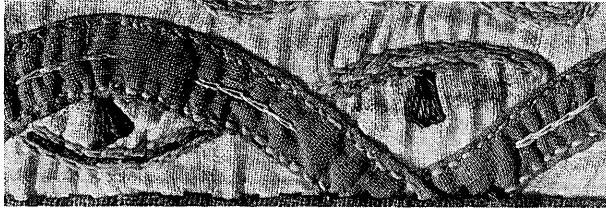


写真21 腰帯（部分） K2386

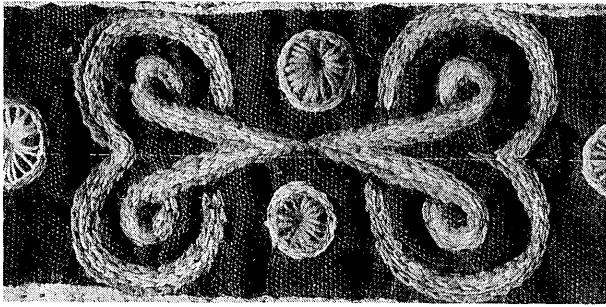


写真22 腰帯（部分） K2382



写真23 腰帯（部分） K2384

的な繰り返しによって列状の文様構成をとる文様である。帯状に区画された空間に連続弧文が対向して配列されると、中央には連続する菱形の空間が、また両側寄りには連続する半円形の空間が必然的に作り出され、そこには他の文様図形や弧線形が充填されて、複雑な文様に仕上げられる。双渦文（図9p, q）は対称形に配置された蕨手文を単位とするものである。帯状に区画された空間に双渦文を列状に連続的に配置する場合（写真23）や、2つの双渦文を対向させて1単位とし、それを配列する場合（写

真22) などがある。この他に、充填文様としての車輪文(図9r 写真22)や、表現方法の上で車輪文との関連が強い扇文(図9s 写真21)などがある。

彫刻による文様と刺繍による文様とは、例えば蕨手文と双渦文とのように一定の関連性があるものも認められるが、基本的にはそれぞれ独自の表現領域を確保しているといえよう。それは、それぞれの文様の表現者が男子であり女子であったこと、また素材と加工具が一方は準硬素材である木材や骨角とエペルニキであり、他方は軟素材の木綿布と縫針であったことなどが主因であると考えられる。

(9) クリールアイヌにおけるアイウシ(1)——杓子

以上が現在確認できるクリールアイヌの彫刻と刺繍に見られる文様の概要である。これらの中にはアイヌ文様の基調をなすモチーフとして指摘されるアイウシとよばれる括弧文やモレウとよばれる渦巻文を見い出だすことができない(図10)。ただし鳥居は、ここで連続宝珠文や連続ループ文、環状鎖状文、スベード形渦巻文とした一群の文様を、クリールアイヌによる呼称として「モリユ=同心円 Moriyou」であると紹介している[鳥居 1919: 469]。名称の問題もあるが、特に北海道アイヌにおいてモレウとされる文様と、ここで連続宝珠文以下の一群の文様(但しスベード形渦巻文を除く)とは、その構成が基本的に異なるものである。両者の違いは、型式学的に遡及できるそれぞれの変化過程を比較することによって明らかにしうる。さらに、クリールアイヌの直接の祖先については、北千島のオホーツク式土器時代の後に北海道から到来したアイヌであるとも考えられている[馬場 1939: 115]が、クリール文様の代表例といえる連続三角文や直列鎖状文については、その原型を北千島の内耳土器時代、あるいは北海道のオホーツク文化にまで型式学的に遡らせて理解することが可能である²¹⁾。

さて、渦巻という普遍的な文様図形に対して、アイウシとよばれる括弧文はより限定された形態であり、その空間的な広がり、その内部における一定の接触状況の有力な証拠になりうるものであ

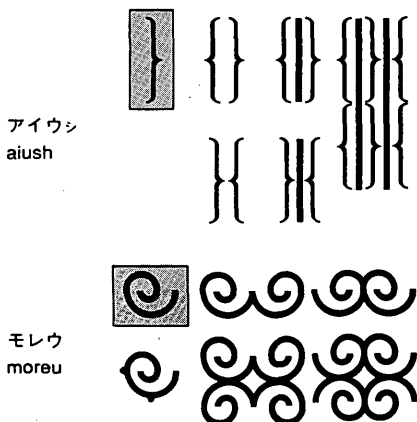


図10 「アイヌ文様の基本モチーフ概念図」(大塚 [1993b] より転載)

21) これらの型式学的な検討の詳細は他の機会に論ずる予定である。

る。そこで注目されるのが、器形の特定の部位の形態に同化した状態で見いだされるアイウッの存在である。それを最も顕著に確認できるのが、杓子の形態においてである²²⁾。例えば K1948 や K2342 の柄頭は装飾的な形態に仕上げられたものであるが、

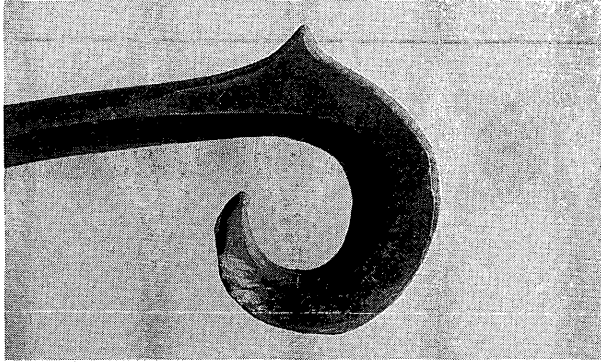


写真24 杓子（柄頭） K1948

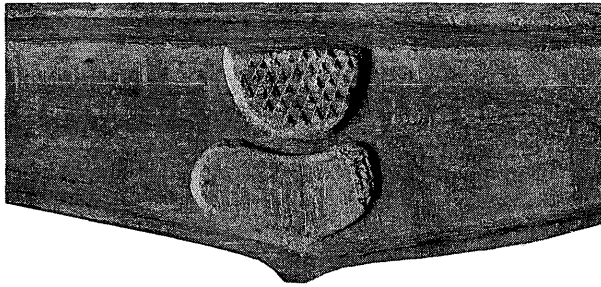


写真25 杓子（柄頭・部分） K2342

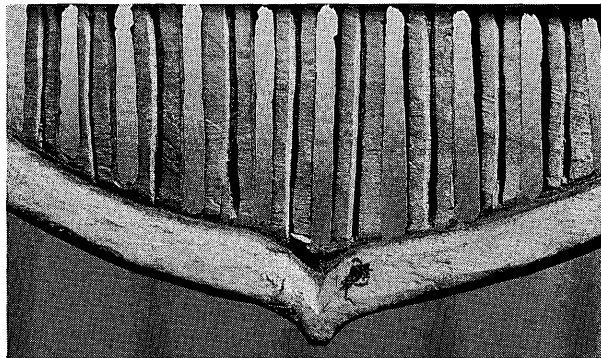


写真26 団子篋（柄頭・部分） 北160

22) 他に、男子用エベルニキ (K2354) の鞘尻の形態も、その平面形の輪郭がアイウッ状を呈している。これについては伊藤務が同様の指摘をしている [伊藤 1996: 9]。

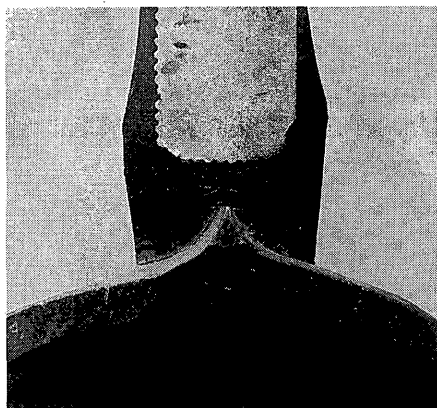


写真27 杓子（部分） K1948

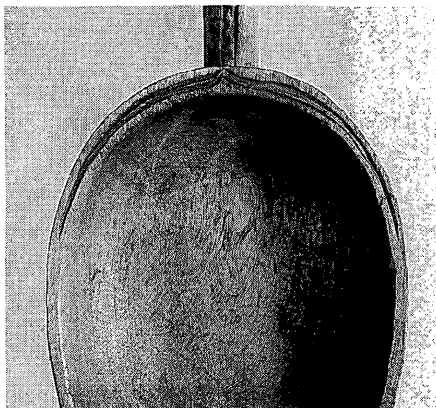


写真28 杓子（部分） K2473
[サハリンアイヌ]

その側面観はアイウッ状を呈するものになっている（写真24, 25）。同様の特徴は団子笥の柄頭の装飾的な突起の側面観にも見られる（北160 写真26）。またクリールアイヌの杓子の特徴の1つである、腕部の先端と柄に接する部分とが三角状に突出する形態においても、後者の突出部の上面観がアイウッ状を呈するものがある（写真27）。これが形態上の偶発の類似ではないことの傍証として、サハリンアイヌの杓子ないしは匙には、柄と接する側の腕部の縁が肥厚して面をなし、そこにアイウッが彫られている事例などを挙げるこ

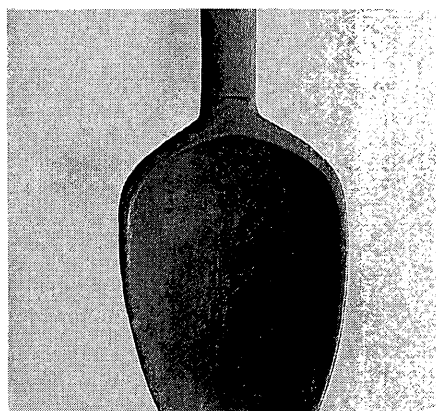


写真29 杓子（部分） K2478
[サハリンアイヌ]

ことができる（写真28, 29）。

(10) クリールアイヌにおけるアイウッ（2）——腕

また、鳥居収集民具類の中の注口付きの小形碗（K2362）には、両端と中央部とが深くなる左右対称形の刻みが、高台の左右両側に1つずつ施されている。碗を水平に置き横から眺めるとき、やはりこの刻みもアイウッ状を呈することがみてとれる（図版5-1）。この碗は注口の付く側とそれに対向する側の口縁とが緩く高まる2単位の波状口縁を呈するものであるが、この波頂部は台状の平坦面をなして、その片側

にはアイウッそのものが彫られている（写真30）。このことから高台の刻みがアイウッの形態を意図したものであることが確認できる。尚、サハリンアイヌに特徴的な把手付き木鉢は、平面形が長楕円で長軸両端が緩く高まる形態の特徴を有している。波頂部はいずれも肥厚して平坦な縁を作りだしているが、この平坦面にはアイウッ（写真31）や玉抱き三叉状の文様（写真32）が彫られる例が多い。器種は異なるが、K2362の碗の波頂部平坦面のアイウッの施文は、これと共通する表現である。

北海道アイヌの特徴的な文様の基調をなすアイウッが、このような潜在的なかたちでしか使用されていない状況は、先に点検してきたクリールアイヌ民具類全般に見られた北海道アイヌとの共通性の強さと比べるまでもなく、クリールアイヌの文様体系にとっては外来的な存在であることを示している。このことは逆に、アイウッに対する北海道アイヌの意識の内に一定の帰属性の発露を認めることができるのであれば、クリールアイヌとここでクリール文様として抽出した一群の文様、少なくともその内

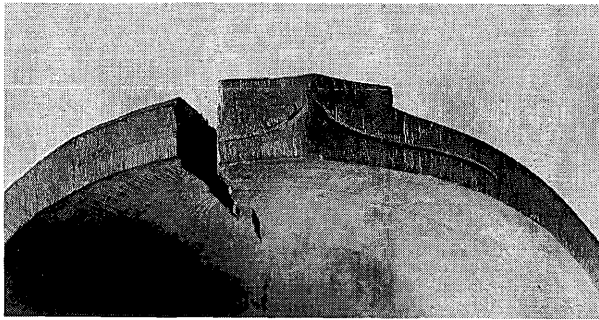


写真30 碗（部分） K2362

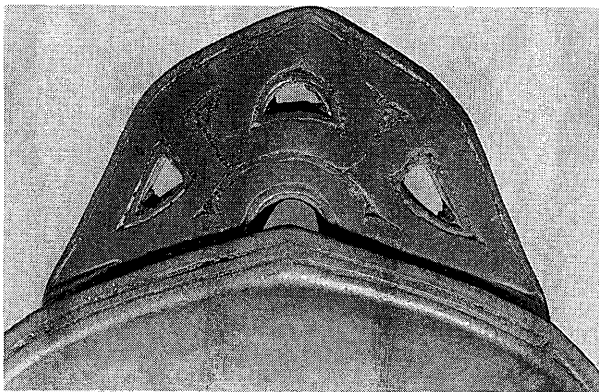


写真31 把手付き木鉢（部分） H23850 [サハリンアイヌ]

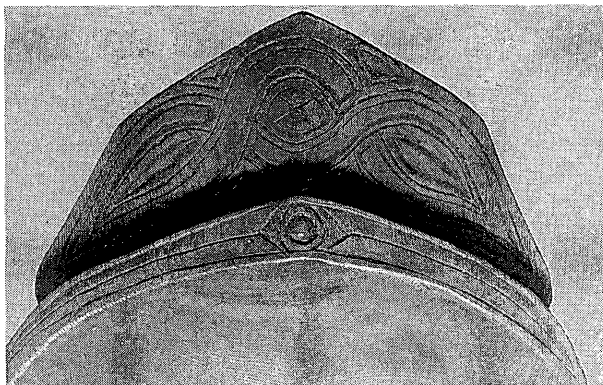


写真32 把手付き木鉢（部分） K2615 [サハリンアイヌ]

の主要なものとの間にも、同様な状況を想定することが妥当であろう。

(11) アイデンティティ再考

クリールアイヌの民具類の中には、北海道アイヌのものとは異なり、むしろカムチャダルやコリヤークなどの北方民族と共通する要素が多く見られた。その詳細は後に取り上げるが、そうはいうものの、全般的には生業面をはじめとして家事、服飾、儀礼・信仰の各方面で、北海道アイヌとの基本的な類似性の高さは否定し得ない。

現在、20世紀前半までのアイヌはその文化的な特徴によって北海道アイヌ、サハリンアイヌ、そしてクリールアイヌの3つの地域集団に区分されて理解されている。このような捉え方は、既に明治時代の初めに遡ってなされているものでもあった。しかし、先に確認したように、鳥居が調査した時点ないしはシコタン島移住以前において、クリールアイヌ自身は、自分たちと北海道アイヌとは異なる民族であると認識していたのである。

そのような認識に至るきっかけを、両者の頻繁な接触が断たれはじめた19世紀初頭に求めることができるだろうか。あるいは千島列島のアイヌが3つのグループに分れていたとされる18世紀後半にまで遡らせることができるだろうか。鳥居が調査を実施したのが1899年、シコタン島へ移住したのが1884年であるから、この間の年数は100年から150年程ということになる。はたしてこの程度の年数で、同じ仲間、同一民族であるという帰属意識の「記憶」が、例えば男子の入墨の記憶のように、消失してしまうのであろうか。

クリールアイヌは形質的にも、また言語的にもアイヌとして位置付けられ、さらに

民具類をはじめとする物質文化の面でも、アイヌ一般との共通性が強く認められる。反面、主要なクリール文様に対して、北海道アイヌの文様の基調をなすアイウシは潜在化した存在であったことも確認された。先に予測を示したようにクリール文様の主要な要素が少なくとも北千島の内耳土器時代にまで型式学的に遡及できるのであるならば——即ち、北海道アイヌの特徴的な文様とは異なった、長期にわたっての独自の型式変化が実現されたのであるならば——、仮にクリールアイヌの直接の祖先が北千島のオホツク式土器時代の後に北海道から到来したアイヌであるという説【馬場 1939: 115】が正しいとしても——即ち、北海道アイヌとクリールアイヌとの文化的な系譜の同一性が認められるとしても——、彼らが中部・北千島での海洋適応を果たす過程において、必ずしも当事者の認識の内では両者の間に同一の帰属意識が共有され続けていたとはいえない可能性も十分に考慮する余地があるであろう。

3. 民族接触と文化伝統

(1) 民族誌に見る民族接触

鳥居は民族誌の中で、カムチャダールやアリュートなどの北方民族とクリールアイヌとが多方面にわたって接触した状況を記述している。それはクリールアイヌの伝説の中に語られていたり、地名の由来に登場してきたりする場合もある。また、インフォーマントとしてのクリールアイヌから直接に語られたものであることもある。調査時点において鳥居は、クリールアイヌとこれら北方民族やロシア人、日本人との混血について指摘し、また習俗については「千島土人当時の土俗は、スラボニック的の所が中々多い。一見ロシアの田舎百姓の様です。又今日は色丹移住後、日本風も中々多く雑じって来た。されば現時彼等土人に付いて千島固有の土俗を見るは最も困難である」【鳥居 1903: 77】と論じて、当時の顕著な民族接触についての状況を語っているところもある。さらに北海道アイヌ、カムチャダール、アリュート、コリヤーク、チュクチ、そして日本人との関係については、特に項目を設けて記述をしている。次にその概要を整理する。

(2) 北海道アイヌ、カムチャダールについて

交易関係にあった北海道アイヌからは鉄鍋、綿製品、ガラス細工、刀剣、アットゥシ、銀製・鉛製耳飾り等の品々を入手し、クリールアイヌは鷲の羽、テンの毛皮等を交易品として送り出した。

カムチャダールとは、平常時には交易関係を維持し、また種々の利害の対立から両

者が戦闘態勢に入ることもあった。ロシア人がカムチャッカへ進入する以前には、クリールアイヌが北海道アイヌを介して入手した鉄製品が、さらにカムチャダールへと供給されていった。ロシア人進入後は、逆に、カムチャダールからクリールアイヌへと鉄製品等が供給されるようになり、債務を負ったクリールアイヌは妻や娘をひき渡さざるをえない状況にいたることもあった。この他にも、北千島にいる時にクリールアイヌが日常的な接触を最も頻繁にしていたのがカムチャダールであり、クリールアイヌの伝説の舞台がカムチャッカである場合さえもあった。尚、鳥居の記述するところではないが、カムチャダールとの関係は、北千島のオホーツク式土器時代にまで遡り、当時の北千島の人々の文化が、カムチャッカ系統の人々に由来するのか、あるいはサハリンから道東にかけてのオホーツク文化の人々に由来するのかという、クリールアイヌの文化伝統を考える際の重要な課題となっている。

(3) アリュート、コリヤーク、チュクチについて

遙かな海洋によって隔てられたアリューシャン列島のアリュートとの接触は、商業的なラッコ猟などを目的とした露米会社によるシムシル島・ウルップ島へのアリュートの移住によって生じることになる²³⁾。その期間は1830年代から1877年までの約50年間に及ぶ。その間にクリールアイヌの女性と結婚する例もあったようだ。さらに鳥居は、クリールアイヌの伝承のうちに、それ以前にもアリュートが北千島のラショワ島やシュムシュ島に来島し、クリールアイヌの妻子をもったということを見いだしている。ロシア人が介入する以前のアリュートの北千島来島問題は、北千島で考古資料として発見されたラブレットの解釈をめぐる、その当否についての議論がなされている [馬場 1943; 佐藤 1967; 山浦 1989]。

ロシア人のカムチャッカ進入以前には、クリールアイヌとコリヤークとはお互いの存在を知らなかったのにもかかわらず、両者の習俗や伝説が「ほとんど完全に類似している」 [鳥居 1919: 374] と指摘する鳥居は、このことを説明するために2つの仮説を提起する。1つは、地理的にクリールアイヌとコリヤークとの中間に位置するカムチャダールを仲介として、両者間に間接的な文化の交流が生じた、というもの。他の1つは、両者の間には以前に活発な通商関係が成立していたが、その後、厳しい自然環境への適応を経るうちに、このような関係は断たれ、あまつさえ以前の関係の記憶も忘却されてしまった、というもの。そして鳥居自身は後者の可能性を支持している。

23) シムシル島・ウルップ島へのアリュートの移住については馬場 [1943]、シュービン [1990] に詳しい。

チュクチについては、かつてロシア人が乗船させてきた海岸チュクチがいたことを、クリールアイヌの老人の話として記述しているだけである【鳥居 1919: 374】。

しかし、「還元的土俗」の復原を目指し、クリールアイヌにアイヌのより古層の習俗が保たれていると考える鳥居にとっては、以上の諸点に触れながらも民族接触という観点での観察と考察はそれ以上の深まりを見せることはなかった。

(4) 民具類に見る民族接触(1)——家事関連

クリールアイヌの民具類の中で、他の民族、特に北方民族との関係が鳥居によって指摘されたものには次のものがある。ただしその指摘の仕方は、指示する民族からそのものが直接に伝わったとする場合と、同類のものがその民族にも見られるとされるだけの場合とがある。

クリールアイヌの発火具は弓錐摩擦法によるものであるが、これと同じ方法を用いる北方民族としてはアリユート、エスキモー、チュクチ、コリヤーク、カムチャダール²⁴⁾が挙げられている【鳥居 1925: 115】。

伝統的な鳥管骨製針入れはコリヤーク、チュクチ、エスキモーと広範に見られるが、これに加えて新たに取り入れられた木綿布製針入れ(ケモ=オク)は、カムチャダールから入ってきたものとされている。当該品は針入れというよりも、針刺しの機能を備えるものであり、エスキモーなどの針刺しと共通する一面がある。また、直接的な関連は指摘しえないが、全体の形状と作りが北米北西海岸のトリングットやツィムシヤンの壁掛け用の小物入れ袋と類似する点が注意される。次に示すテンキ例と共に、アリユーション列島を介しての北米北方民族との関連について留意すべき品である。

クリールアイヌの代表的な民具類の1つであるテンキは、芯材と巻材とを用いてコイル状に巻き上げていく方法で製作された蓋付きの小籠であるが、同類のものがコリヤークやカムチャダールにもあることがヨヘルソン著『コリヤーク』を引用しながら指摘されている【鳥居 1919: 433】。コリヤーク例とは、赤と黒の色彩を用いて市松状に文様を表現する点まで共通する【鳥居 1926: 265】。当該品との類例はアリユートにもある【北海道開拓記念館 1990: 18】。コイル状に巻き上げていく方法はアメリカインディアン諸族の間にも広く見受けられるものであり【関島 1983】、そこから北太平洋地域へと広がる分布圏の西端にクリールアイヌ例を位置付けることが可能であろう。

24) 註7参照。

暦については、鳥居によって引用された近藤守重著『辺要分界圖考』中に、18世紀後半におけるクリールアイヌのロシア化の一環としてロシアの暦が使用されるようになったとする記述があるだけで[鳥居 1919: 383]、具体的な言及はなされていない。当該品(図版11-5)は、その全体形状がコリヤークの「神聖発火器」の木臼(図11)と類似する。この木臼は長方形の体部に円形の頭部を表現した人形(ひとがた)をしたもので、体部には弓錐摩擦法による孔が開けられている。この孔が体部全体に及び使用できなくなると、この人形(ひとがた)の木臼は一



図11 コリヤークの神聖発火器(鳥居 [1926]より転載)

定の儀式を経て、「一つの神力が加わり、人間に利益をあたえる」[鳥居 1926: 288]ようになる。当該品 K2347 の暦にもその体部に、日にちと曜日あるいは月を示す木釘を挿すための61個の小孔が開けられており、用途や目的は異なるがこの点でも外見上はコリヤーク例と類似する。暦と発火具というように機能が異なるからには、このような形状の類似は単なる偶然の可能性も高いが、反面、木面や人形の写実的な衣服の着け方などについてもクリールアイヌとコリヤークとの間には類似が指摘しうるので、〈人形(ひとがた)〉の造形に関する情報の共有という点ではやはり注意を要する。

クリールアイヌのランプについては3種類のものが記録されている。1つは日本からもちこまれた陶器のランプ、他の1つが北海道アイヌと共通する大形の海産二枚貝を用いたランプ、そして残る1つが舟形を呈する石製ランプであり、コリヤーク、チュクチ、エスキモーのものと同種であることが指摘されている[鳥居 1919: 442]。この石製舟形ランプは考古資料としても北千島の内耳土器時代から出現するものであり、シコタン島移住以前(ないしは直前)の北千島においても依然としてこの種類のランプが使用されていたかは疑問である。むしろ鳥居の還元的土俗と解釈した方が良いであろう。

(5) 民具類に見る民族接触(2)——服飾、儀礼・信仰関連

クリールアイヌの衣服には、カムチャダルから伝わったとされる鹿皮製の半ズボ

ンとアシカ皮製の下着, アリュートやカムチャダール, コリヤーク, チュクチ, エスキモーと共通する木綿布製のデムカムル, トド皮製の舟(バイダルカ)と共にアリュートとの関連を強く窺えるトド皮製の雨合羽(フスト)などの外来的要素が強いものもある。

トド皮製の長靴はカムチャダールも同様のものを作っていたことがクリールアイヌの古老の話しとして記録されている【鳥居 1919: 425】が, アリュートもトドの頸部の皮で作った長靴を使用していたことが別に記されている【鳥居 1919: 371】。トド皮製長靴も北方民族に通じる要素と考えられる。

橇はそれをひく犬とともにカムチャダールから伝えられたものであり, カンジキはコリヤークやチュクチのものと類似する形態である。

仮面は北太平洋地域の各地において広く見受けられるものである。クリールアイヌの近隣の民族としては海岸コリヤークやアリュート, エスキモーなどが挙げられる。鳥居は特にコリヤークの仮面との類似を指摘する。それはクリールアイヌの仮面が彼らの伝説に登場する怪物あるいは幽霊であるフジルを表わしたものであり, 同様に海岸コリヤークの仮面もこのフジルと似た性格をもった伝説上のカラウと結び付く性格のものであるからである【鳥居 1919: 478】。尚, クリールアイヌに隣接するカムチャダールは仮面をもたないとされているが, それにもかかわらず伝説のフジルが登場する舞台はカムチャッカ半島にまで及ぶ。

(6) 木綿・鉄の導入と民具類の新局面

民族接触によって, 民具類をはじめとする物質文化の中に引き起こされる変化は, 新たな道具そのものの導入であったり, また新たな技術や情報の導入による在来の道具の改変であったりする。同類の器種においては, 製作技術及び使用技術の面でより効率的なものの方が選択され, 従来からのものと置き換えられることもある。

以上に見てきた北方民族との直接的, 間接的な関連を示す民具類は, クリールアイヌの実際の日常の生活の中に深く根をおろし, 原料の面で自給することができないものもあるが, 大半はクリールアイヌ自身によって製作ないしは加工されたものである。北方民族との交渉によって採用あるいは改良されたこれらの新しい道具や技術は, クリールアイヌの生活の便を向上させたであろうが, それらはあくまでも個別的な文化要素のレベルのことである。これに対して, 北海道アイヌやカムチャダールを介して, 日本やロシアから持ち込まれた鉄と木綿は, 希少なながらも次第に従来からの主要な素材であった骨角と皮革に取って代わると共に, それを素材とする道具の形態や製作技

術をも連動して変化させていったといえるだろう。その過程を腰帯と針入れ、及び縫針を例にして以下に論じる。

(7) 腰紐と腰帯

腰帯には、クックルケシが付いた腰紐と呼ぶべき皮紐のものと、バックルが付いた木綿布製の腰帯とが共に使用されていたことが記録されている【鳥居 1919: 425】。両者は用途が異なり、前者は伝統的な衣服である鳥皮衣に用いられ、後者はカムチャダールから伝わった半ズボン（オユ）に用いられるものであり、その名もオユ＝クトというものであった。

オユ＝クトは布地に刺繍を施した華やかなものであり、金属製のバックルが付く例もある。以前には海獣皮製であったとされるが、そのときにはバックルは骨角製であったのだろう。ただし、文様と形態は木綿布製になっても変わらないと記述されている。オユ＝クトに刺繍された文様の大半は鎖状文や連弧文、双渦文であり、これらを基調とした文様はクリールアイヌにおいて独自に発達した文様として位置付けることができるものである。そうであるならば、現時点（当時）においてオユ＝クトはカムチャッカから導入された半ズボンに専用的に用いられてはいるものの、本来はクリールアイヌ独自のものであったということになるが、はたして海獣皮製であったときにも同様の文様が刺繍されていたのだろうか。K2386（図版 9-2）には、刺繍を施した幅 6.7 cm の布地の本体の一端に幅 2.5 cm ほどの皮紐が縫い付けられている。この皮紐が反対端のバックルに結び付けられるのであるが、以前に海獣皮を素材としていたときには、腰帯全体の幅は現品の片端に付けられた皮紐程度のものではなかったかと推察される。では、腰帯の本体が布地へと代えられたときに、何故に幅広になったのか。それは布地の採用とその装飾方法としての刺繍の採用ないしは発達とが相乗作用を働かせた結果であると考えられる。この一連の変化過程の背後には、色糸としての木綿糸の導入と鉄製縫針の普及があったことが推測される。

(8) 針と針入れ

針入れには、針を刺し留めた皮紐を鳥管骨に通す伝統的なものと、カムチャダールから入ってきた木綿布製のケモ＝オクとがある。鳥居は両者が共に使用されていたことを記録しているが、新来の後者が一般化するなかで、依然として前者が使い続けられている状況を先に想定しておいた。その系譜がオホーツク文化にまで遡れる鳥管骨製針入れは、鉄が普及する以前には骨製縫針と共に用いられるものであった。ケモ＝

オクが導入された段階では、既に鉄製縫針が使用されていたと考えていいだろう。

両者は形態のうえでも全く異なるが、同時に素材と装飾の面でも決定的な違いがある。鳥管骨の針入れの主要素材は骨と皮革である。皮紐の先端には装飾を兼ねてエトビリカの嘴が用いられているが、針入れの主体部である鳥管骨の外表面は彫刻によって飾られる。一方、ケモ＝オクは木綿布と木綿糸を主要素材とする。縫い付けられた3段のポケットは広い布面を提供し、そこに色糸を用いた華やかな文様が刺繍によって表現される。

布製針入れが鳥管骨製針入れにとって代わったわけではないが、また布製針入れの登場と骨製縫針から鉄製縫針への転換とが同時に進行したわけでもないが、変化の趨勢として両者の相違を整理するならば、素材の面では皮革から布（木綿）へ・骨から鉄への方向性、装飾の面では彫刻から刺繍への方向性、ということになる。この変化の趨勢は、先に見た腰紐と腰帯との関係にも当て嵌まるものである。

(9) 刺繍による女子の表現領域

ここで注目すべき点は、彫刻が男子の仕事に属すために、必然的に男子が介在せざるをえなかった装飾の工程を、素材として木綿布と木綿糸が導入されることによって、女子が主体となり実施しうる条件が整えられたことを意味する。鉄製の刃を備えたエベルニキの普及が男子の彫刻による表現能力を一段と高めたように、木綿布・木綿糸と鉄製縫針の普及は女子の刺繍による表現領域を格段と広げたといえよう。

先に彫刻の文様と刺繍の文様とは、それを表現する性別の違いもあり、原則的には相互に排他的であると記した。しかし、ここに見てきたように、彫刻による表現領域が刺繍による表現領域へと変化していくような場合には、両者の性的な区分基準に混乱が生じ、即ち従来の規制が緩和され、表現方法と文様との新たな組み合わせが成立する余地が生じる。その実例として、木綿布製の腰帯において発達する刺繍による鎖状文や連弧文、双渦文の生成過程を理解することが可能である。

海獣皮製の腰帯においては、帯幅がそれ程広くなかったと予測されるので、そこへの装飾も、クックルケンが付く皮紐と同じように未発達であった可能性が高い。腰帯の素材が海獣皮から木綿布へと代わるのに伴って、刺繍による装飾が顕著になり、これが帯幅の拡幅化を促したと先に想定したが、この際に刺繍による文様表現の原型となったものとして、同類の道具としては最も装飾性が高い腰紐のクックルケンの文様が第一候補として考えられる。即ちクックルケンの連続宝珠文と腰帯の鎖状文との間には一定の型式学的な関連性を指摘することが可能である。また、クックルケンの環

状鎖状文にはスベード形渦巻文が組み込まれる例（図8m）があるが、これと腰帯の双渦文（写真23）との型式学的な関連性も指摘しうる。

以上に例示したように、クリールアイヌに取り込まれた木綿布・木綿糸と鉄製縫針は、以後に連鎖的な一定の変化を惹起するという点で、そのものだけ、あるいは関連するいくつかの文化要素の取り込みだけで終わることの多い他の場合とは、異なった様相を呈している。そして、木綿と鉄との導入を起点とする一連の変化がクリールアイヌの民具類に新しい局面をもたらしたといえる。即ち、一面ではクリールアイヌの民具類における特色をさらに引き立たせ、反面では、還元的土俗を復原せざるをえない状況へとより一層押し進めたのである。

（10） サハリンとの関連について（1）——火道具入れについて

先に、民具類に見る民族接触として、鳥居が収集した民具類を中心にして、周辺諸民族との関連の有無、程度についての言及を整理してみた。例えば暦などの明らかに新来の民具、習俗については、収集はされていても、それについての言及がないことは、還元的土俗という鳥居の観点を考慮すれば、容易に納得できることである。では、火道具入れはどうだろうか。3点の火道具入れが収集されているが、どれも皮革製品であり、変化の趨勢としては古層の様相であるといえよう。また、形態的にもユニークであり、同じ用途とされる北海道アイヌのものともまったく異なっている。しかし、これについての言及はどこにもなされていない。

同類の火道具入れの分布はサハリンからアムール河流域にかけて広がっていることを確認することができる²⁵⁾。鳥居は1921年の北サハリンの調査の際に、ツイミ河中流のアドツイミで皮帯に小刀と火打ち袋、火口入れ、根付を取り付けたものを収集しているが（写真33）、この火口入れこそがシコタン島で収集した火道具入れと同類のものである。これを使用していたのがニブフカウイルタかの記録はない。1925年刊行の「人類学上より見たる我が上代の文化（1）」に「黒龍江畔マングン火打ち金（マーク氏による）」[鳥居 1925: 123]として引用したものは、アドツイミ例に極めて近似したものであり、そのうちの7番がまさに火道具入れないしは火口入れに他ならない²⁶⁾

（図12）。鳥居は「…黒龍江・ウスリー・シベリアなどに居るツングースも、皮帯の前に火打ち袋と火打ち金とを下げて居る」と解説を加えている [鳥居 1925: 116]。仏

25) 馬場脩は同種の火道具入れはアイヌ本来のものではなく、アムール川河口流域の民族から模倣したものである可能性を述べている [BABA 1949: 230]。

26) ただし、R. K. マークは図12の4番を「ホクチ入れ」とし、7番を「その他の物を入れる雑囊」と記している [マーク 1859: 214]。

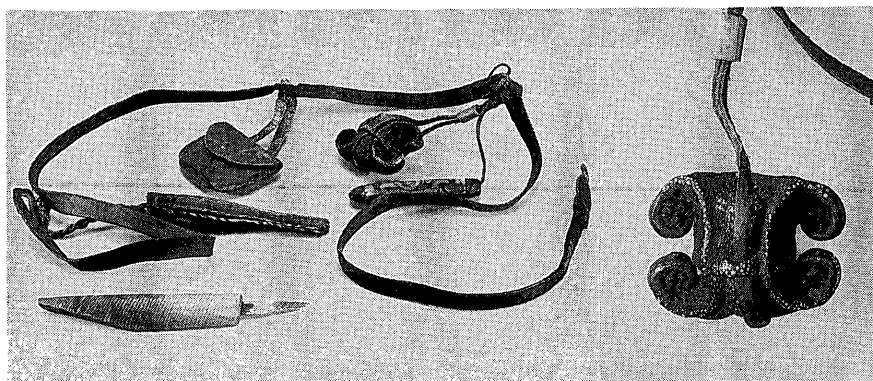


写真33 左：小刀・火打ち袋等付き皮带 K2417, 右：火口入れ（同左部分） K2417
[サハリン・アドツイミ]

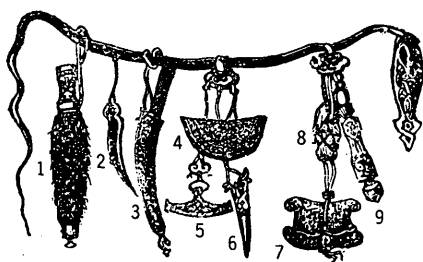


図12 黒龍江畔マングン火打ち金（鳥居
[1925] より転載）

語版『千島アイヌ』の刊行が1919年であるから、鳥居はその時点ではこの火道具入れを知らなかった可能性も考えられるが、それについての言及がなされていないということは、むしろその類例を知っていたうえで（例えば「黒龍江畔マングン火打ち金」の出典〔Maak, P. K. 1859 Путешествие на Амуре〕などを通して）、それがクリールアイヌ独自の

ものではないという判断のもとに、その解説が割愛されたと考えるほうが自然である。仮に、他の地域や民族の類例を知らなかったとするならば、なおさらのことクリールアイヌ独自のものとして言及されたはずである。

(11) サハリンとの関連について (2) ——シャマニズム

この問題を解く緒として、クリールアイヌとシャマニズムとの関連について鳥居が終始否定的な見解をとっていた理由を考えることが必要である。それはサハリンがシャマニズムとの関連が深い地域だからである。

鳥居が収集した民具類についての解説の中で、シャマニズムについて言及するのは、イナウと鉢巻（チバニップ）についての説明に付随してである。ポロンスキーがその著書の中で、クリールアイヌはロシア正教会信者ではあるが、「シャマン教」を崇拝していたと記述している点に対して、ポロンスキーがクリールアイヌのことを記した

当時はそうであったかもしれないが、「現在はまったくそうではない」と述べ、さらに昔から多神教であったクリールアイヌが「ある一時期にシャマンという名の神を崇拝したとしても、その神はシベリア、モンゴル、満州の原住民たちのシャマンとは何らの関係はなかったのである」【鳥居 1919: 449】と全面的な否定を行っている。ただし、アイヌには神を祈るツス＝クル（あるいはトスグル）と呼ばれる人がいるが、サハリンアイヌにおいてはこのツス＝クルがシャマンとして振る舞う。これについては、ギリヤーク（ニブフ）やツングース（当該文脈ではウイльтаに相当）から影響を受けたものと解釈されている【鳥居 1919: 451, 1923: 509】。

また、これに関連してクリールアイヌの仮面と木偶とについても、シャマニズムとの関係が否定されている。木偶については、現在（当時）は玩具にすぎないことが強調され、また仮面についても「シベリア等に行わるるようなシャーマン巫人の用いるものではない」と記し、共に「我が国石器時代」の土偶や仮面と関連することが指摘される【鳥居 1933: 449】。

このように論じられることの背景には、シャマニズムがツングース諸族において発達していることや、鳥居の持論である日本列島の先住者であるアイヌは後続のツングースによって北海道以北へと追いやられたこと、アイヌはその起源地である中近東を離れる際には既にアニミズムであったこと、サハリンアイヌは第2次移住民（北海道アイヌ）と彼らに併呑された第1次移住民のアイヌとからなっていること、等の考え方が作用していることが推察される。すなわち、アイヌは民族的にも、あるいは文化的にもツングースとは関係するところがなく、居住する領域が接するサハリンではサハリンアイヌとツングースとの多少の接触や影響関係は見られるものの、基本的にはアイヌとツングースとの間に有意な関係はない、という考え方が鳥居にあったと考えざるをえない。

北千島とサハリンとでは地理的に離れていることもあるが、以上のような事情が、クリールアイヌとサハリンに居住するウイльтаやニブフとの関係についてのいかなる言及も許さなかったし、さらにはクリールアイヌとサハリンアイヌとの関係についても具体的な論究がなされなかった理由であろう。

(12) サハリンとの関連について（3）—— 碗

さて、クリールアイヌの民具類の中には、先に例にひいた火道具入れの他にもサハリンと関連する数例のものを確認できる。それは、既にクリール文様に関する考察のところで取り上げた碗や杓子、煙草入れなどである。それらと同一のものがサハリン

にあるわけではないが、先にも指摘したように、サハリンの同器種のものとの関連を考えると成立しえない要素をもつものといえよう²⁷⁾。

また、先にクリールアイヌの注口付き碗の口縁部の縁に彫られたアイウッと共通する表現をとるものとして、器種は異なるがサハリンアイヌに特徴的な把手付き木鉢を例示した。ここにもクリールアイヌとサハリンアイヌとの関係の一端を予測することができるが、それ以上に、この注口付き碗そのものがサハリンアイヌに特徴的な丸碗と直接的な関連があることが指摘できよう。緩い2単位の波状口縁と、底部に付けられた彫り込み文様をもった高台とは、丸碗全てに共通する形態的な特徴である（写真34）。また口縁部の縁に文様が彫られる例もある。これに対してクリールアイヌの注口付き碗（図版5-1）には、口縁部に注口が付くなどのサハリンアイヌの丸碗には見られない要素もあるが、その口縁部形態が緩い2単位の波状口縁を呈する点や、底部形態としては彫り込み文様をいれた高台が丸底に付く点など、サハリンアイヌの丸碗と極めて強い関連性をもつものである。サハリンアイヌの丸碗に関する情報——恐らく十全でない情報、あるいは厳格な規範から逸脱した情報——の介在なくしては、クリールアイヌのこの碗は製作しえなかったといえるであろう。では、このような不完全な情報を持ち、あるいは厳格な規制を被らずに、この注口付き碗を製作したのは誰か。それをサハリンアイヌに求めることはできないであろう。やはり、何らかの経路を伝い、サハリンアイヌの丸碗や把手付き木鉢の情報を知り得た、あるいは見聞したクリールアイヌによって製作されたと考えるのが妥当である。

(13) クリールアイヌとサハリン

以上のように、クリールアイヌの民具類からは、鳥居の民族誌には欠落していたサ

27) クリールアイヌとサハリンアイヌとの関係については、言語学からの言及がなされている[MURAYAMA 1968; 中川 1996]。例えば中川裕は「星」のアイヌ語方言——樺太・宗谷・千島に分布する *keta* (星) という語形——について、サハリンの内路とライチンカとで記録されている *noociw* (星) という語形に注目し、「…*noociw* の方がむしろ残存形であり、樺太で *noociw*→*keta* という変化が起こったという解釈が成り立つ。ただしその場合には、樺太と千島が海路でつながっており、*keta* の方が新しい語形として海を渡って広まったと考えるしかない」[中川 1996: 11] と述べている。これに続けて「この解釈は他の図（アイヌ語における語形の分布図）の解釈にも影響を及ぼす非常に大きな問題を含んでいる…」[中川 1996: 11]（括弧内は小杉補註）と述べていることから、そのことの重大性が察せられる。ただし、さらに「…現在のところはこれ以上論じる段階にない」[中川 1996: 11] と続けており、その積極的な評価には至っていない。ちなみに「母」のアイヌ語方言のうち、サハリンと千島とが *nanna* 類の語形となっている [中川 1996: 13]。その場合、親族名称であるだけに通婚圏の問題に発展する可能性もでてくる。本研究で提示した物質文化レベルでのクリールアイヌとサハリン、ないしはサハリンアイヌとの関連性とも合わせて、今後の具体的な課題となろう。

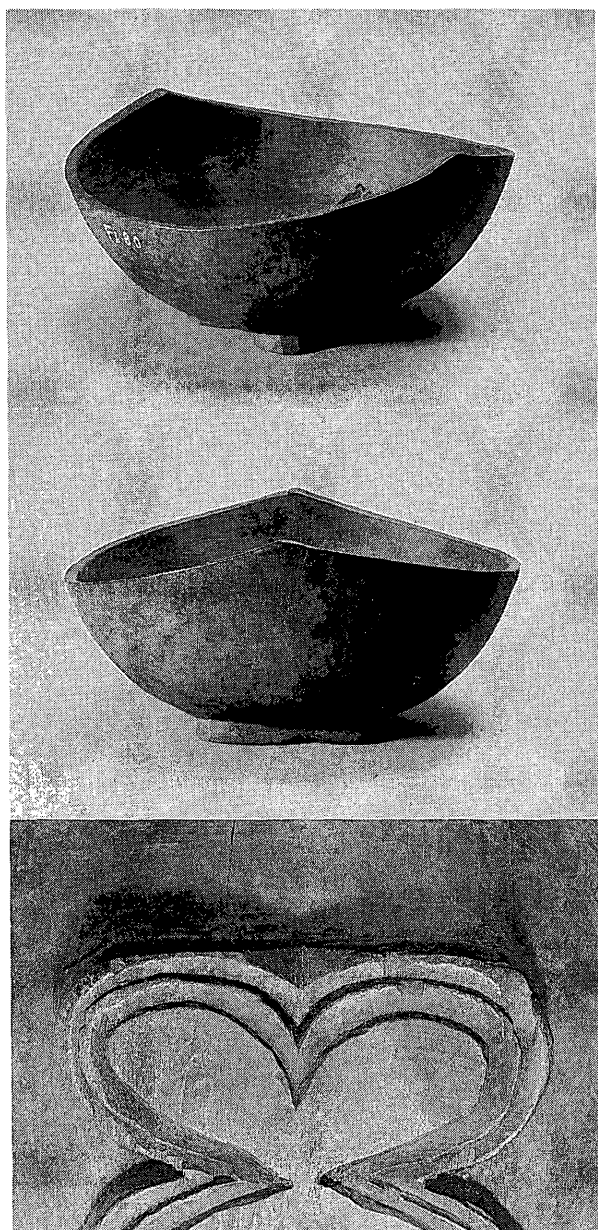


写真34 丸碗 K2638 [サハリンアイヌ]

ハリンないしはサハリンアイヌとクリールアイヌとの関係の存在を抽出することができた。そこで改めて、鳥居の民族誌を点検するならば、その中にサハリンとクリールアイヌとの関連を推測しうる記録があることに気付く【鳥居 1919: 467】。それは、サ

ハリンのポロナイ川河口付近のナヨロでは、他の地域とは異なり、海岸沿いに樹木の枝葉でつくったサイ＝チセという夏用の住居と、山中にトイ＝チセという冬用の堅穴住居とが作られ、季節的に住み分けられていることが記録されているところである。鳥居はこの点がクリールアイヌと類似することを指摘しながらも、それを自説の北海道一千島2段階移住説で解釈する結果に終わっている【鳥居 1919: 438-439】。

クリール文様には、北海道のオホーツク文化へとその原型が型式学的に遡及しうるものがあることは先に触れた。オホーツク文化はサハリンから道東沿岸、そして南千島にかけて分布圏を広げる。北千島のオホーツク式土器時代は、文化系統のうえでは、その名の示す通りにオホーツク文化を担う人びとが主体となり活躍したのか、あるいは実際にはカムチャッカ系統の人びとが居住し、オホーツク文化の要素は部分的に取り入れられただけに過ぎないのか、オホーツク文化の民族的帰属の問題とともに、議論が分れるところである。

このような考古学サイドの研究状況も考慮にいれ、クリールアイヌとサハリンアイヌとの関係については、考古資料だけではなく、両者の民具類の型式学的な分析を踏まえた上での、民族文化の系統的な復原が今後いっそう必要となつてこよう。

お わ り に

以上、国内にあるクリールアイヌの民具類を集成し、用途に即した基本的な分類項目ごとに個別の民具を観察し、その内容を記録した。また、代表的な各種民具については、将来的に型式学的分析を実施する際の基礎資料とするためにも、実測図を作成した。これらの集成・資料化された民具類に関する情報の全体をもって、クリールアイヌ文化の全体的な輪郭を俯瞰することができるであろう。

そしてこのような観察と分析の過程を通して、民具類から直接に得られた情報を体系的に整理することによって、既存の民族誌には記録が欠落していたり稀薄だった点、また特定の問題意識のために実際とは異なった評価がくだされていた点などについて、新たな見解を提示することができた。その1つはクリールアイヌの長期出漁（猟）型海洋適応の再確認である。鳥居の問題意識に強く引き寄せられた従来の解釈は、クリールアイヌは「海洋民族」ではないというものであった。この点については、民族誌の記述内容を丁寧に読解すれば自ずから修正されることではあるが、クリールアイヌの民具類の素材の供給源を調べることによって、その海洋適応の度合いの高さが追検証できた。

2つ目はクリールアイヌのアイデンティティについてである。シコタン島移住以前には、クリールアイヌは自らと、北海道アイヌやサハリンアイヌとは別の民族であると自認していたことが記録されているが、両者の物質文化には本質的な相違は見られない。しかし、クリールアイヌが各種の民具類に表現する特徴的な文様は、北海道アイヌの文様と単に異なるだけではなく、むしろ排他的ともいえる関係にあることが確認できた。これは文化的・民族的には同一の集団として括られながらも、日常的な生活感覚においてはより小さな規模の集団単位が実質的に機能していたことを表わしている。

また、民具類中に認められた周辺の他民族に由来する要素の豊富さは、民族誌に記録された民族接触の状況を補足するものであった。そのうちでも、日本やロシアから入手されるようになった鉄製品と木綿製品とは、クリールアイヌの生活用具の伝統的な素材と造形的な表現領域とに大きな影響を与え、それらと関係する一連の要素を変革することになるが、その実際的な変化過程も民具類の中に認めることができた。そして、民具類の分析によって今回提示することができた最大の要点は、クリールアイヌとサハリンとの関連性についてである。この点は民族誌の中にはほとんど表われることのなかった情報である。当時における具体的な両者の接触状況と、歴史的に遡りうる両者の関係とが共に想定され、これはクリールアイヌの文化伝統の問題として今後の重要な検討課題となってゆくだらう。

そしてその際には、本稿では実施することができなかったが、第Ⅰ章中に論じたような個別の民具に対する型式学的分析が効力を発揮するだろう。

謝 辞

本稿の執筆に先立って大塚和義氏（国立民族学博物館教授）からは本研究に着手する契機と種々にわたるご指導を頂き、また秋道智彌氏（国立民族学博物館教授）には本草稿を通覧して頂いた。深く感謝申しあげたい。また、資料調査に際しては、宇野文男、宇治谷恵、手塚貴子、菊池俊彦、沖野慎二、青柳信克、長谷部一弘、野村祐一、霜村紀子、山田健、出利葉浩司の諸氏（敬称略・順序不同）、並びに国立民族学博物館、市立函館博物館、函館市北方民族資料館、北海道大学農学部博物館、北海道開拓記念館、旭川市博物館の諸機関に、各種のご配慮、有益なご教示を頂いた。厚く御礼申しあげたい。

尚、本稿は平成8年度から始まった国立民族学博物館共同研究「北方先住民社会における交易」（代表者：大塚和義教授）において「クリールアイヌの〈もの〉からみた交易」と題して発表したものに基づいて書き改めたものである。発表にあたっては、共同研究員各位との討論を通して有益なご教示、問題点のご指摘を頂き、そのいくつかの点については本稿にてさらに

考察を深めることができたと考えている。合せて御礼申しあげたい。

文 献

- アイヌ文化保存対策協議会（編）
 1969 『アイヌ民族誌』第一法規出版株式会社。
 アチック・ミュージアム
 1936 『民具蒐集調査要目』アチック・ミュージアム。
 馬場 脩
 1939(1979) 「考古学上より見たる北千島」『樺太・千島考古・民族誌』3 北海道出版企画センター, pp. 9-162。
 1943(1979) 「千島に於けるアリウト族」『樺太・千島考古・民族誌』1 北海道出版企画センター, pp. 148-181。
 BABA, Osamu
 1949(1979) Smoking among the Ainu. 『樺太・千島考古・民族誌』1 北海道出版企画センター, pp. 225-234。
 辺泥和郎・福田友之ほか
 1974 「北千島バラムシル島発見の土器について」『北海道考古学』10: 89-97。
 長谷部一弘
 1992 「馬場コレクション」『市立函館博物館紀要』2: 1-24。
 長谷部言人（監修）（東京人類学会編纂）
 1939 『内外土俗品圖集』7 内外土俗品圖集刊行会。
 長谷部辰連・時任爲基
 1876(1969) 「明治九年千島三郡取調書」『日本庶民生活史料集成 第4巻』三一書房, pp. 273-295。
 林 欽吾
 1940(1984) 「南千島色丹島誌・色丹島のアイヌ族」『千島・樺太の文化誌』北海道出版企画センター, pp. 172-207。
 ヒッチコック, R.
 1892(1985) 「エゾ地の古代堅穴居住者」北構保男編訳『アイヌ人とその文化』六興出版, pp. 11-39。
 北海道開拓記念館
 1990 『北海道開拓記念館所蔵 北方民族資料展』北海道開拓記念館。
 北海道ウタリ協会アイヌ史編集委員会（編）
 1988 『アイヌ史 資料編2 民具等資料所蔵目録（1）』北海道ウタリ協会。
 市立函館博物館
 1979 『市立函館博物館蔵品目録1・民族資料編7』市立函館博物館。
 犬飼哲夫
 1963 「千島アイヌの鳥皮衣」『北方文化研究報告』18: 71-78。
 伊藤 務
 1996 「エトロフの名工、シタエホリ幻のマキリについて」『標茶町郷土館報告』9: 1-20。
 加藤秀俊
 1978 「民具の現在」『民衆の生活と文化』未来社, pp. 221-230。
 河岡武春
 1972a 「民具の地域研究（連載1）」『民具マンスリー』5(1): 8-10。
 1972b 「民具研究の方法」『月刊文化財』106: 19-25。
 萱野 茂（アイヌの民具刊行運動委員会編）
 1978 『アイヌの民具』すずさわ書店。
 菊池勇夫
 1994 『アイヌ民族と日本人』朝日新聞社。
 1995 「文化年間のラシヨア人渡来——千島アイヌと蝦夷地内国化——」『前近代の日本と

- 東アジア』吉川弘文館, pp. 153-168。
- 菊池俊彦
1972 「北千島の『オホーツク文化』に関する問題点」『北海道考古学』8: 73-85。
- 北構保男
1985 「訳注」R. ヒッチコック著『アイヌ人とその文化』六興出版, pp. 37-39, 224-225。
KOGANEI, Yoshikiyo
1894 Beiträge zur Physischen Anthropologie der Aino II. Untersuchungen am Lebenden. *Mittheilungen aus der Medicinischen Facultät der Kaiserlich-Japanischen Universität* 2(2): 251-403。
- 小杉 康
1996 「アイヌの杓子」『物質文化』61: 18-45。
- マック, J.
1994 「翻訳の行為」『民博通信』66: 2-21。
- マーク, R. K.
1859(1972) 「アムール河流域民族誌 (三)」北方産業研究所編訳『ユーラシア』7: 167-223。
- 宮本常一
1979 『民具学の提唱』未来社。
- 村田庄次郎
1910 『札幌博物館案内』札幌動物学雑誌会。
MURAYAMA, Shichirou
1968(1971) Ainu in Kamchatka. 『北千島アイヌ語』吉川弘文館, pp. 343-352。
- 村山七郎
1971 『北千島アイヌ語』吉川弘文館。
- 中川 裕
1996 「言語地理学によるアイヌ語の史的研究」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』2: 1-17。
- 中村善太郎
1904 『千島樺太侵略史』文友館。
- 難波琢雄
1987 「千島アイヌの鳥皮衣 (チールル) について」『民具マンスリー』20(1) : 11-16。
- 名取武光
1959 「樺太千島のイナウとイトッパ」『北方文化研究報告』14: 79-114。
- 大熊良一
1969 『千島小笠原島史考』しなの出版。
- 小野重朗
1972 「標準民具のこと」『民具マンスリー』5(9): 7-9。
- 大塚和義
1993a 「アイヌの煙草入れ」『月刊みんぱく』17(6): 表紙裏。
1993b 『アイヌモシリ 民族文様から見たアイヌの世界』国立民族学博物館。
1993c 「鳥居龍蔵の千島 (クリール) アイヌ調査」『民族学の先覚者——鳥居龍蔵の見たアジア——』国立民族学博物館, pp. 26-30。
1995 『アイヌ 海辺と水辺の民』新宿書房。
- 齋藤玲子
1995 「北太平洋沿岸地域における植物性繊維製品についての考察——編物を中心とする物質文化研究——」『北海道立北方民族博物館研究紀要』4: 113-134。
- 佐々木高明・宇野文男
1993 「国立民族学博物館所蔵の鳥居龍蔵収集標本資料について」『民族学の先覚者——鳥居龍蔵の見たアジア——』国立民族学博物館, pp. 71-72。
- 佐々木利和
1993 「作品解説」『アイヌの工芸』東京国立博物館, pp. 93-110。
- 佐藤達夫
1967 「流鬼考」*MUSEUM* 197: 2-10。

関島寿子

1983 「アメリカ・インディアンのかご」『民具マンスリー』16(8) : 5-14。

シュービン, V. O.

1990 「千島列島における18~19世紀のロシア人集落」 畚松根訳, 菊池俊彦校『北海道考古学』26: 91-112。

スノー, H. J.

1897(1901) 「千島列島篇」『北千島調査報文』北海道庁, pp. 1-106。

1910(1980) 『千島列島黎明記』馬場脩・大久保義昭訳 講談社。

祖父江孝男・大給近達・中村俊亀智・大塚和義

1978 「物質文化研究の方法をめぐって」『国立民族学博物館研究報告』3(2) : 280-336。

高倉新一郎

1955 「千島樺太の開発と土人」『北方文化研究報告』10: 55-81。

東京国立博物館

1993 『アイヌの工芸』東京国立博物館。

富尾賢太郎・上野千鶴子

1983 「贈与交換と商品交換」『現代思想』11(4) : 79-95。

鳥居龍藏

1894(1976) 「カンジキ及び其名称の分布」『鳥居龍藏全集 第12巻』朝日新聞社, pp. 109-116。

1896a(1975) 「カンジキに就てのギリヤーク語」『鳥居龍藏全集 第1巻』朝日新聞社, p. 617。

1896b(1975) 「発火用紐錐ニ就テノ二事実」『鳥居龍藏全集 第1巻』朝日新聞社, pp. 624-629。

1899(1976) 「千島土人製作の木偶」『鳥居龍藏全集 第7巻』朝日新聞社, pp. 443-445。

1903(1976) 「千島アイヌ」『鳥居龍藏全集 第7巻』朝日新聞社, pp. 1-98。

1904(1976) 「千島アイヌに就て」『鳥居龍藏全集 第7巻』朝日新聞社, pp. 425-435。

1913(1976) 「民族学上千島アイヌの位置」『鳥居龍藏全集 第12巻』朝日新聞社, pp. 700-706。

1919(1976) 「考古学民族学研究・千島アイヌ」小林知生訳『鳥居龍藏全集 第5巻』朝日新聞社, pp. 311-553。

1923(1976) 「日本周囲の民族と宗教に就いて」『鳥居龍藏全集 第7巻』朝日新聞社, pp. 506-512。

1924(1975) 「スキー及びカンジキに就いて」『鳥居龍藏全集 第1巻』朝日新聞社, pp. 617-624。

1925(1975) 「人類学上より見たる我が上代の文化(1)」『鳥居龍藏全集 第1巻』朝日新聞社, pp. 13-166。

1926(1976) 「極東民族 第1巻」『鳥居龍藏全集 第7巻』朝日新聞社, pp. 99-317。

1933(1976) 「北千島アイヌの仮面」『鳥居龍藏全集 第7巻』朝日新聞社, pp. 447-449。

1936(1976) 「滿蒙其他の思い出」『鳥居龍藏全集 第12巻』朝日新聞社, pp. 1-136。

1953(1976) 「ある老学徒の手記」『鳥居龍藏全集 第12巻』朝日新聞社, pp. 137-343。

宇田川洋

1988 『アイヌ文化成立史』北海道出版文化センター。

山浦 清

1989 「考古学から見た北千島の文化的位置付け」北方言語・文化研究会編『民族接触 北の視点から』六興出版, pp. 298-308。

湯川洋司

1976 「民具研究の方法」『民俗学評論』15: 2-11。

表5 クリールアイヌ民具類リスト

		【主要材質】	【備考】	【図版番号】
○生業活動——狩猟：19点				
1. 仕掛け弓（模型・箭）	K2328	木材	○後期	
2. 仕掛け弓（模型・箭）	K2330	木材	○後期	1-2
3. 仕掛け弓（模型・弓）	K2334	木材	○後期	
4. 仕掛け弓（模型・仕掛け）	K2374	木材	○後期	1-3
5. 仕掛け弓〔詳細不明〕	K2363			
6. 弓	K2332	木材・トドの筋	○後期	15-1
7. 弓（模型）	K2333	木材	○後期	
8. 弓（模型）	K2336	木材	○後期	
9. 箭	K2356	鯨骨・木材・鳥羽 ・海獣の腱	○後期	1-1
10. 箭（模型）	K2361	木材	○後期	
11. 鏃	函1149	骨	前期？	
12. 鏃	函1150	骨	前期？	
13. 鏃	函1151	骨	前期？	
14. 鏃	函1152	骨	前期？	
15. 弩〔千島〕	K2348	木材	○後期	
16. 鳥ヲ捕フル具	Fa23		○所在不明 ・後期	
17. 鋌	Fa36		○所在不明 ・後期	
18. 鋌先	函1172	骨	馬場・後期	
19. 雪眼鏡〔シュムシュ島〕	函1253	木材	前期	
○生業活動——漁撈：4点				
20. 船（模型）	K2335	木材	○後期	2-1
21. 船（模型）	K2338	木材	○後期	2-2
22. 手ガキ〔シュムシュ島〕	K2358	鉄・木材	前期	1-4
23. 船（模型）	K2379	木材	○後期	
○生業活動——栽培・農耕：2点				
24. 鎌〔シュムシュ島〕	函1178	鉄・木材	前期	
25. 土掘り道具〔パラムシル〕	K2365	鉄・木材		
○家事——料理・食事：27点				
26. まないた	K2310	木材	○後期	4-1
27. エベルニキ（女子用）	K2351	鉄・木材・樹皮・獣皮	○後期	2-3
28. エベルニキ（女子用）	Fa40		○所在不明 ・後期	
29. 発火具（木杵）	K2324	木材	○後期	3-3
30. 発火具（木臼）	K2340	木材	○後期	3-5
31. 発火具（弓）	K2350	木材・トドの皮	○後期	3-1
32. 発火具（木臼）	K2360	木材	○後期	
33. 発火具（木杵）〔シュムシュ島〕	K2345	木材	○後期	3-2

34. 発火具 (木臼) [シュムシュ島]	K2346	木材	○後期	3-4
35. 杓子	K2342	木材	○後期	写真 3
36. 杓子	K2343	木材	○後期	6-2
37. 杓子 [北海道]	K1948	木材		写真24
38. 杓子	K2388	木材		写真14
39. 杓子	北160	木材	後期	
40. 匙	函1085	木材	後期	
41. 匙	函1086	木材	後期	
42. 匙	函1095	木材	後期	
43. 団子籠	北161	木材		6-1
44. 椀	K2362	木材	○後期	5-1
45. 船形容器 [シュムシュ島]	函1081	木材	前期	7-1
46. 船形容器 [シュムシュ島]	函1082	木材	前期	
47. 船形容器 [シュムシュ島]	函1083	木材	前期	
48. 木盆	K2367	木材	○後期	写真 4
49. 木盆	K2368	木材	○後期	5-2
50. 木盆	北10250	木材		
51. 小樽	K2312	木材		
52. 鍋	K2390	鉄		7-2
○家事——育児・教育：5点				
53. 小児負	K2313	木綿布・木材・獣皮	○後期	写真 5
54. 小児負	K2339	木綿布・木材・獣皮	○後期	8-1a, 9-1b
55. 小児負 (「背負縄」)	北190	ハマニソニク・木綿糸 ・木綿布・獣皮	後期	
56. 木偶	Fa74	木材・鳥皮・布 ・鯨の筋・トド皮	○後期	
57. 木偶 [シュムシュ島]	函1182	木材	馬場 (考古)	13-4
○家事——裁縫・工作：9点				
58. 編物	K2322	木綿糸・ハマニソニク	○後期	
59. 針入れ	K2349	木綿布	○後期	10-1
60. 針入れ (縫針付き)	K2380	木綿布・鉄	○後期	写真 6
61. エベルニキ (男子用)	K2354	(鉄)・木材・海獣の腱	○後期	写真 7
62. エベルニキ	K2370			
63. エベルニキ	K2372			
64. 斧	K2369	鉄		11-1
65. Chiota mukara [パラムシル島]	K2371	鉄		11-2
66. 足型	K2377	木材・獣皮	○後期	写真 9
○家事——雑事：38点				
67. 編み容器 (テンキ)	K2314	ハマニソニク	○後期	
68. 編み容器 (テンキ)	K2315	ハマニソニク	○後期	
69. 編み容器 (テンキ)	K2316	ハマニソニク	○後期	
70. 編み容器 (テンキ)	K2317	ハマニソニク	○後期	

71. 編み容器 (テンキ)	K2318	ハマニソニク	○後期	
72. 編み容器 (テンキ)	K2352	ハマニソニク・木綿糸	○後期	11-3
73. 編み容器 (テンキ)	函1096	ハマニソニク	馬場・後期	
74. 編み容器 (テンキ)	函1097	ハマニソニク	馬場・後期	
75. 編み容器 (テンキ)	函1205	ハマニソニク	前期	
[シュムシュ島]				
76. 編み容器 (テンキ)	函1207	ハマニソニク	後期	
77. 編み容器 (テンキ)	北10462	ハマニソニク		
78. 編み容器 (テンキ)	北10463	ハマニソニク		
79. 編み容器 (テンキ)	北35367	ハマニソニク		
80. 編み容器 (テンキ)	開11353	ハマニソニク		
81. 編み容器 (テンキ)	開11354	ハマニソニク		
82. 編み容器 (テンキ)	開11355	ハマニソニク		
83. 編み容器 (盆形)	K2319	ハマニソニク	○後期	
84. 編み容器 (盆形)	北35368	ハマニソニク		
85. 編み容器 (盆形)	開・整理中	ハマニソニク		
86. 編み容器 (盆形)	開・整理中	ハマニソニク		
87. 編み容器 (杯台)	北10461	ハマニソニク		
[エトロフ島]				
88. 編み容器 (菓子入れ)	北10297	ハマニソニク	後期	
89. 編み容器 (菓子入れ)	開・整理中	ハマニソニク		
90. 編み容器 (名刺入れ)	開・整理中	ハマニソニク		
91. 編み物 (帽子)	北10465	ハマニソニク		
[エトロフ島]				
92. 編み物 (帽子)	開11356	ハマニソニク		
93. 編み容器 (小物入れ)	北9868	ハマニソニク	前期?	
[エトロフ島]				
94. 編み容器 (小物入れ)	函1208	ハマニソニク	前期	
[シュムシュ島]				
95. 縄	K2364	草	○後期	
96. 暦	K2347	木材	○後期	11-5
97. 三弦琴 [シムシル島]	函988	木材	前期	
98. 三弦琴 [胆振]	函989	木材		
99. 三弦琴	函1218	木材	後期	
100. 三弦琴	函1219	木材	後期	
101. 三弦琴	北9486	木材		
102. 煙草入れ	函1210	木材	馬場・後期	11-4
103. パイプ	函1215	牙	馬場・後期	
104. 小宮	旭4960	木材	後期	15-2

○服飾——衣服：11点

105. 衣服	K2387	木綿布	○後期	
106. 衣服	函1028	木綿布	後期	
107. 衣服	Fa28	鳥皮	○後期	
108. 衣服	北80	鳥皮	後期	

109. 衣服	北81	鳥皮	後期	
110. 衣服	函・整理中	海獣皮		
111. 腰帶	K2382	木綿布	○後期	写真22
112. 腰帶	K2383	木綿布・(海) 獣皮	○後期	
113. 腰帶	K2384	木綿布	○後期	写真23
114. 腰帶	K2385	木綿布	○後期	写真20
115. 腰帶	K2386	木綿布・(海) 獣皮	○後期	9-2
○服飾——装身具：6点				
116. 帶留	Fa70	木材	○所在不明 ・後期	
117. 帶留	Fa71	木材	○後期	
118. 帶留	Fa72	木材	○所在不明 ・後期	
119. 帶留	Fa73	木材・獣皮・鳥毛 ・鳥嘴	○所在不明 ・後期	
120. 櫛	Fa37	木材	○所在不明 ・後期	
121. 櫛 [シュムシュ島]	Fa38	骨?	○所在不明 ・後期	
○服飾——履物・被物：6点				
122. 長靴	K2376	トド皮	○後期	
123. 長靴 [エトロフ島]	K2255	トド皮	○後期	
124. 長靴	K2375			
125. 長靴	北9459	トド皮	後期	
126. 長靴 [シュムシュ島]	函1080	アザラシ皮	前期	
127. カンジキ	K2311	木材・獣皮	○後期	写真11
○服飾——携帯具：11点				
128. 物入れ (男子用)	K2320	ハマニンニク	○後期	14-1
129. 物入れ (女子用)	K2381	ハマニンニク・木綿布	○後期	写真12
130. 物入れ [シュムシュ島]	函1098	ハマニンニク・獣皮	前期	
131. 物入れ [シュムシュ島]	函1099	ハマニンニク・獣皮	前期	
132. 物入れ [シュムシュ島]	函1100	ハマニンニク・獣皮	前期	
133. 物入れ	函1206	ハマニンニク・獣皮	前期?	
134. 物入れ	函1209	ハマニンニク	馬場・後期	
135. 物入れ [エトロフ島]	北9865	ハマニンニク	前期	
136. 火道具入れ [千島]	K2323	鮫皮・鹿角・金属	○後期	写真13
137. 火道具入れ [千島]	K2359	海獣皮	○後期	12-1
138. 火道具入れ [千島]	K2373	海獣皮・鹿角・金属	○後期	写真13
○儀礼・信仰——儀礼・信仰：11点				
139. 削り掛け	K2325	木材	○後期	
140. 削り掛け	K2326	木材	○後期	
141. 削り掛け	K2327	木材	○後期	13-1
142. 削り掛け	函1179		後期	

小杉 物質文化からの民族文化誌的再構成の試み

143. 酒箸（模型）	K2341	木材	○後期	13-2
144. 酒箸	K2331	木材		
145. 幣	K2353	木材	○後期	
146. 男子儀礼用鉢巻	K2366	木材	○後期	
147. 仮面（模型）	K2378	木材	○後期	12-2
148. 祭具 [ラシ ョ ワ 島]	K2321	木材	○前期？	13-3
149. 墓標（模型）	K2344	木材	○後期	写真 1
○原材料・食物——原材料：4 点				
150. 土器作り用具	K2337	草	○後期	写真 2
151. 建築材料用草	K2357	草	○後期	
152. テンキグサ [エトロフ島]	北9869	(ハマニソニク)	前期	
153. 角 [パラムシル島]	函1220		前期？	
○原材料・食物——食物：1 点				
154. 食物 [千島]	K2355	木の実	○後期	
○その他 3 点				
155. 住居模型	Fa77		○所在不明 ・後期	
156. 紐付き棒	K2329			
157. 木具	K2389			

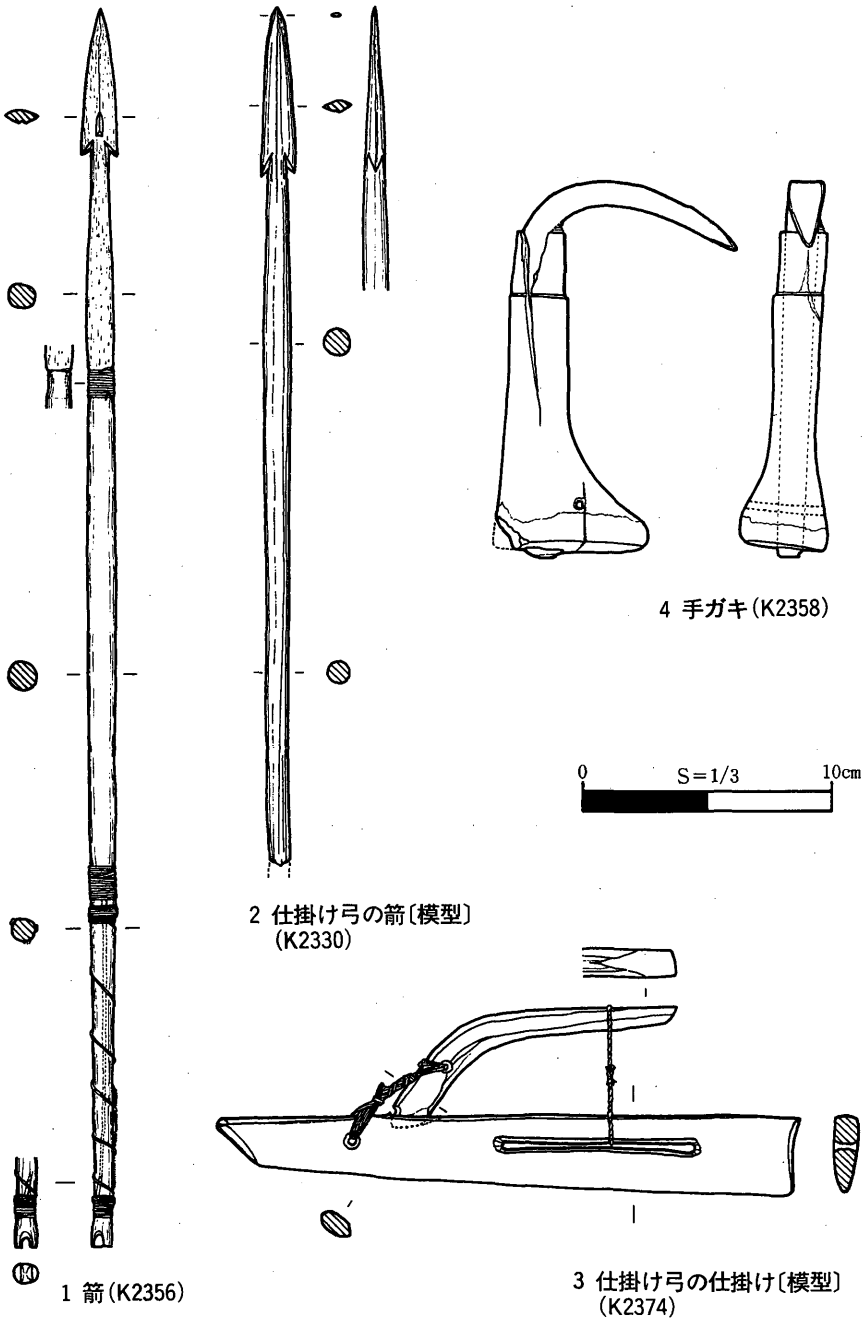
* 考古資料は本文中で言及した57(函1182) のみを掲載する。

* 資料番号については本文註 2・3 参照。

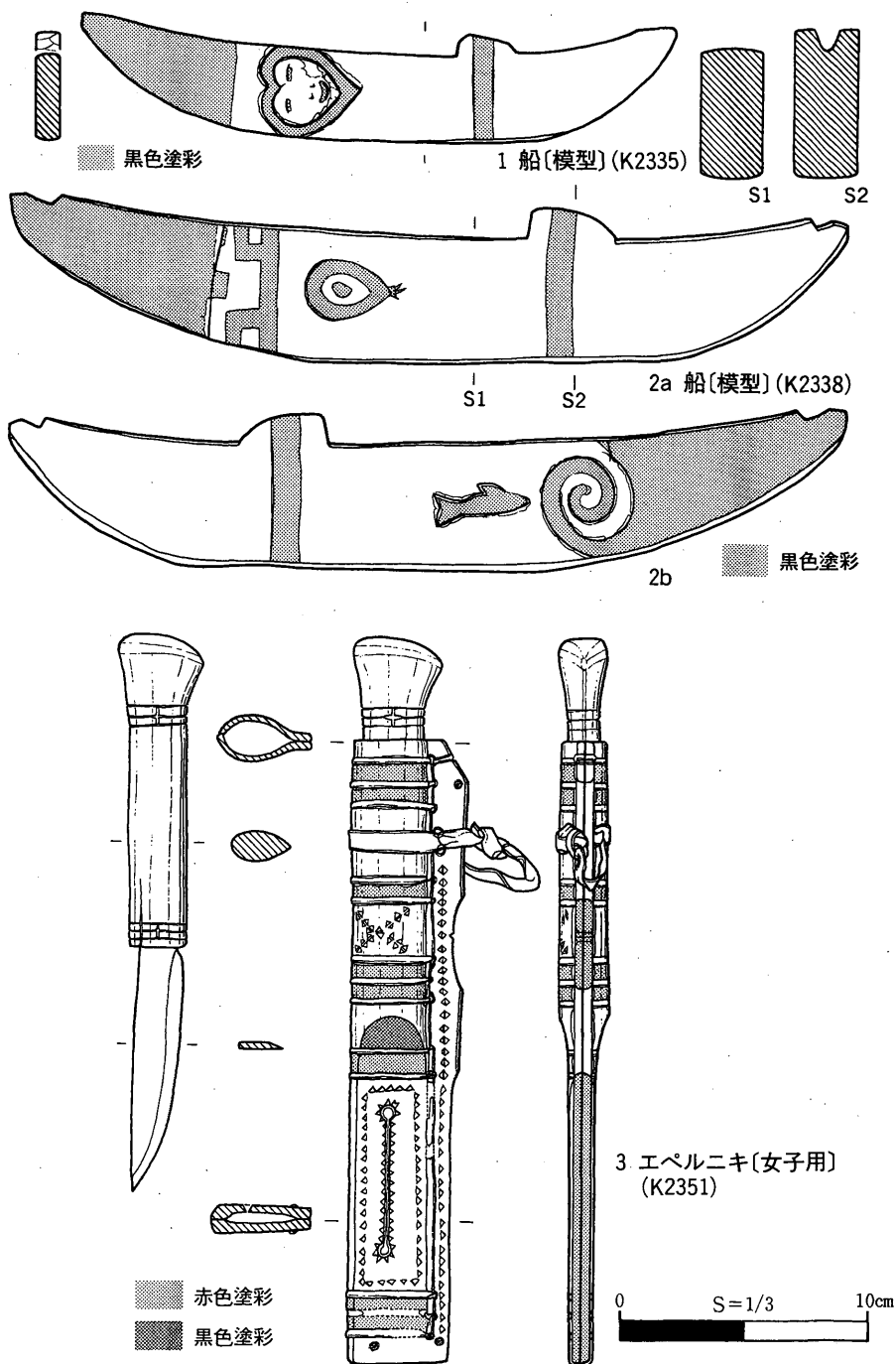
* 備考欄の「○」印は鳥居龍蔵の収集品を示す。

* 備考欄の「馬場」は馬場コレクションを示す。

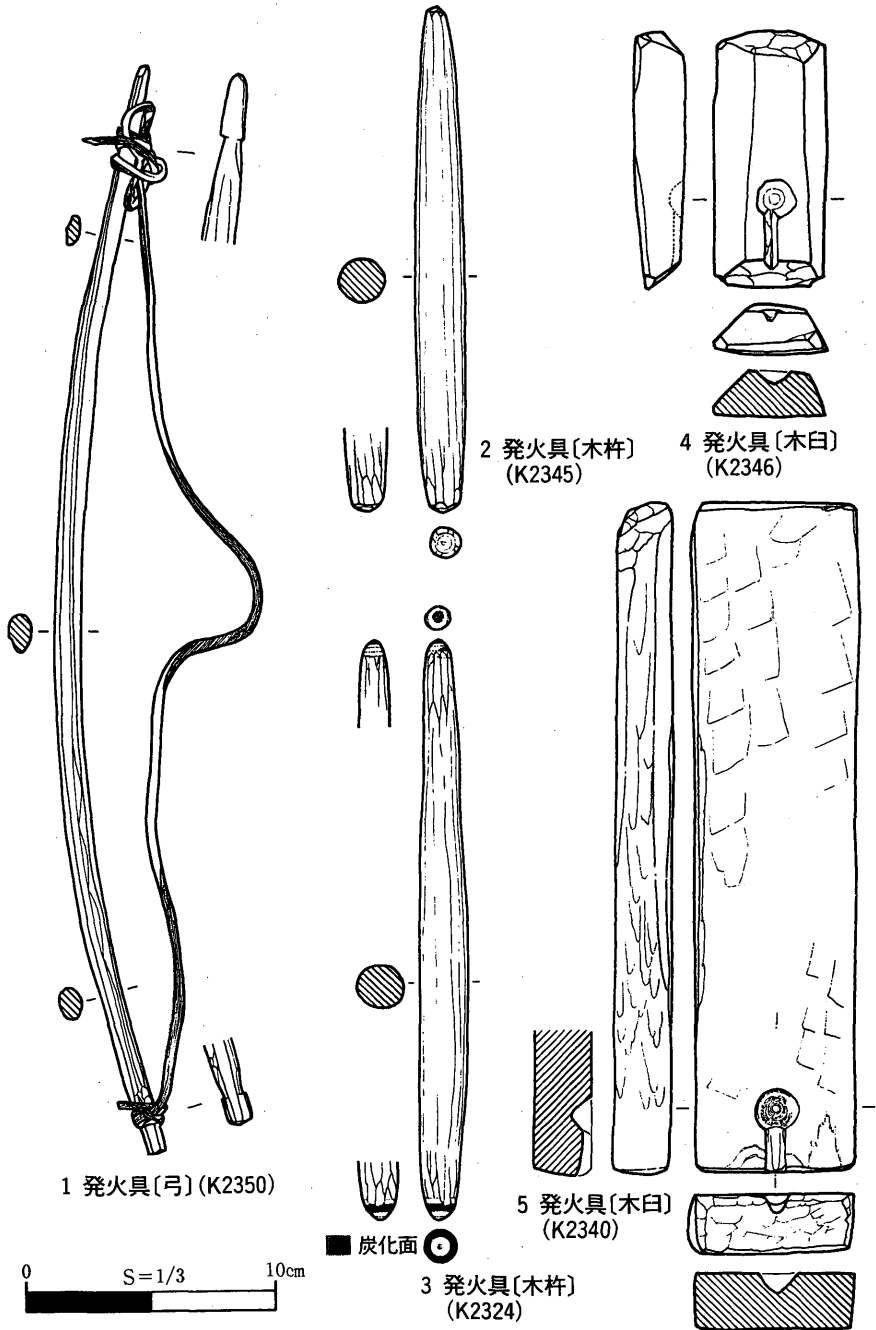
* 備考欄の「前期」は前期民具類, 「後期」は後期民具類を示す (第Ⅲ章参照)。



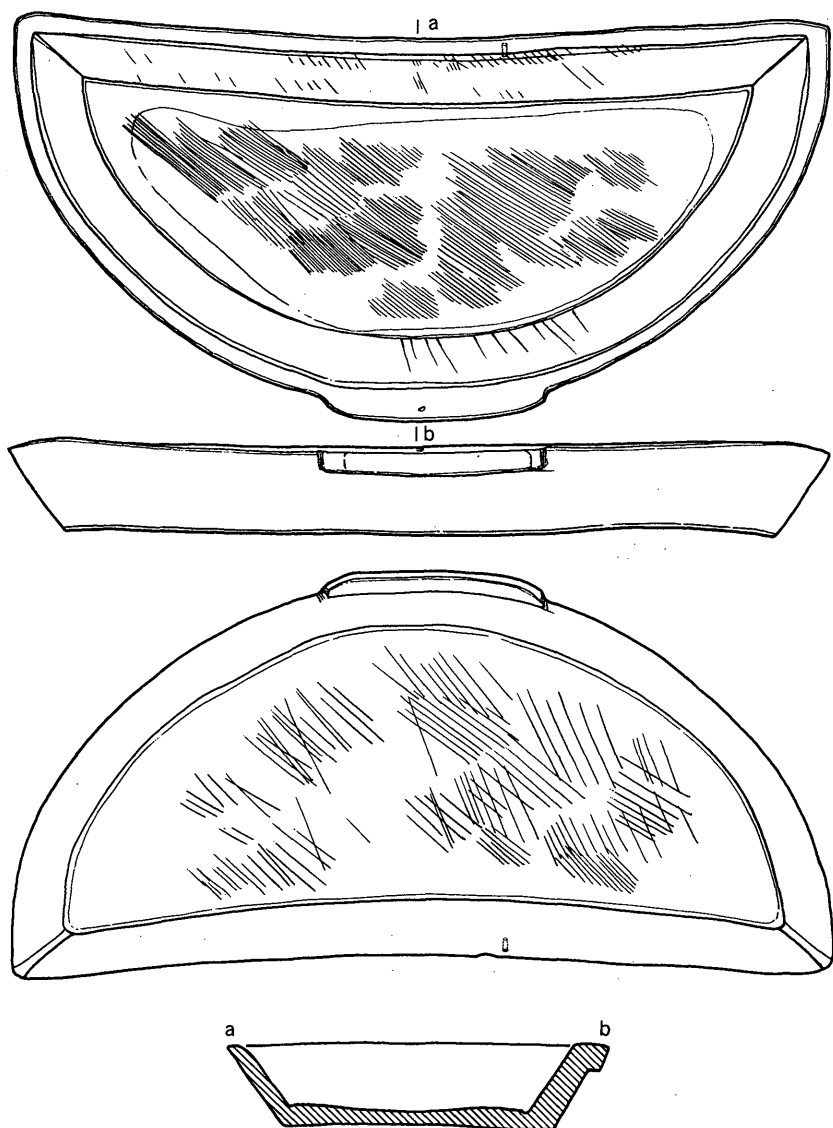
図版1 クリールアイヌ民具類実測図 (1) 箭, 仕掛け弓〔模型〕, 他



図版2 クリールアイヌ民具類実測図(2) 船〔模型〕, エベルニキ



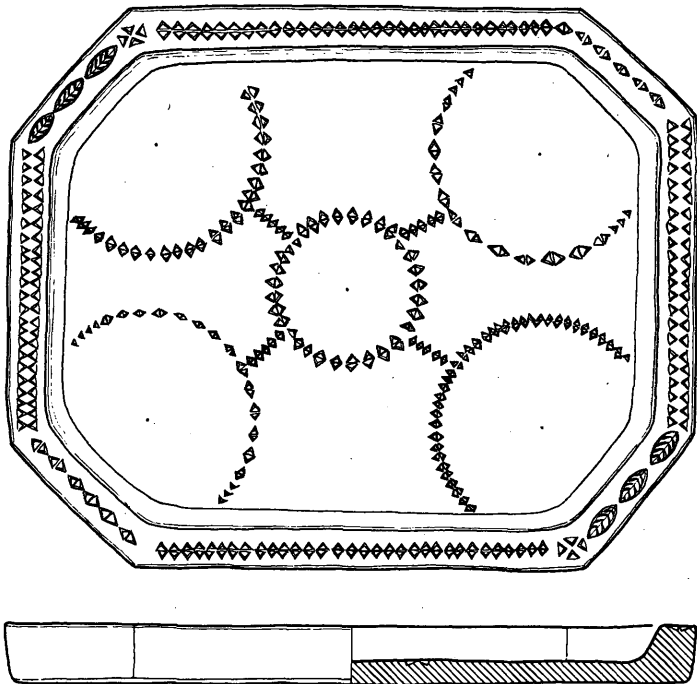
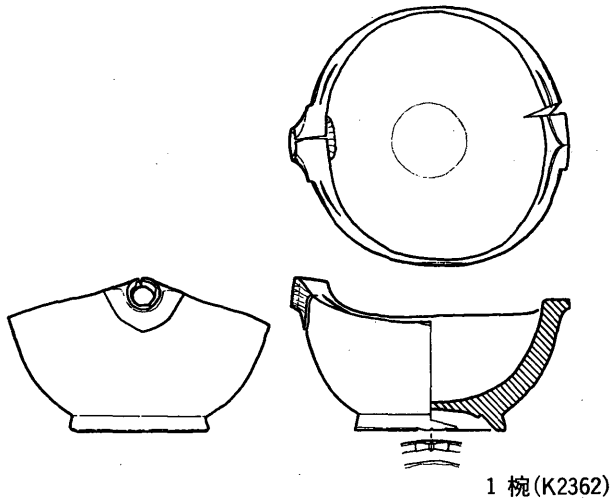
図版3 クリールアイヌ民具類実測図(3) 発火具



1 まないた (K2310)

0 S=1/6 20cm

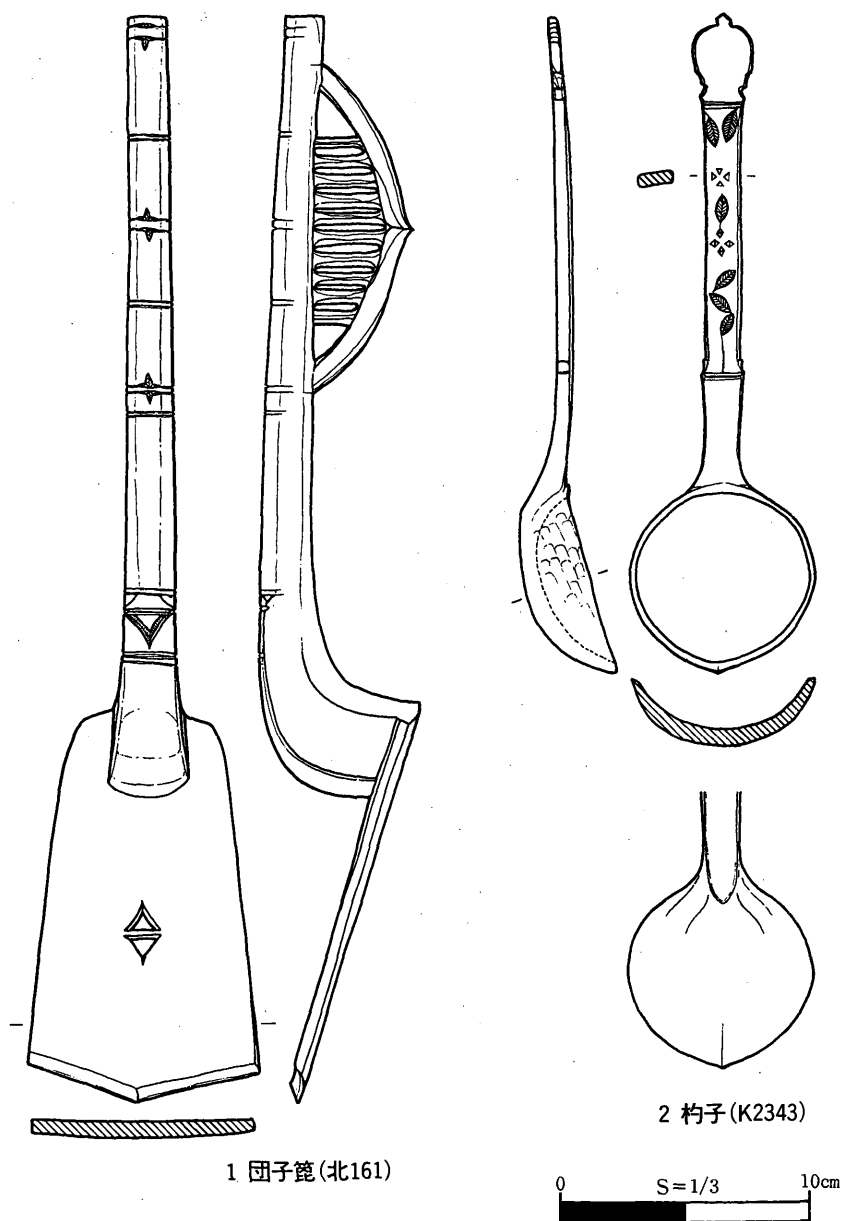
図版 4 クリールアイヌ民具類実測図 (4) まないた



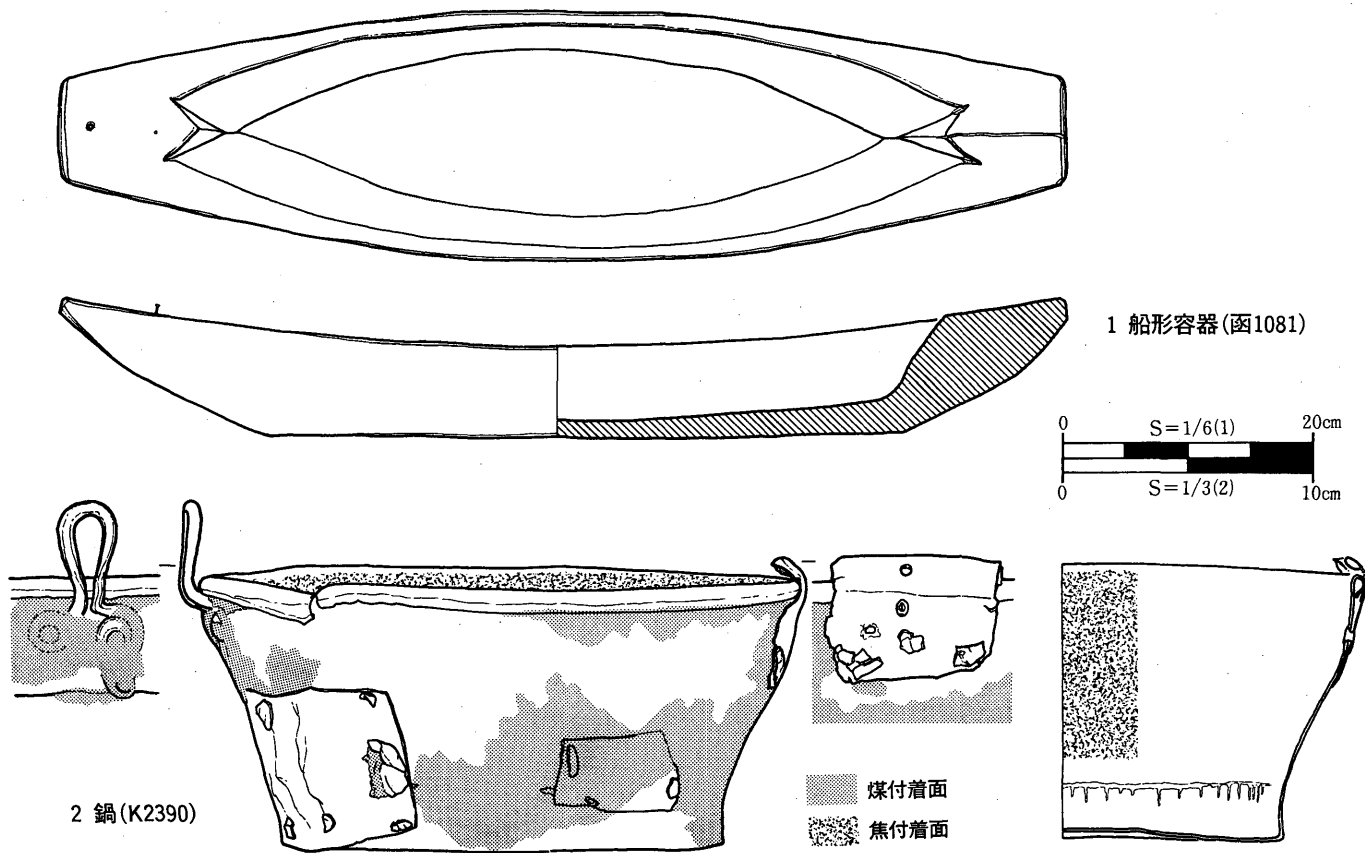
2 木盆(K3268)

0 S=1/3 10cm

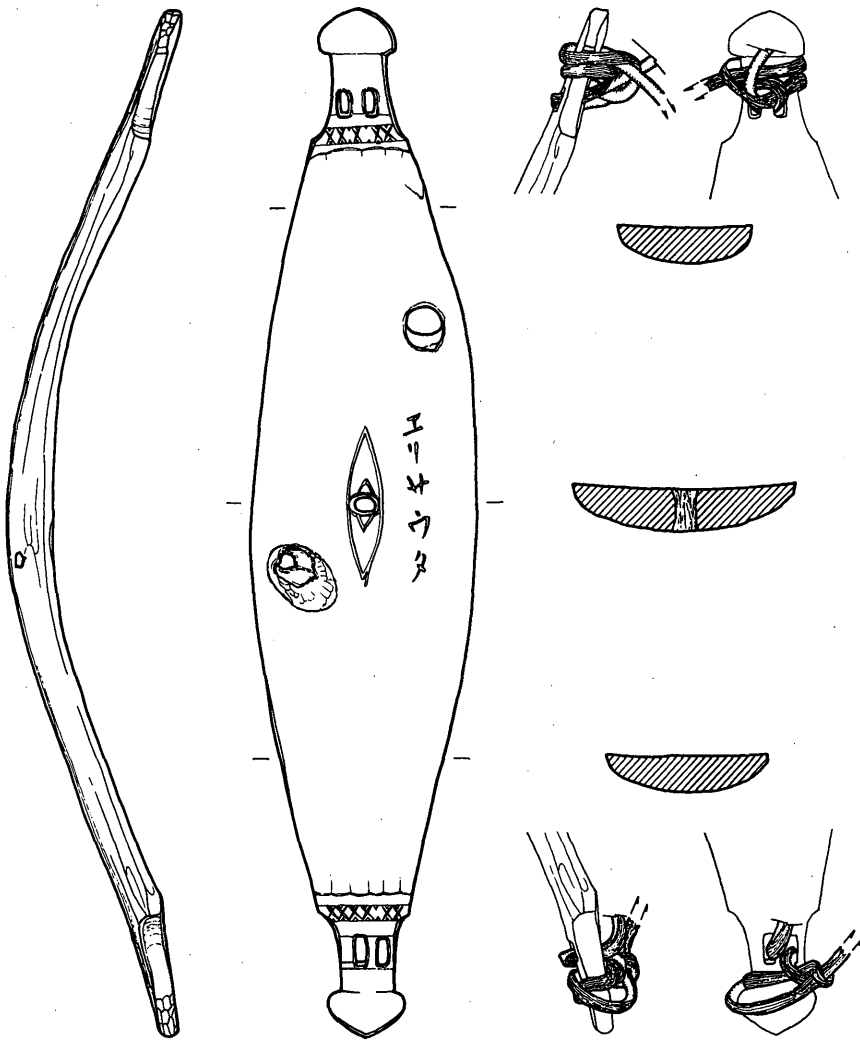
図版 5 クリールアイヌ民具類実測図(5) 碗, 木盆



図版6 クリールアイヌ民具類実測図(6) 団子篋, 杓子



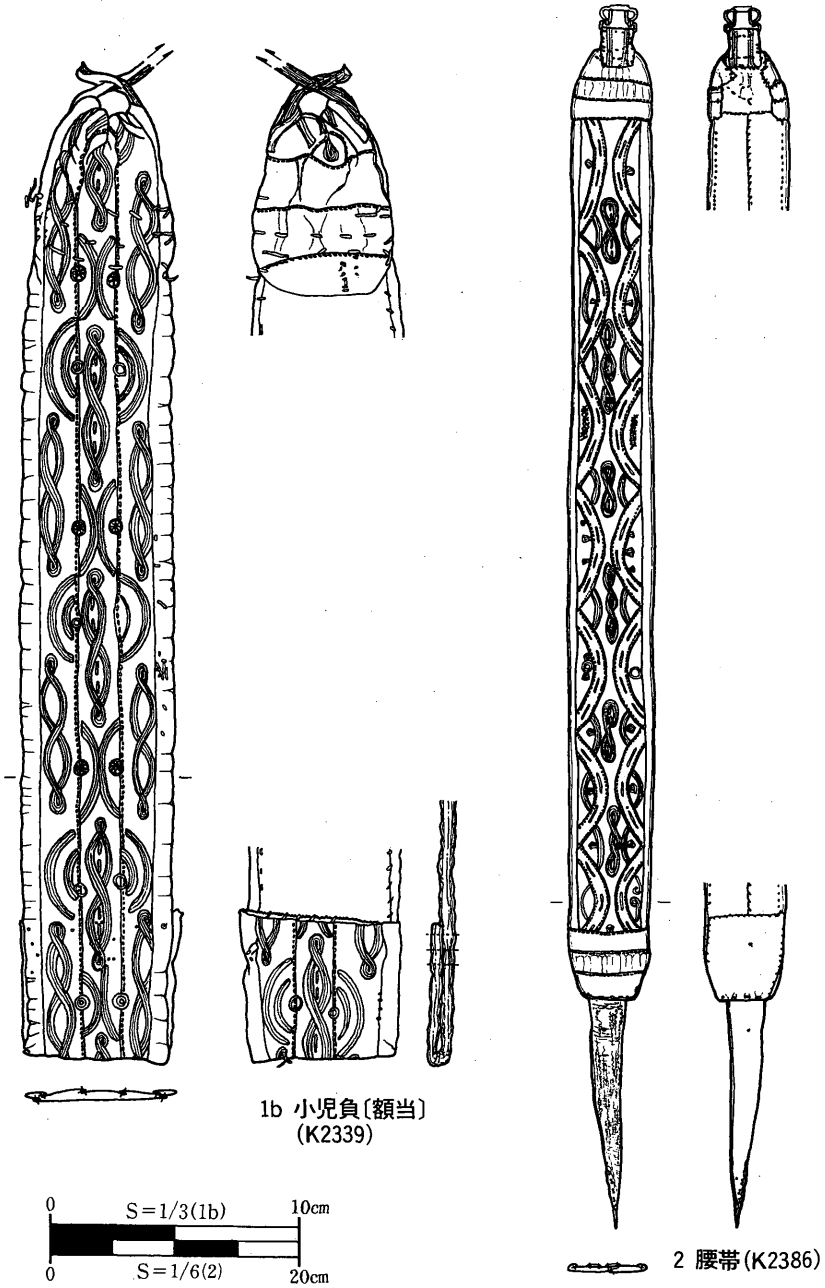
図版7 クリールアイヌ民具類実測図(7) 舟形容器, 鍋



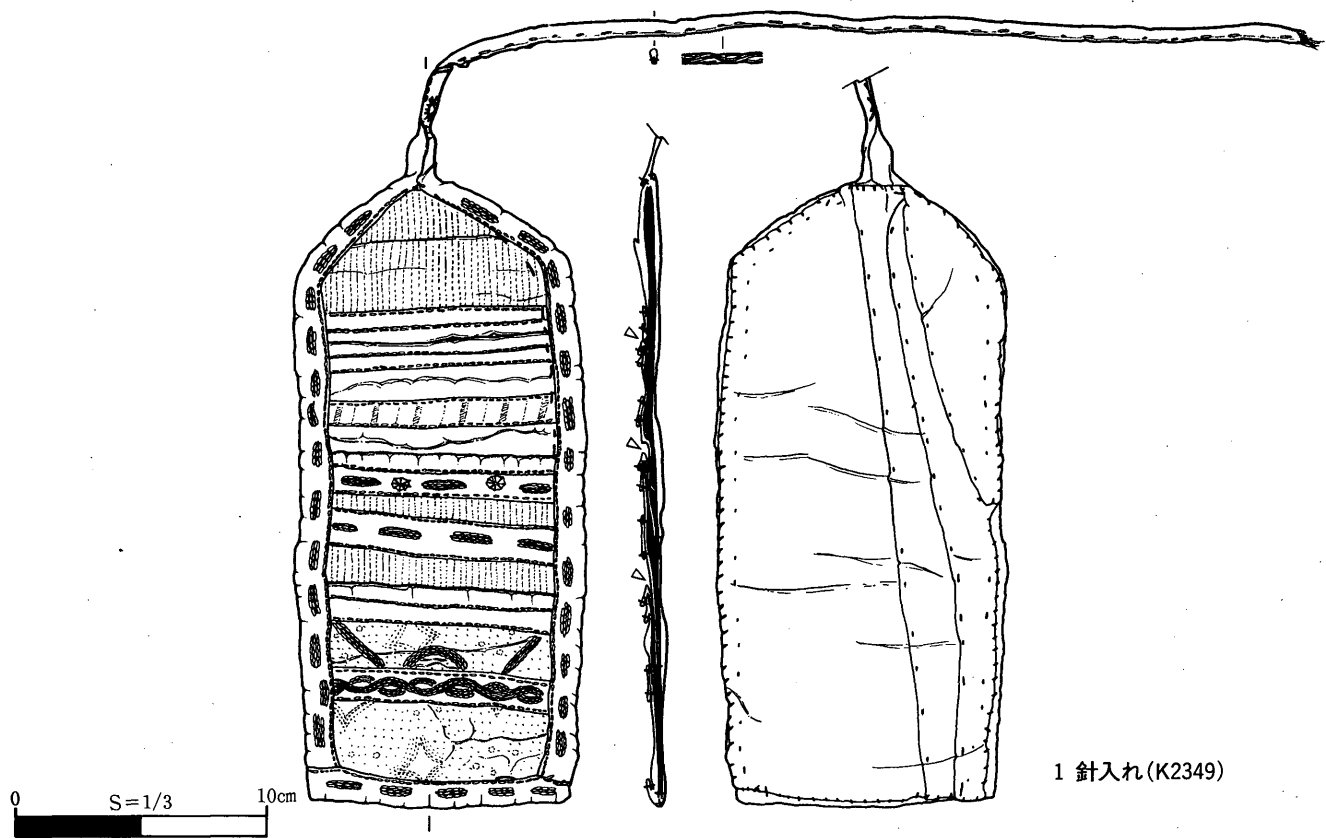
1a 小児負〔腰掛け〕
(K2339)

0 S=1/3 10cm

図版 8 クリールアイヌ民具類実測図 (8) 小児負〔腰掛け〕

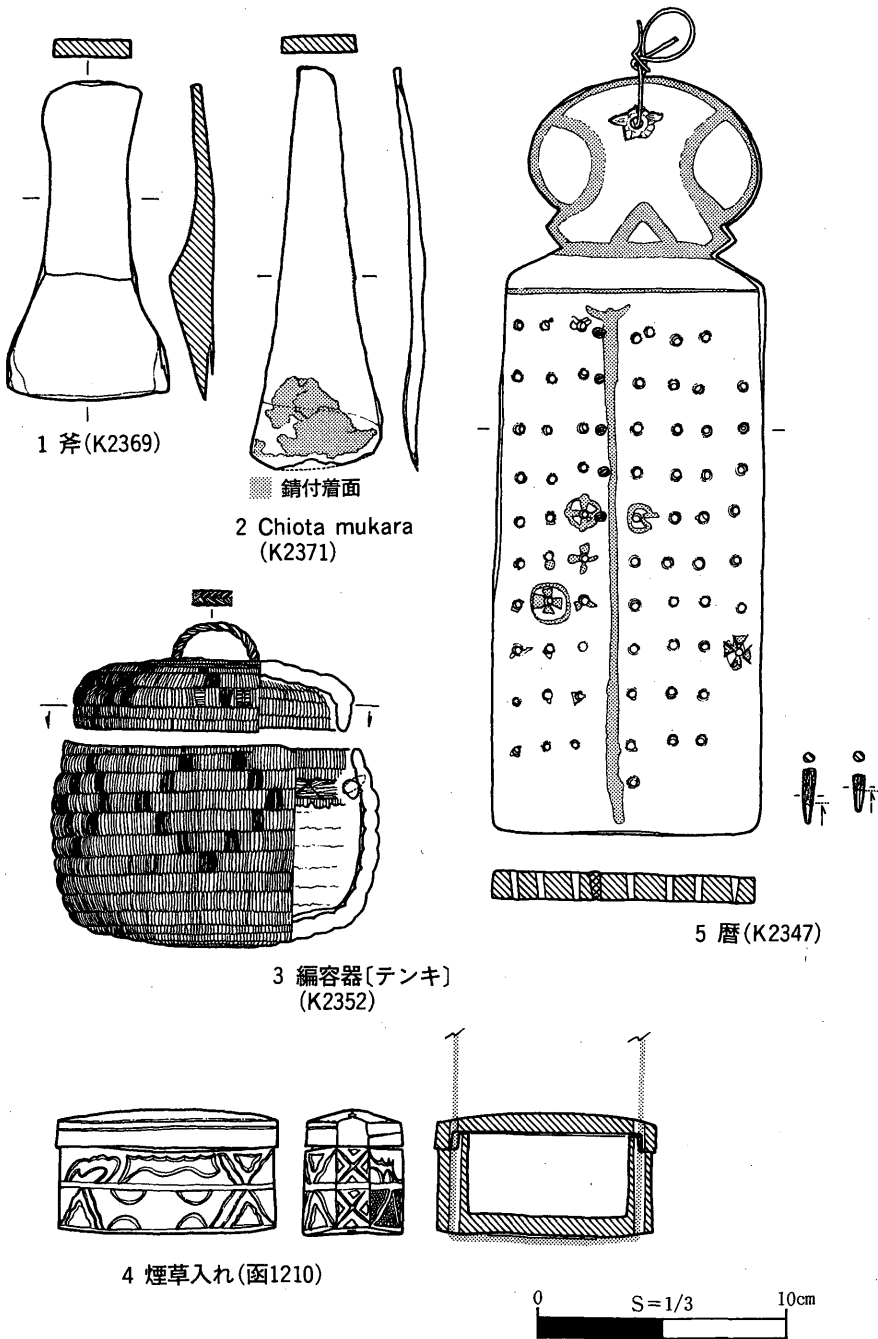


図版9 クリールアイヌ民具類実測図(9) 小児負〔額当〕, 腰帯

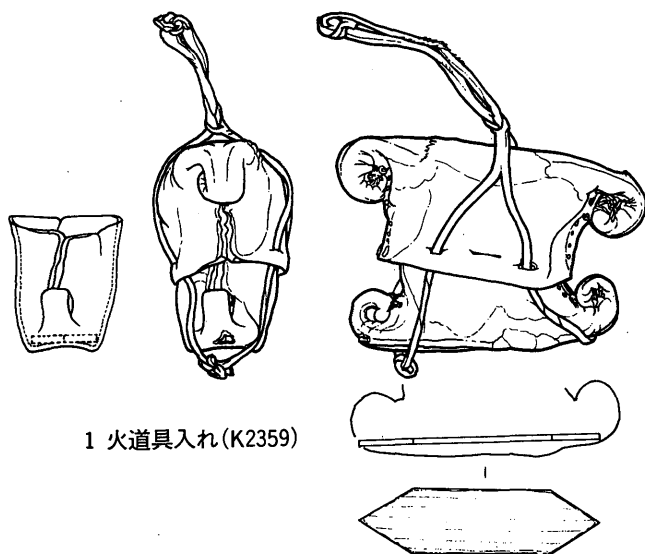


1 針入れ (K2349)

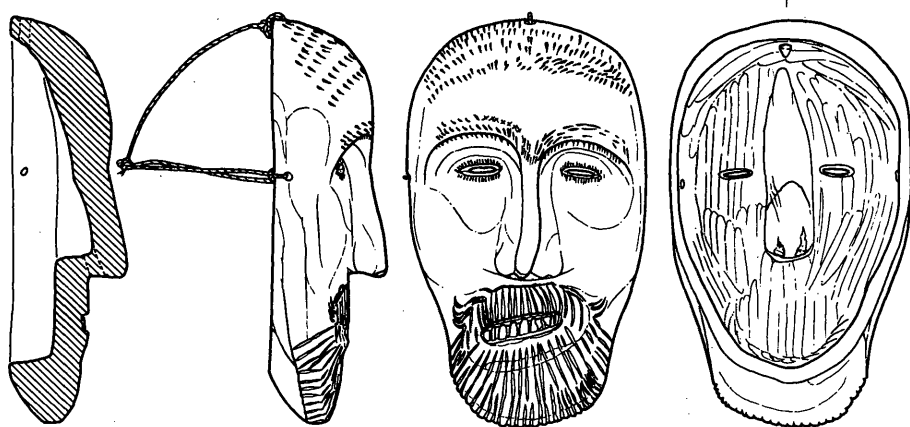
図版10 クリールアイヌ民具類実測図 (10) 針入れ



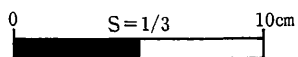
図版11 クリールアイヌ民具類実測図 (11) 斧, 編容器, 他



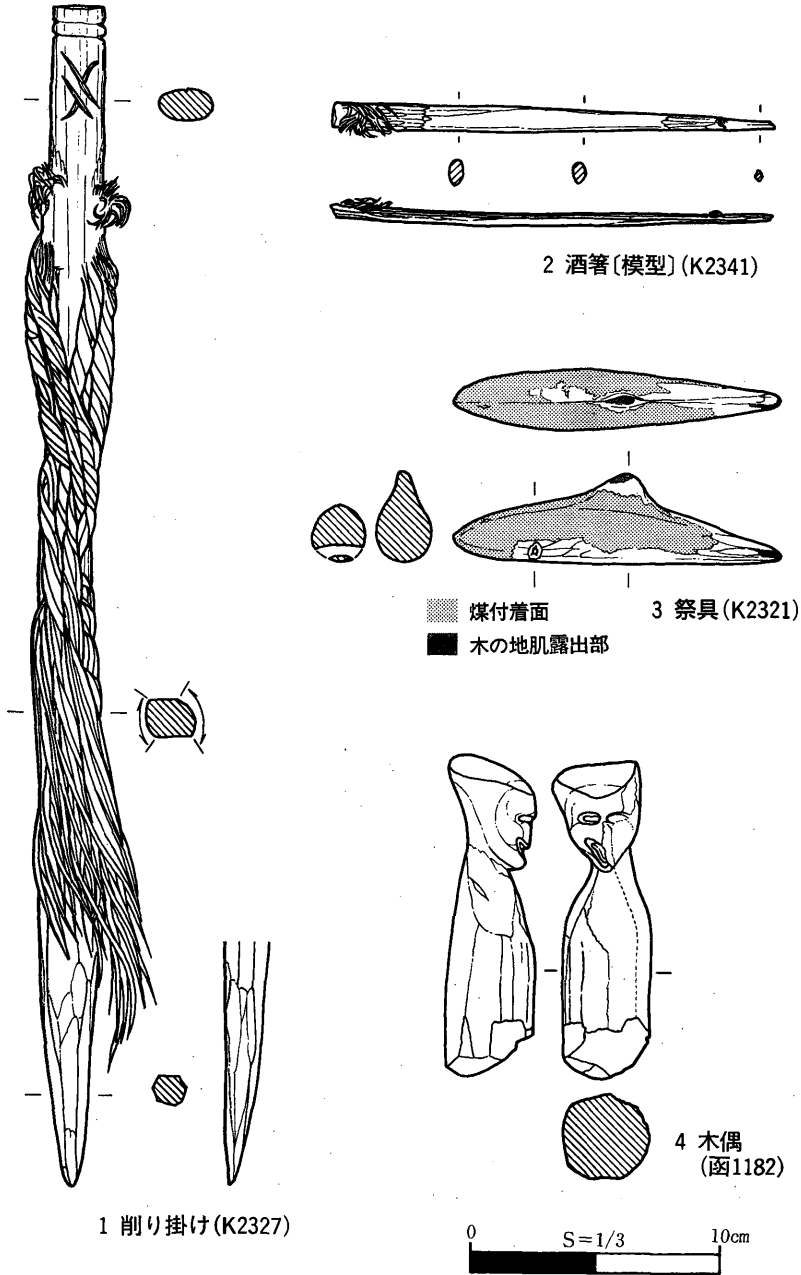
1 火道具入れ(K2359)



2 仮面〔模型〕(K2378)



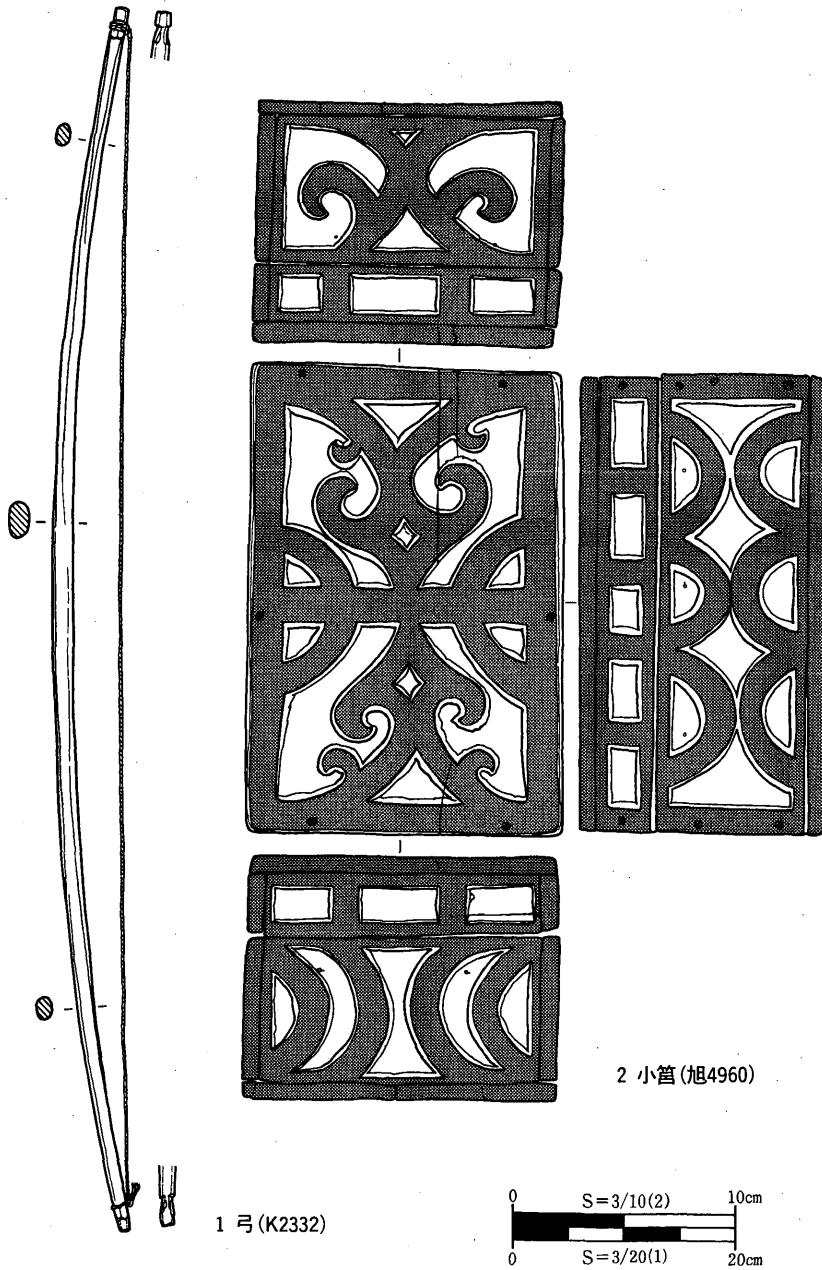
図版12 クリールアイヌ民具類実測図 (12) 火道具入れ, 仮面〔模型〕



図版13 クリールアイヌ民具類実測図 (13) 削り掛け, 酒箸 [模型], 他



図版14 クリールアイヌ民具類実測図 (14) 物入れ



図版15 クリールアイヌ民具類実測図 (15) 弓, 小筥